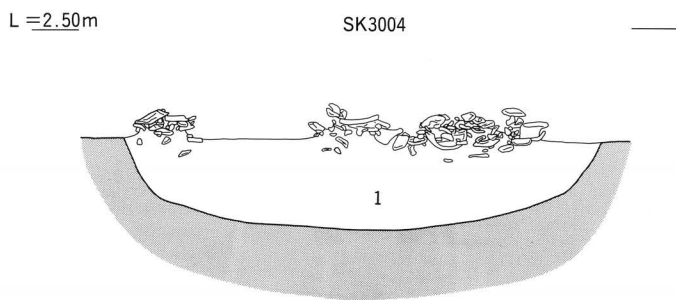


1 暗灰黄色2.5 Y 4/2粘質土



1 暗灰黄色2.5 Y 4/2粘質土



第81図 SK3004・3005実測図

土坑 4 (SK3004) (第81図)

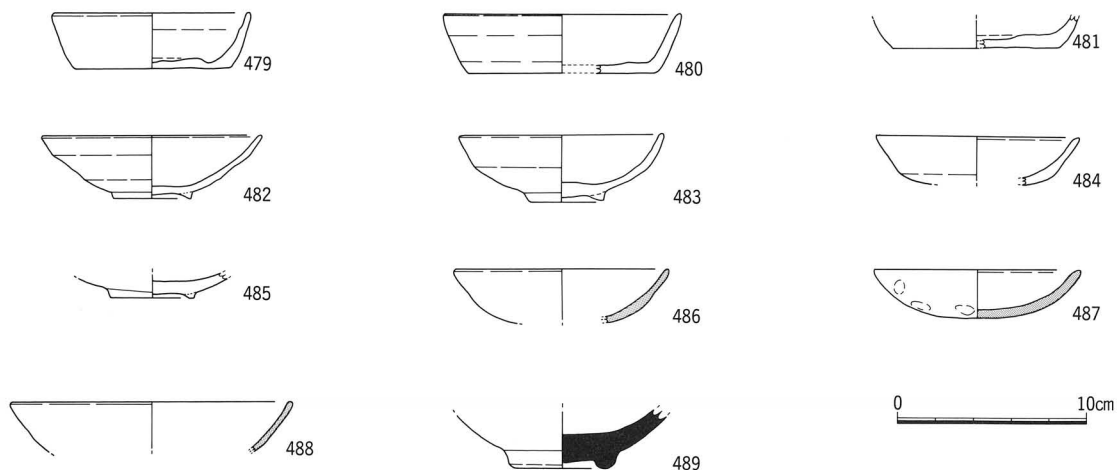
B-9で検出した不整形の土坑で、SK3003の南側に位置する。北西の一部はSK3005に切られるが、長軸1.46m、短軸1.06mを測る。断面は浅いすり鉢状を呈し、深さは0.24mである。埋土は炭化物を多量に含んだ暗灰黄色粘質土1層であるが、埋土中から多量の土器等が出土している。土器類を投棄した土坑と捉えられる。

出土遺物 (第82図)

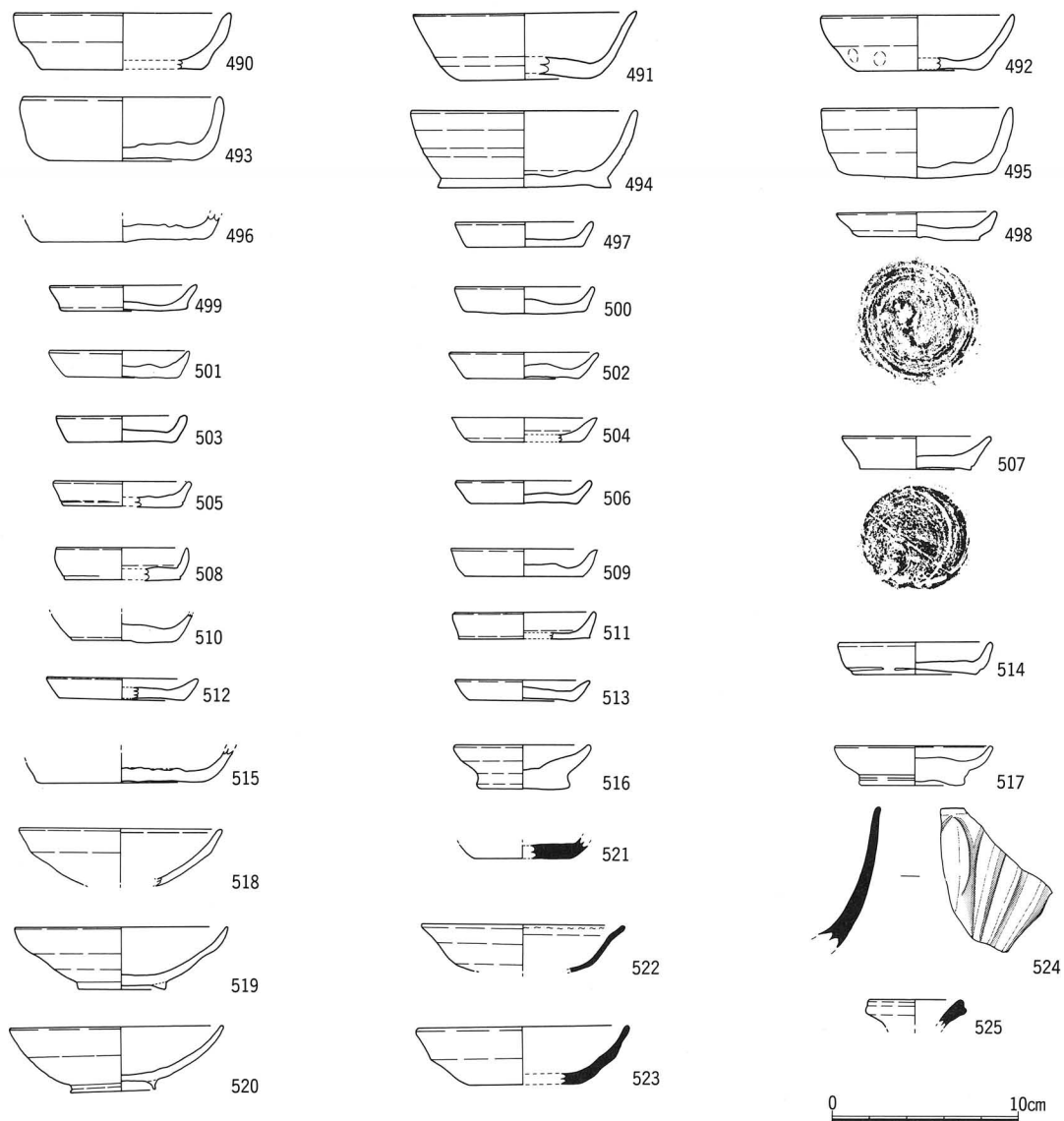
479～481は土師質の杯である。479は底部内面に凹凸があり、口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。底部外面に回転ヘラ切り痕を留める。481の底部切り離しは回転糸切りである。482～485は土師質の椀で、いずれも吉備系土師器椀である。全体に口径・器高が狭小で、山本吉備系土師器椀類型のⅢ-3期C3類に相当する。486～488は瓦器椀である。いずれも和泉型であるが、炭素の吸着が不十分で、灰色を呈する。森島編年のⅣ-4に比定される。489は青磁碗の底部である。底部はかなり厚く、高台先端部は少し丸くなっている。

土坑 5 (SK3005) (第81図)

B-8・9で検出した。SK3004の西側に位置し、一部SK3004を切って掘り込んでいる。長軸1.35m、短軸1.06mを測り、平面形は不整形楕円形を呈する。断面形は浅いすり鉢状で、深さは0.19mを測り、埋土は炭化物を多量に含んだ暗灰黄色粘質土1層である。この土坑からは、ほぼ掘方全体にわたり土器・石片等が相当折り重なって出土しており、土器溜まりの様相を示している。この土坑の性格は、SK3003・SK3004と同様に考えられるが、SK3004の一部を切って構築されていることから、両者間に新旧関係が認められる。



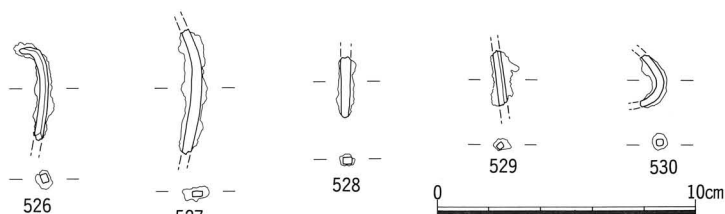
第82図 SK3004出土遺物実測図



第83図 SK3005出土遺物実測図 (1)

出土遺物 (第83・84図)

490～496は土師質の杯である。495の底部切り離し技法は不明であるが、他はいずれも回転糸切りによる。494は法量がやや大きく、体部外面下位の削り出しによって底部との境に段がついている。497～515は土師質



第84図 SK3005出土遺物実測図 (2)

の皿である。497～501は底部外面に回転ヘラ切り痕を留め、ナデ消している。502～515は回転糸切り痕を留める。516・517は高台付の皿であるが、516は回転糸切り痕を留め、体部内面に丁寧なナデを施す。517は底部がやや上げ底で状で、外面に回転糸切り痕を留める。518～520は吉備系土師器碗である。山本吉備系土師器碗類型のⅢ-3期C3類に相当する。

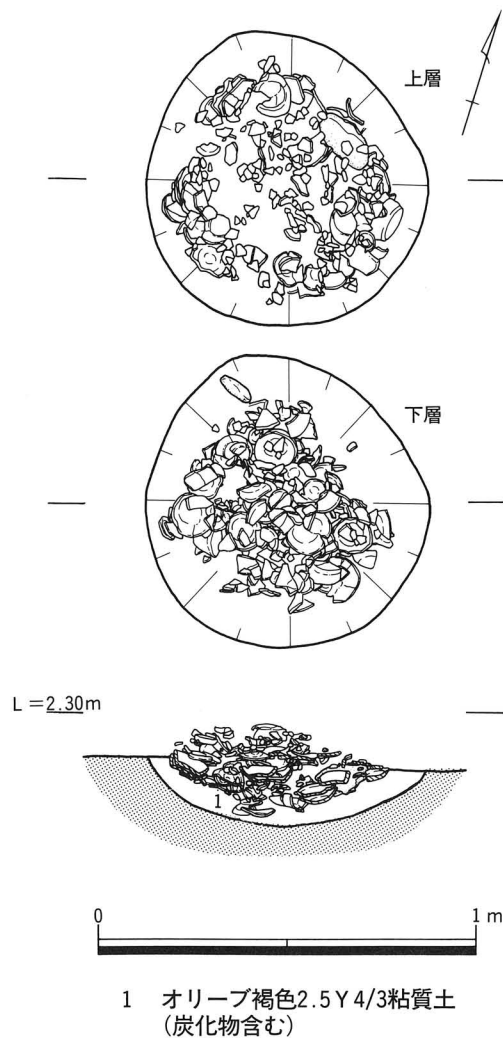
523は陶器碗で、体部は内彎し、口縁部は少し肥厚している。体部内外面にロクロナデを施し、底部外面には回転糸切り痕を留める。色調は灰白色で、備前焼の碗と見られる。521・522は白磁皿であるが、522は口縁部が外反し、端部は釉が掻き取られ、「口禿」となっている。横田・森田分類案の白磁皿Ⅸ-1 d に分類される。524は青磁碗の体部片で、外面に鎬蓮弁文を有す。525は陶器の口縁部である。端面は凹面となっており、外面に淡青白色の釉を施し、色調は灰白色である。瀬戸焼の瓶子と見られる。526～530は鉄釘である。

土坑 6 (SK3006) (第85図)

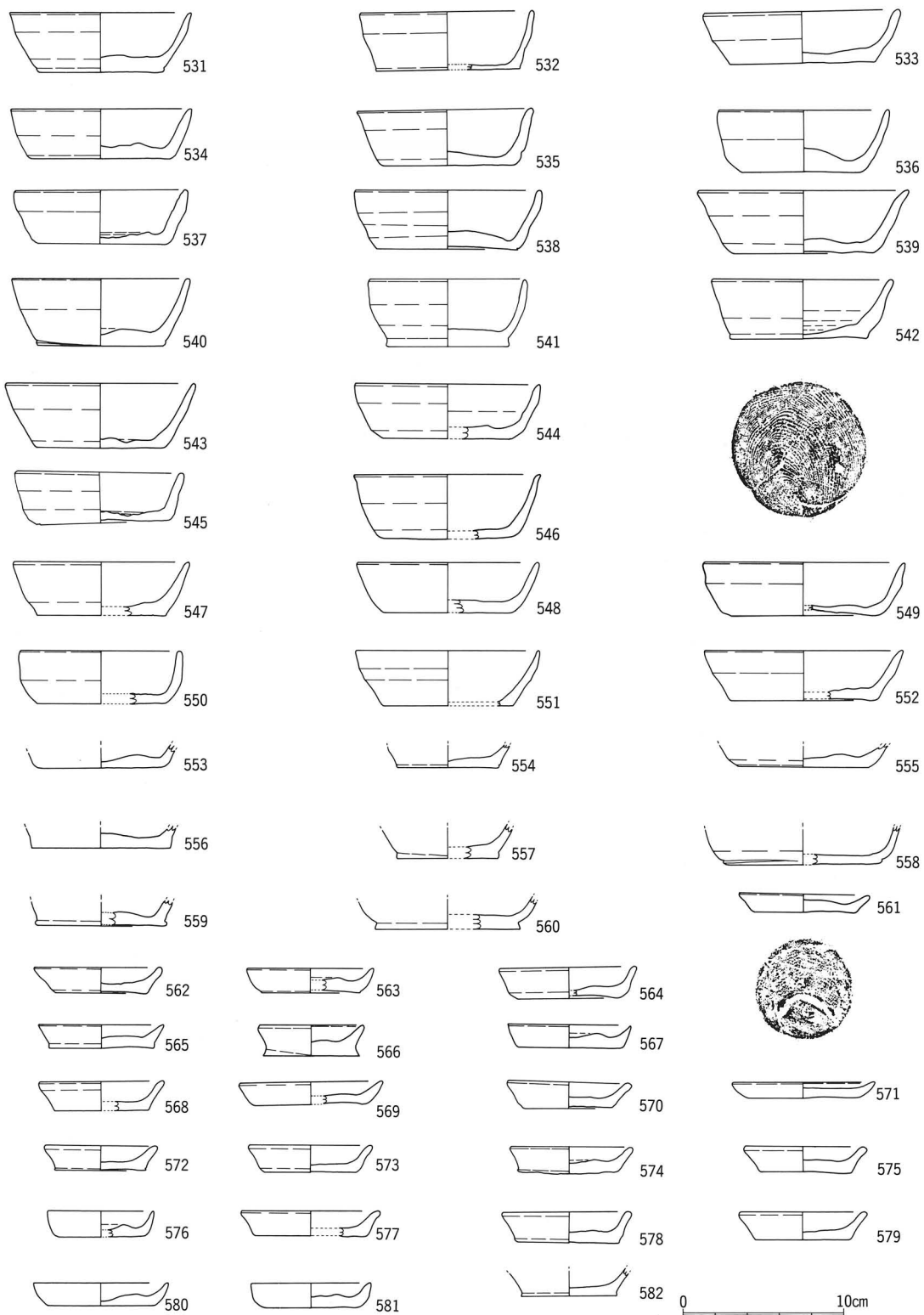
B-8で検出した円形状の土坑で、長軸0.76m、短軸0.74mを測る。深さは0.18mで、断面形は浅いすり鉢状を呈する。この土坑からは、ほぼ掘方一杯に多量の土器片が折り重なって出土し、土器の堆積が最も厚いところで0.25mを測る。出土遺物の大半は土師質土器の細片であるが、一部完形の杯・碗、さらには白磁皿の破片を含み、その量はコンテナ約1箱分に相当しており、良好な一括資料を提供している。遺物の出土状況から、この土坑はSK3003・3004・3005と同様に使用済みの土器等を廃棄した土坑と考えられる。この土坑はSK3004・3005の西側に近接していることから、これらの土坑群が位置する地点が廃棄場として使用されたことが想定される。SK3003～3006・SA3005・SA3006の北東部に近接して位置している。

出土遺物 (第86・87図)

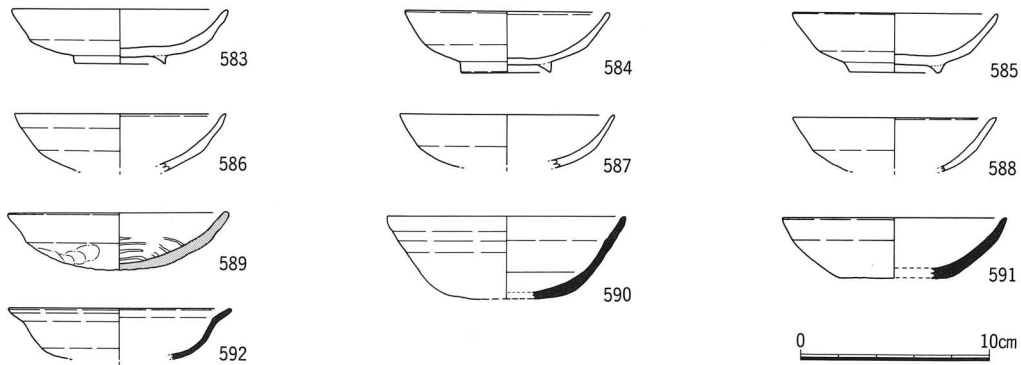
531～560は土師質の杯である。底部切り離し技法から分類すると、回転糸切り技法によるものは、535～549・553～560である。これに対し、回転ヘラ切り痕を留めるのは531～534である。いずれも底部内面に凹凸があり、器壁が薄く仕上げられ、形態・色調から吉備系に属する土器と見られる。550～552の切り離し技法は不明である。561～582は土師質の皿である。561～577は底部切り離しは回転糸切りによる。580～582は回転ヘラ切り痕を留め、580・581は口縁端部を尖り気味に仕上げる。578の底部切り離しは静止糸切りによる。579は切り離し技法は不明。583～588は土師質の碗で、いずれも体部内面に横ナデが施される。583～585は退化した断面三角形の高台が貼り付けられ、器高は3.2cm以下であ



第85図 SK3006実測図



第86図 SK3006出土遺物実測図 (1)

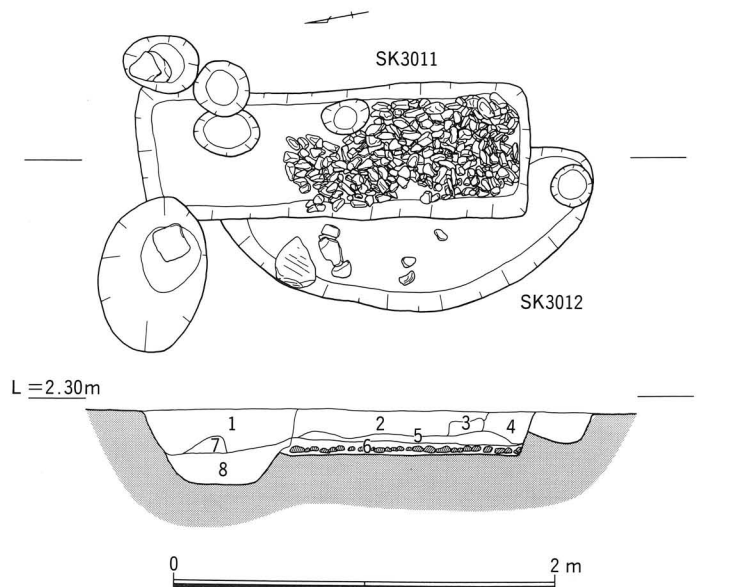


第87図 SK3006出土遺物実測図 (2)

る。吉備系土師器碗で、山本吉備系土師器碗類型のⅢ-3期C3類に当てはまる。589は和泉型瓦器碗である。無高台で、体部内面渦巻き状のヘラミガキがまばらに施される。炭素の吸着が不十分なため、色調は褐灰色である。森島編年のⅣ-4に当てはまる。590は須恵質の碗である。丸底状で、底部から内彎して立ち上がり、ほぼ直線的に立ち上がる。体部外面にはロクロ成形による稜が多く付き、口縁端部はやや尖り気味に仕上げる。体部外面にはロクロナデが施される。底部切り離し技法は不明である。591は陶器碗である。口縁部に焼成時の重ね焼きの痕跡が見られ、形態・色調から備前焼碗と思われる。592は白磁皿で、口縁部が大きく外反する「口禿」皿である。横田・森田分類案の白磁皿Ⅸ-1dに比定される。

土坑11 (SK3011) (第88図)

B-7で検出した長方形の土坑である。長辺2.05m、短辺0.72mを測り、方位は南北を示す。断面は北側の3分の1がすり鉢状を呈し、深さ0.4mであるのに対し、南側3分の2は底面が平坦で、側面は梯状に立ち上がり、深さは0.23mを測る。この南側3分の2の底面には、一面にわたり5~10cmの砂岩礫が層厚3~4cmで平らに敷かれている。礫の上面には一様に焼け跡が観察されるとともに、下層の埋土中には多量の炭化物ならびに焼土が検出され、明らかに焼却した痕跡が認められる。形状およびその特徴から火葬墓としての性格も想定されるが、SA3005の建物内に重複して位置することから、建物に伴う何らかの施設ではないかとも考えられる。



- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 灰オリーブ色 5 Y 4/2 粘質土 | 6 暗オリーブ褐色 2.5 Y 3/3 粘質土 |
| 2 暗オリーブ褐色 2.5 Y 5/3 粘質土 | (炭化物含む) |
| 3 オリーブ褐色 2.5 Y 4/4 粘質土 | 7 オリーブ褐色 2.5 Y 4/4 粘質土 |
| 4 暗オリーブ色 5 Y 4/3 粘質土 | 8 オリーブ褐色 2.5 Y 4/3 粘質土 |
| 5 オリーブ褐色 2.5 Y 4/3 粘質土 | |

第88図 SK3011・3012実測図

出土遺物は、土師質の皿、こね鉢等少量である。

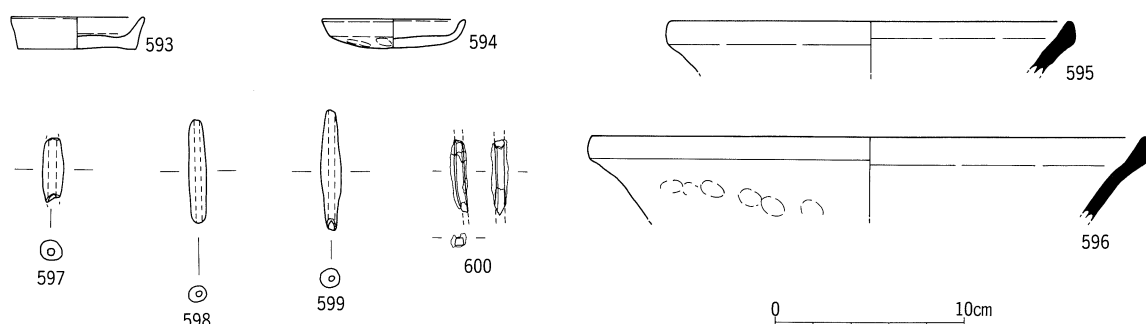
出土遺物 (第89図)

593・594は土師質の皿である。593は底部に回転糸切り痕を留める。594は体部内面に横ナデを施す。底部外面には回転ヘラ切り痕及び切り離し後のユビオサエが見られ、全体に凹凸が著しい。吉備系土師質皿である。595・596は東播系こね鉢である。いずれも口縁端部は下方への拡張が見られる。色調は灰色で、焼成不良である。597～599は土師質の土錘である。600は鉄釘である。

土坑12 (SK3012) (第88図)

B-7で検出した土坑であるが、東側部はSK3011によって切られ、全体の形状は不明である。残存の長軸は1.9m、短軸は0.66mを測り、本来は長円形の土坑と思われる。残存分の深さは0.24mを測り、底面は平坦である。

出土遺物は、瓦器皿・こね鉢等少量である。



第89図 SK3011出土遺物実測図

出土遺物 (第90図)

601は和泉型瓦器皿である。602～604は東播系こね鉢で、603と604は同一個体の可能性がある。602・603は体部が直線的に立ち上がり、604は口縁部を下方にやや拡張している。605は鉄釘である。

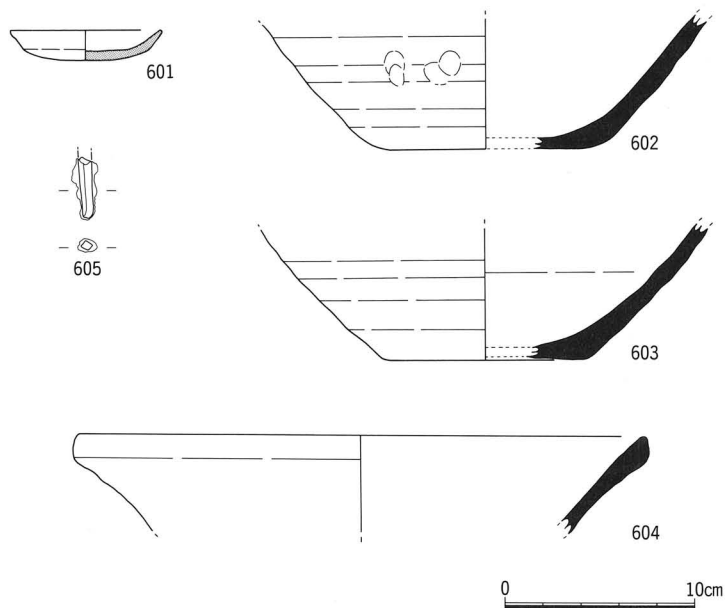
土坑14 (SK3014) (第91図)

B-6・7で検出した。東南部はSK3013に切られるが、本来は長円形の平面形であったと思われる。残存の長軸は1.05m、短軸は0.49mを測る。深さは0.19mと比較的浅く、埋土は灰オリーブ色粘質土1層である。

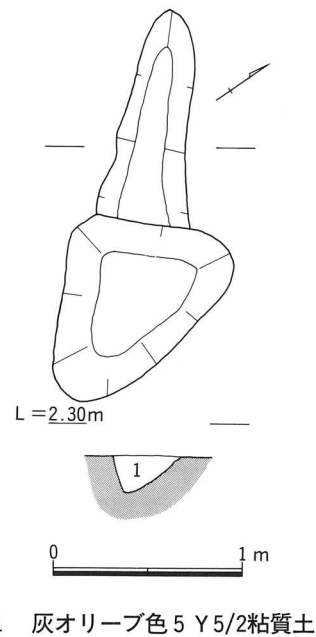
出土遺物は少量であるが、青磁碗を1点含んでいる。

出土遺物 (第92図)

606は土師質の杯で、底部内面には凹凸があり、底部外面は回転ヘラ切り後丁寧なナデを施す。609は龍泉窯系青磁碗である。見込みに草花文、「卍」をスタンプし、体部外面には蓮弁文を有す。横田・森田分類案のI-5Cに比定される。607・608は土師質の土錘である。



第90図 SK3012出土遺物実測図



第91図 SK3014実測図

土坑15 (SK3015) (第93図)

B-6・7で検出した平面形が楕円形を呈する土坑である。長軸2.45m、短軸0.92mを測り、深さは0.56mである。底面は平坦で、側面は梯状に立ち上がり、埋土は6層に分層できるが、1・3・4層は炭化物・焼土を少量含む。

出土遺物 (第94図)

610～614は土師質の杯である。614は体部を内彎させ、口縁端部を尖り気味に仕上げる。底部外面は回転糸切り後丁寧なナデが施される。610～613は回転ヘラ切り痕を留め、体部は直線的に立ち上がり、器壁は薄い。615～617は土師質の皿である。615・616の底部切り離しは回転ヘラ切りで、616は板目が残る。吉備系土師質皿と見られる。617は底面に凹凸があり、底部と体部の境に段が付く。底部外面には回転糸切り痕を留める。

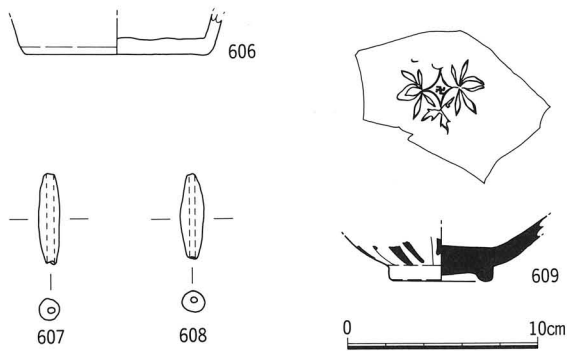
土坑16 (SK3016) (第95図)

B-6・7で検出した土坑で、SK3015の南側に位置する。長軸1.69m、短軸0.66mを測り、平面形は長円形に近い。断面はU字状を呈するが、底面には起伏が見られ、最深部で0.34mである。埋土は炭化物・焼土を含んだ暗灰黄色粘質土とオリーブ褐色粘質土の2層に分層される。

この土坑からは扁平な結晶片岩が多量に出土している。

出土遺物 (第96図)

619は土師質の椀で、ほぼ完形である。体部は内彎し、口縁部はやや肥厚する。底部には断面三角形の高台が貼り付けられている。口径12.0cm、器高3.2cmを測り、山本吉備系土師器椀類型のⅢ-3期C3類

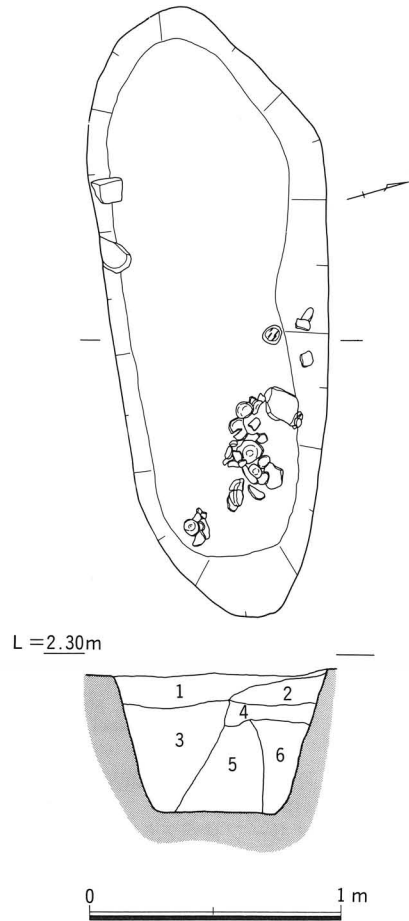


第92図 SK3014出土遺物実測図

に当てはまる。620は、土師質の鍋である。口縁部が「く」の字状の形態を示し、体部内外面に横・縦方向のハケ目が施される。621は常滑焼の甕の底部である。622は陶器の体部片で、外面にタタキを施す。産地は不明。623・624は土錘である。618は白磁皿で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は少し外反する。「口禿」の白磁皿で、横田・森田分類案の白磁皿Ⅸ-1Cに比定される。

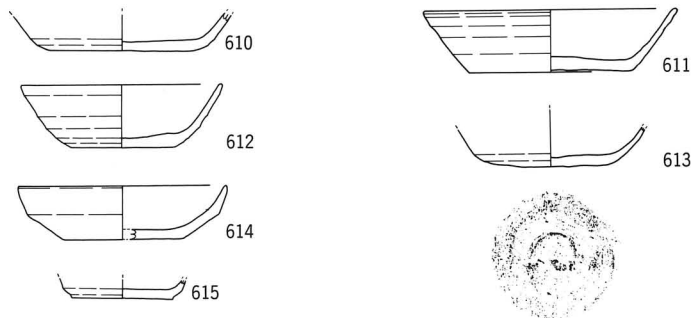
土坑18 (SK3018) (第97図)

C-7で検出した土坑で、SD3001の南側に位置する。平面形は長方形を呈し、長軸1.78m、短軸0.7mを測り、主軸は東西方向に向く。最深部は0.26mを測るが、西側に比べ、東側底面がやや深くなっており、側面の立ち上がりも西側、東側で異なっている。埋土は5層に分層できるが、黄褐色粘質土を基調にしており、大きな差異は認められない。出土遺物の中に完形の土師質碗が見られることから、これを副葬品とした土壌墓の可能性はある。

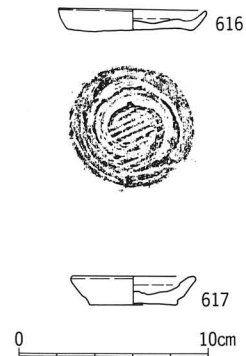


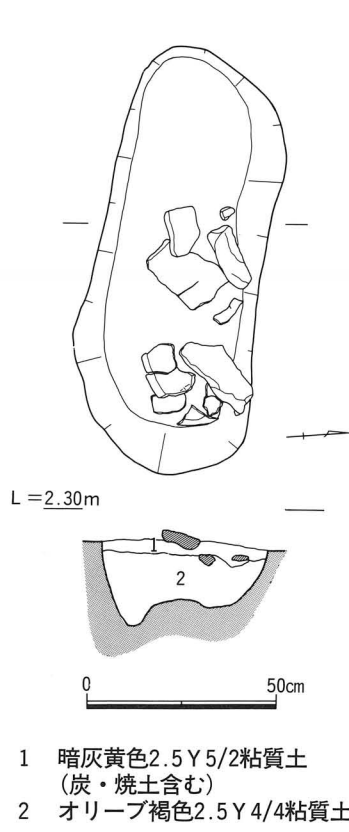
- 1 オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土 (炭化物・焼土含む)
- 2 黄褐色2.5Y5/3粘質土
- 3 暗黄灰色2.5Y4/2粘質土 (炭化物・焼土含む)
- 4 灰オリーブ色5Y5/2粘質土 (炭化物・焼土含む)
- 5 灰オリーブ色5Y4/2粘質土
- 6 暗オリーブ色5Y4/3粘質土

第93図 SK3015実測図



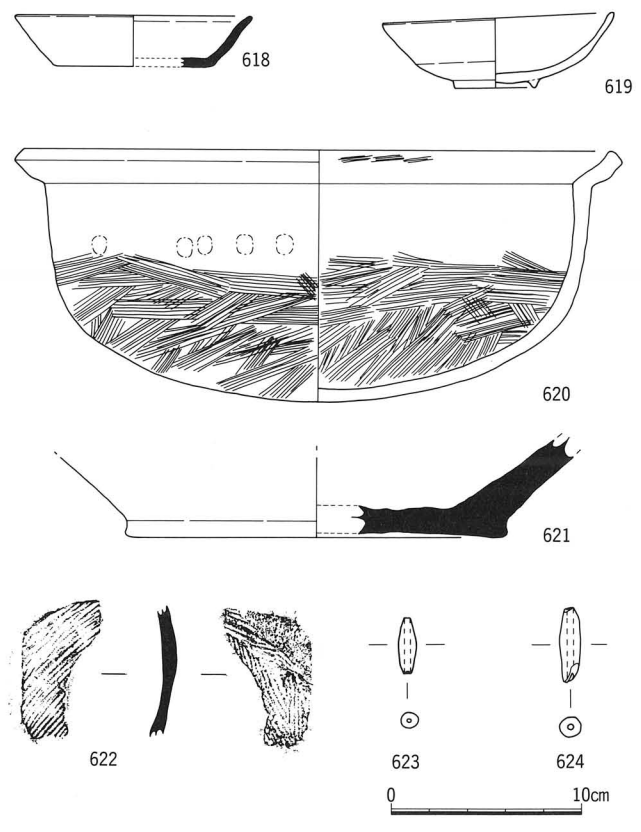
第94図 SK3015出土遺物実測図





- 1 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土
(炭・焼土含む)
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土

第95図 SK3016実測図



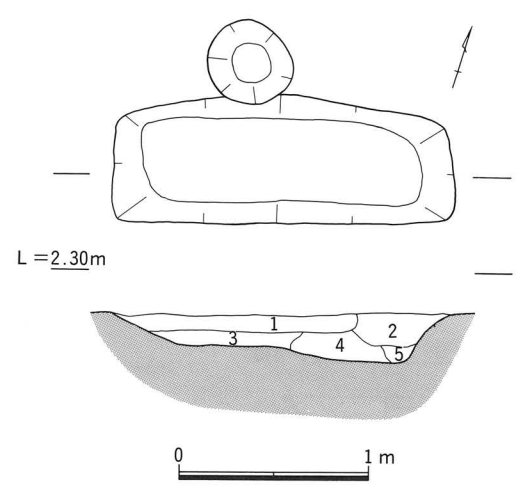
第96図 SK3016出土遺物実測図

出土遺物 (第98図)

625は土師質の杯である。器壁を薄く仕上げ、口縁部をわずかに外反させる。底部は回転ヘラ切り痕を留める。吉備系土師器碗と組み合わせ関係にある杯と思われる。626・627は土師質の碗で、吉備系土師器碗である。627はほぼ完形で、口径11.0cm、器高3.4cmを測る。山本吉備系土師器碗類型のⅢ-3期C3類である。

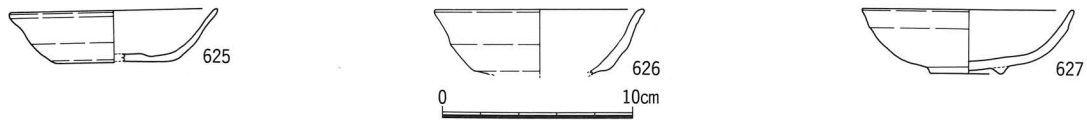
土坑19 (SK3019) (第99図)

C-7で検出した土坑で、SK3018の東側に位置する。長軸1.76m、短軸0.97mを測り、平面形は東側が少し突き出た不整楕円形を呈する。深さは0.46mを測り、埋土は5層に分層できる。



- 1 黄褐色2.5Y5/3粘質土
(炭化物・焼土含む)
- 2 黄褐色2.5Y5/4粘質土
- 3 黄褐色2.5Y5/3粘質土
- 4 黄褐色2.5Y5/4粘質土
- 5 オリーブ褐色2.5Y4/6粘質土
(焼土含む)

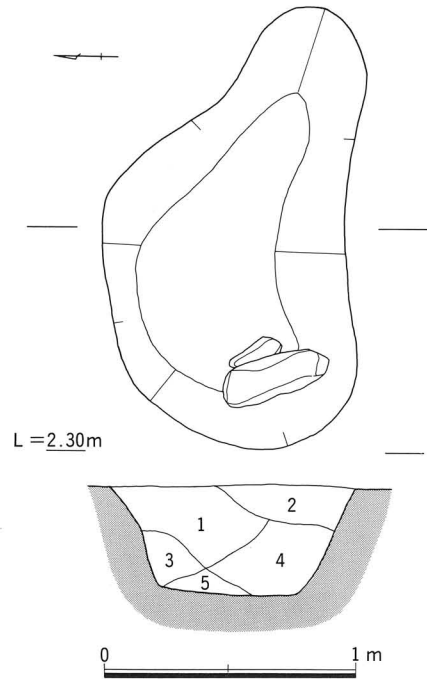
第97図 SK3018実測図



第98図 SK3018出土遺物実測図

出土遺物 (第100図)

628～631は土師質の杯である。628・630は底部回転ヘラ切り後ナデを施す。628はやや丸底状で、底面に凹凸があり、器壁は薄い。630は底部より内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。629～631は形態・色調から吉備系に属する杯と考えられる。632～634は土師質の皿である。632は底面に回転糸切り痕を留める。633・634は回転ヘラ切り痕を留め、体部内面にナデを施す。色調は灰白色・にぶい橙色で、吉備系土師質皿である。635は龍泉窯系青磁碗体部で、外面に鎬蓮弁文を削り出し、淡緑色の釉を厚く施す。横田・森田分類案の龍泉窯系青磁碗I-5bに属する。636・637は土錘である。638は陶器甕の体部である。外面に平行タタキが施され、内面は縦ハケ目で調整されている。



- 1 暗オリーブ色 5 Y 4/3 粘質土
- 2 灰オリーブ色 5 Y 5/2 粘質土
(炭化物・焼土含む)
- 3 灰オリーブ色 5 Y 4/2 粘質土
- 4 オリーブ褐色 2.5 Y 4/3 粘質土
(炭化物・焼土含む)
- 5 オリーブ色 5 Y 5/4 粘質土

第99図 SK3019実測図

土坑20 (SK3020) (第101図)

C・D-7で検出した土坑で、SK3018の南側に位置する。平面形は長方形を呈するが、東部にやや丸みがつく。主軸は東西に向き、長軸1.88m、短軸0.89m、深さ0.22mを測る。埋土は黄褐色粘質土、オリーブ褐色粘質土、灰オリーブ色粘質土の3層に分層される。SK3018とは平行関係にあり、形状・特徴が近似していることから、この土坑は土壌墓の可能性はある。

出土遺物は、遺構上面から出土した石鍋1点及び球状石製品である。

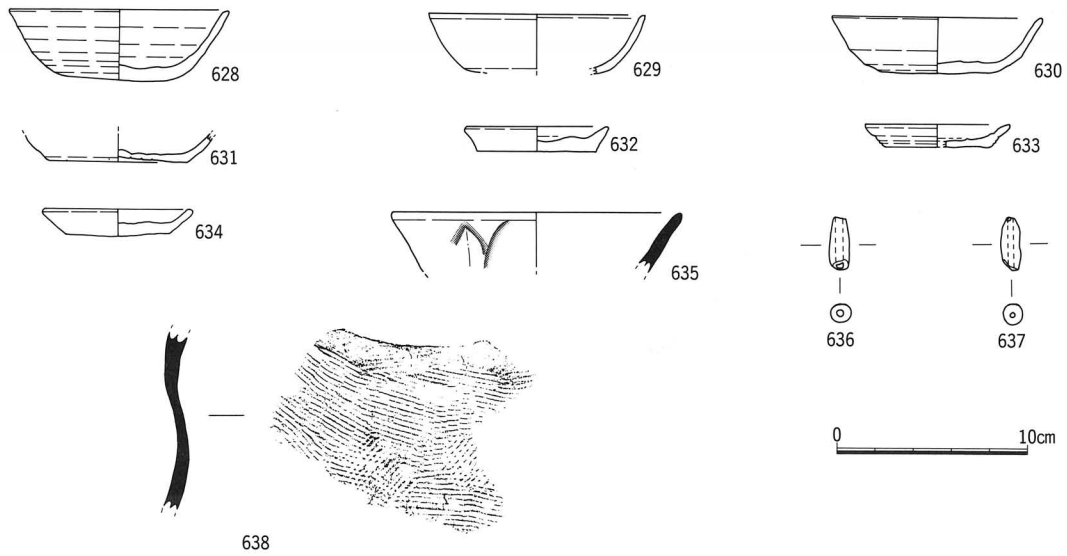
出土遺物 (第102図)

639は滑石製の石鍋である。体部は口縁部にかけて内彎し、口縁端部は丸みを帯びる。口縁部直下に鏝がめぐり、鏝の端部はやや丸く仕上げている。色調は灰色であるが、外面全体に煤が付着している。復原の口径は18.4cmである。640は石製品である。径3.4cmの球形で、表面は滑らかである。用途は不明。

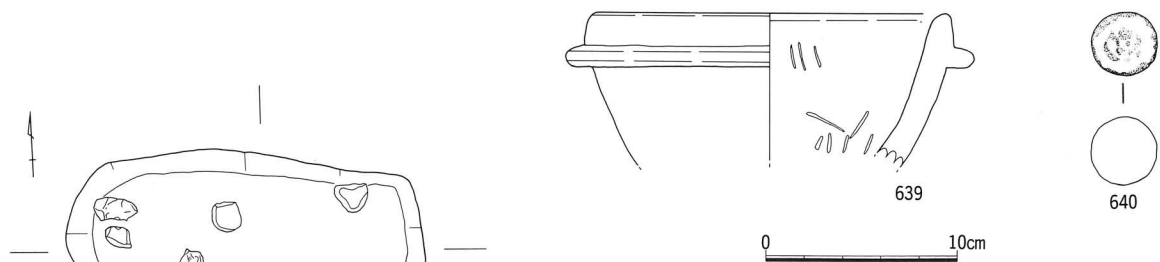
土坑21 (SK3021) (第103図)

C・D-6・7で検出した土坑で、長軸0.89m、短軸0.82mを測り、平面形が円形状を呈する。深さは0.22mで、浅いすり鉢状の断面形を示す。埋土はオリーブ褐色粘質土、灰オリーブ色粘質土の2層に分層できる。

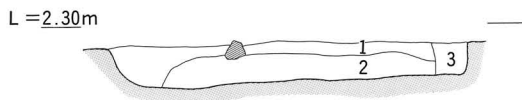
出土遺物は、土師質の杯・高台付皿である。



第100図 SK3019出土遺物実測図

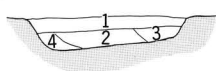


第102図 SK3020出土遺物実測図



- 1 黄褐色2.5Y5/3粘質土
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土
- 3 灰オリーブ色5Y5/3粘質土 (焼土含む)

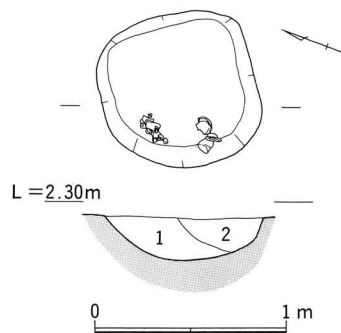
L=2.30m



- 1 黄褐色2.5Y5/3粘質土
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/6粘質土
- 3 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土
- 4 オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土



第101図 SK3020実測図

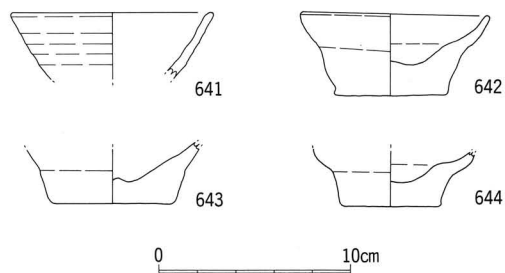


- 1 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土 (炭化物含む)
- 2 灰オリーブ色5Y5/3粘質土

第103図 SK3021実測図

出土遺物 (第104図)

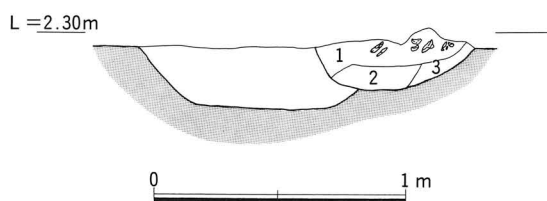
641は土師質の杯で、体部はほぼ直線的に立ち上がる。外面には成形による稜が数条つく。642～644は土師質の高台付皿である。大きさに差があるが、同タイプのもので、底部はかなり厚く、内面に凹凸があり、口縁部にかけては薄く仕上げる。底部外面は回転糸切り後、ナデを施す。642はほぼ完形で、口径9.5cm、器高4.3cm、底径5.5cmを測る。



第104図 SK3021出土遺物実測図

土坑23 (SK3023) (第105図)

C-8で検出した円形の土坑で、SD3001の南側の一部を切って遺構を形成する。長軸0.68m、短軸0.67m、深さ0.17mを測る。埋土は黄褐色粘質土、同色粘質土、オリーブ褐色粘質土の3層に分層できる。

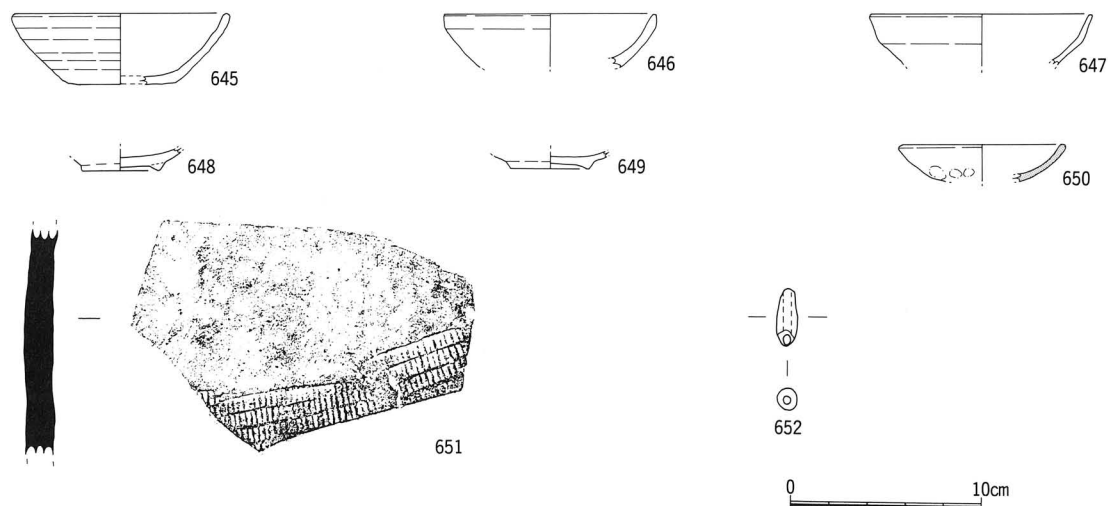


- 1 黄褐色2.5Y5/3粘質土
- 2 黄褐色2.5Y5/4粘質土
- 3 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土

第105図 SK3023実測図

出土遺物 (第106図)

645・646は土師質の杯である。645は底部切り離し技法は不明であるが、体部外面には成形により凹凸がつく。647～649は土師質の椀で、吉備系土師器椀である。648・649の底部の高台は断面三角形である。650は和泉型瓦器椀である。体部内面にはミガキが見られず、炭素の吸着も

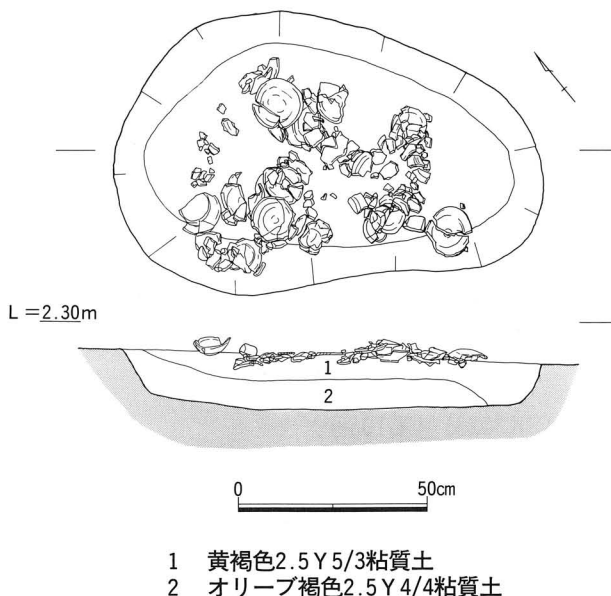


第106図 SK3023出土遺物実測図

不良である。651は陶器甕の体部片で、外面に格子状の押印文が施され、色調は灰色である。常滑焼の甕と見られる。652は土錘である。

土坑25 (SK3025) (第107図)

C-8で検出した。SD3001の南側に近接して位置している。長軸1.12m、短軸0.74mを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは0.14mと比較的浅く、底面は平坦で側面は緩やかに立ち上がる。埋土は黄褐色粘質土、オリーブ褐色粘質土の2層に分層できる。この土坑からは多量の土師質の杯・椀等が出土しており、土器溜まりの状況を示している。土器を廃棄した土坑と捉えられる。

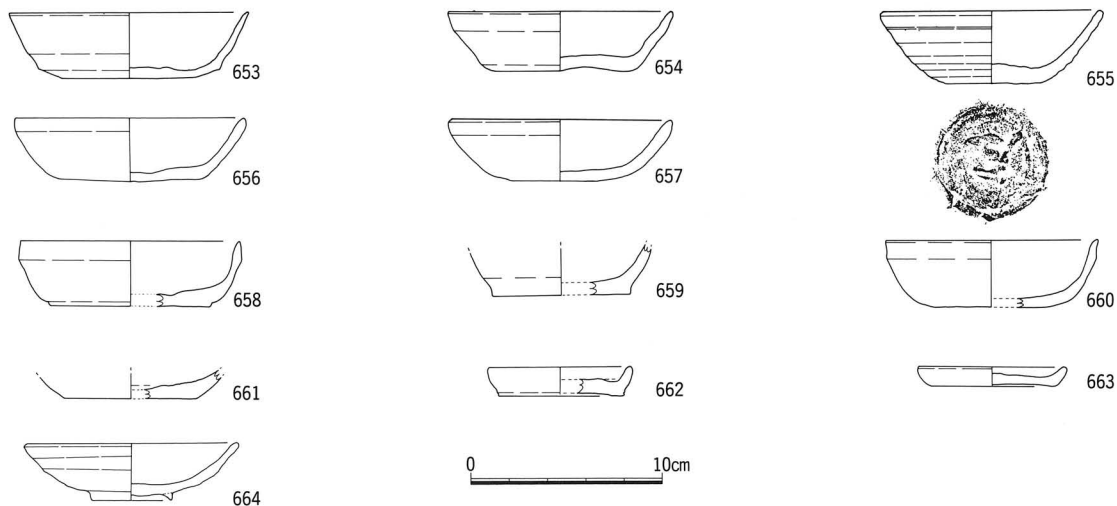


- 1 黄褐色2.5Y5/3粘質土
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土

第107図 SK3025実測図

出土遺物 (第108図)

653～661は土師質の杯である。653～657は底部に回転ヘラ切り痕を留める吉備系に属する土器である。658・659の底部切り離し技法は回転糸切りによる。660の底部切り離しは不明である。664は土師質の椀で、吉備系土師器椀である。断面三角形の高台を貼り付け、口径11.0cm、口径3.0cmを測る。662・663は土師質の皿で、底部切り離しはともに回転糸切りによる。



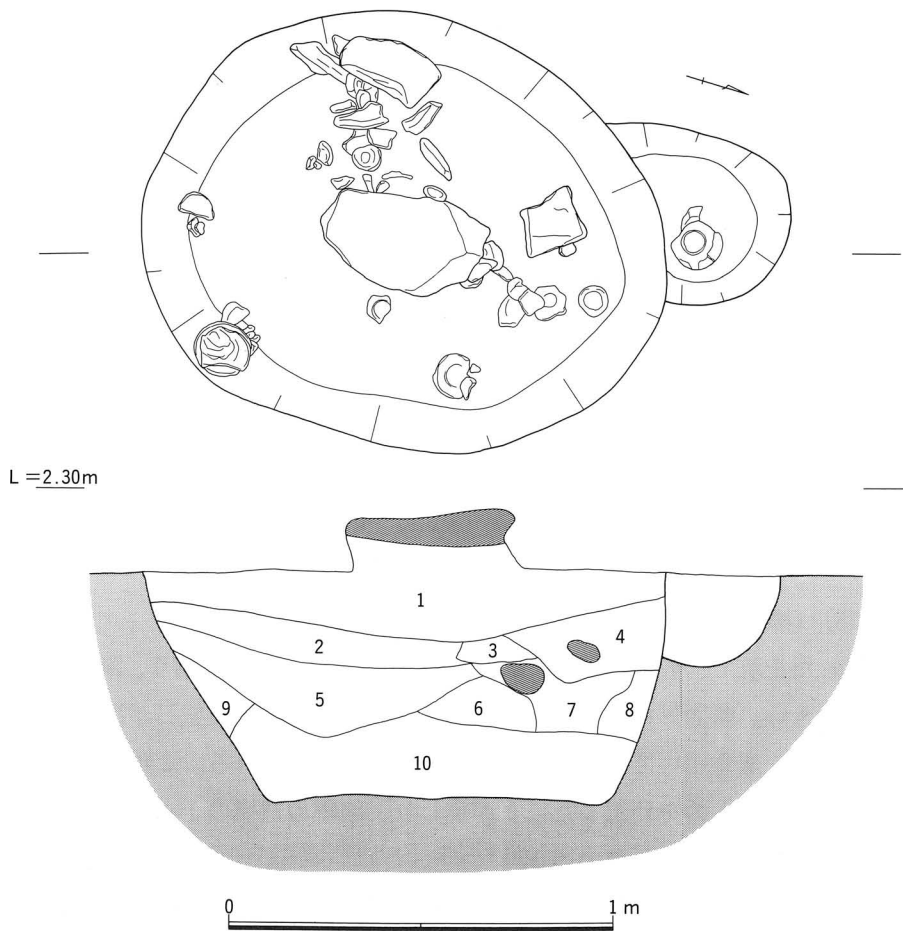
第108図 SK3025出土遺物実測図

土坑26 (SK3026) (第109図)

C-8で検出した土坑で、SD3001の東端部を切って遺構を形成する。長軸1.38m、短軸1.1mを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは0.61mで、断面形は逆台形状に近い。埋土は細かく分層できるが、各層に炭化物を多く含んでいる。この土坑からは杯・鍋等土師質土器が多量に出土しているが、それとともに大小の礫も乱雑な状態で出土しており、これら遺物が投棄された状況が窺える。この土坑はSD3001を切っており、SD3001の使用後に構築されたことが分かる。

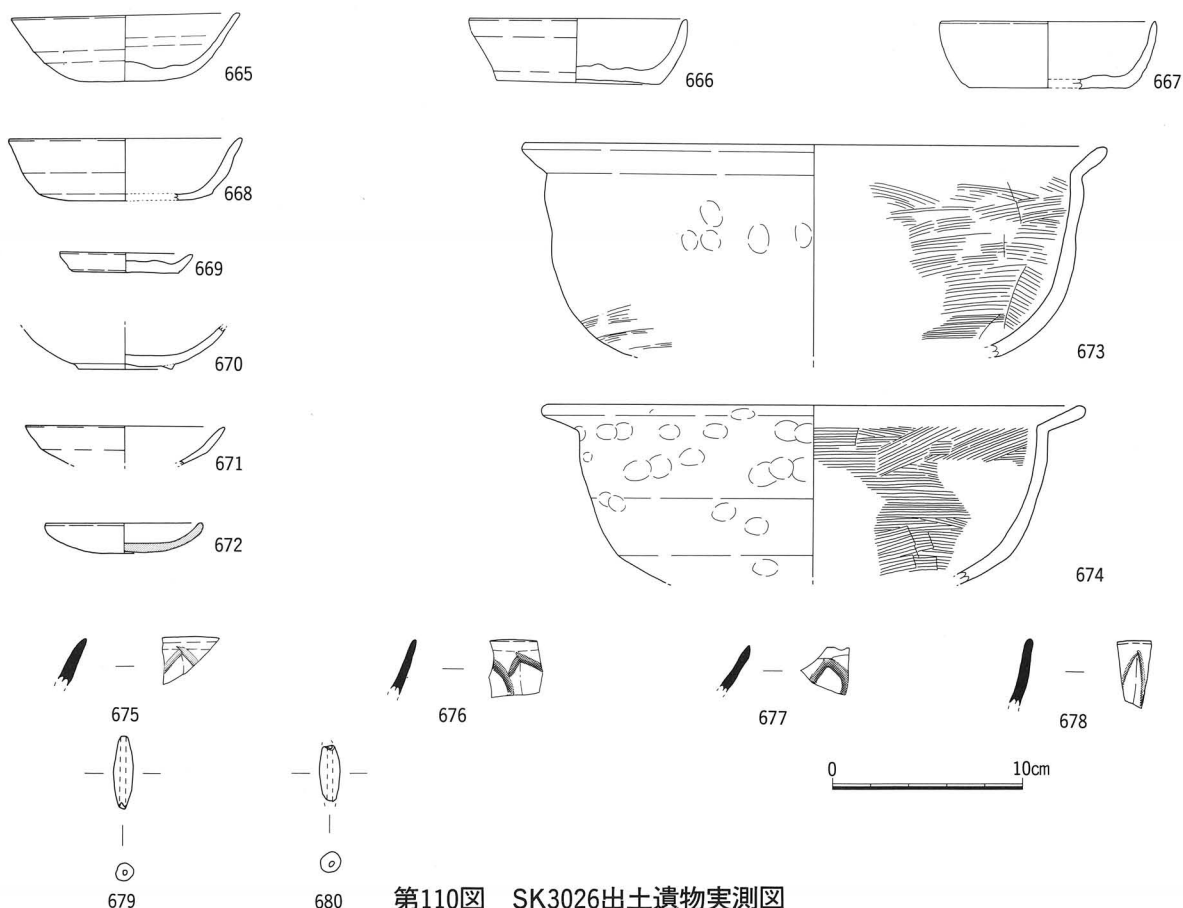
出土遺物 (第110図)

665~668は土師質の杯である。665は体部が緩やかに内彎し、口縁部はわずかに外反する。器壁を薄く仕上げ、底部外面には回転ヘラ切り痕を留める。666~668は底部に回転糸切り痕を留める。669は土師質の皿で、底部は回転ヘラ切り後ナデ消している。670・671は土師質の椀で、670は断面三角形の高台が貼り付けられる。ともに吉備系土師器椀である。673・674は土師質の鍋で、同一個体である可能性が高い。



- | | |
|-------------------------------|-------------------------|
| 1 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土 (炭化物・焼土含む) | 6 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土 |
| 2 黄褐色2.5Y5/3粘質土 | 7 黒褐色2.5Y3/2粘質土 (炭化物含む) |
| 3 オリーブ褐色2.5Y4/6粘質土 (炭化物・焼土含む) | 8 黄褐色2.5Y5/4粘質土 |
| 4 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土 (炭化物・焼土含む) | 9 黄褐色2.5Y6/4粘質土 |
| 5 灰オリーブ色5Y4/2粘質土 (炭化物・焼土含む) | 10 オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土 |

第109図 SK3026実測図



第110図 SK3026出土遺物実測図

口縁部は「く」の字状の形態で、体部内面には横ハケ目が施される。672は和泉型瓦器皿で、体部外面にはユビオサエがされる。

675～678は青磁碗の小片である。675・676は体部外面に幅の広い鎬蓮弁文を削り出し、全面に淡緑色・濃緑色の釉を厚く施している。横田・森田分類案の龍泉窯系青磁碗のⅠ－5 b に比定される。677は蓮弁文を有し、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5 a に属する。678は幅の狭い鎬蓮弁文を削り出し、淡緑色の釉を施している。龍泉窯系青磁碗Ⅲ－2 と見られる。679・680は土師質の土錘である。

土坑28 (SK3028) (第111図)

D-9で検出した土坑で、平面形はほぼ正円形である。径約0.8mを測り、深さは0.65mで、平面規模に比して深度が大きい。断面形は深いU字状を呈し、底面には扁平の根石が据えられている。またその上位には大小の結晶片岩を用いて意図的に集石した状況が見て取れる。これらの状況から、この土坑は建物に伴う柱穴であったものを利用したことが窺われ、地鎮め遺構の1つではないかと考えられる。なお、出土遺物は石以外には見られない。

本遺跡では、地鎮め遺構として柱穴内に数個の杯・碗を埋納したものがいくつか確認されているが、本遺構のように土器を伴わない集石による地鎮め遺構の存在も想定される。

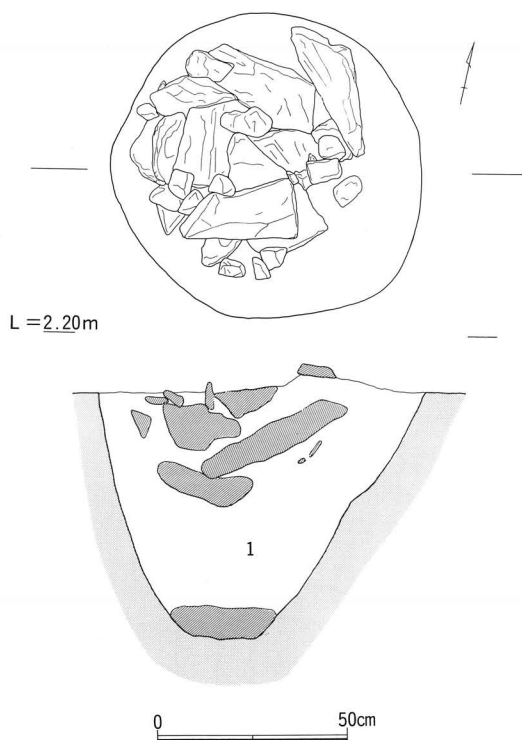
土坑32 (SK3032) (第112図)

D-7で検出された土坑である。長軸1.42m、短軸0.67mを測り、平面形は長形状を呈する。断面形は浅いすり鉢状で、深さは0.18mを測る。埋土は5層に分層されるが、上層から土師質土器の細片が

多量に出土しており、土器溜まりの様相を示している。SD3001の南側では土器溜まりの土坑がSK3025、3032、3054と3ヶ所認められるが、いずれも位置的に近接しており、3m以内の範囲にある。

出土遺物 (第113図)

681は土師質の杯で、底部に回転糸切り痕を留める。682・683は土師質の皿で、ともに底部外面は回転糸切り後ナデが施される。684は土師質の椀で、口縁部にかけて内彎し、口縁部は少し肥厚する。体部内外面に横ナデが施される。685～687は鉄釘である。



1 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土

第111図 SK3028実測図

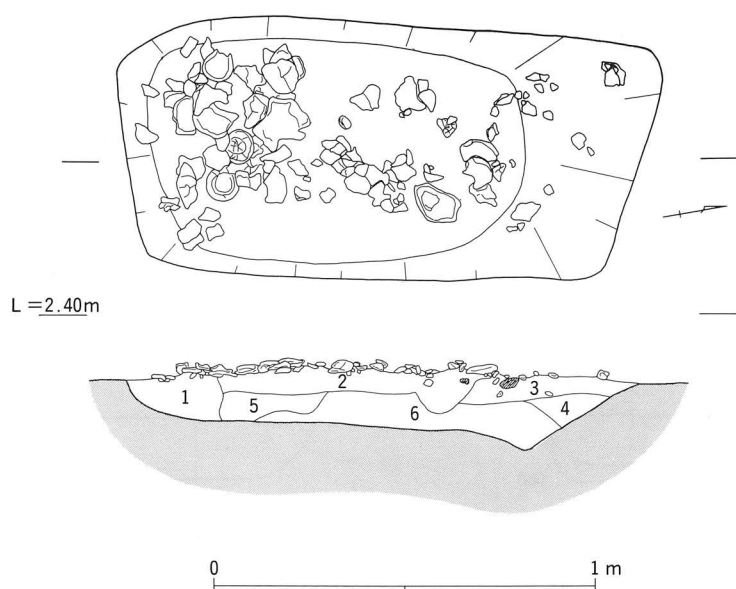
土坑33 (SK3033) (第114図)

D-8で検出した土坑で、長軸0.97m、短軸0.57mを測る。平面形は長方形を呈し、深さは0.16mである。埋土は黄褐色粘質土1層である。主軸は北西-南東に向いており、形状から土壇墓の可能性はある。

出土遺物は見られない。

土坑35 (SK3035) (第115図)

D-7で検出した。長軸0.98m、短軸0.56mを測り、平面形は楕円形を呈する。断面形はU字状で、深さは0.54mを測る。埋土は灰オリーブ粘質土、オリーブ褐色粘質土、灰オリーブ粘質土の3層に分層される。

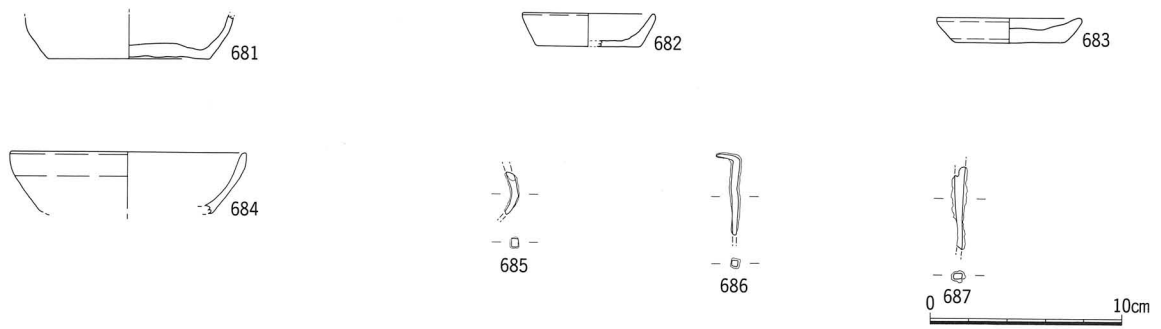


- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 灰オリーブ色5Y5/2砂質土 | 4 にぶい褐色10YR5/3粘質土 |
| 2 オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土 | 5 オリーブ褐色2.5Y5/4粘質土 |
| 3 灰褐色10YR5/2粘質土 | 6 黄褐色2.5Y5/3粘質土 |

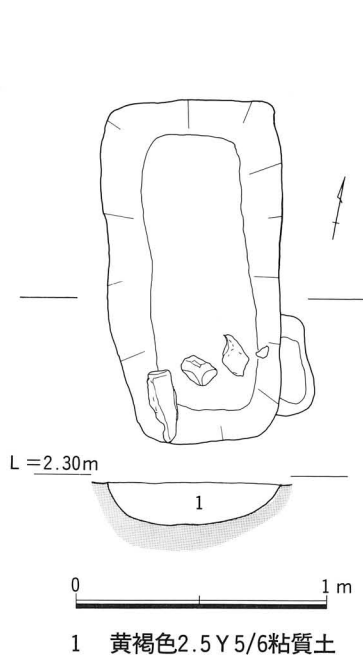
第112図 SK3032実測図

出土遺物 (第116図)

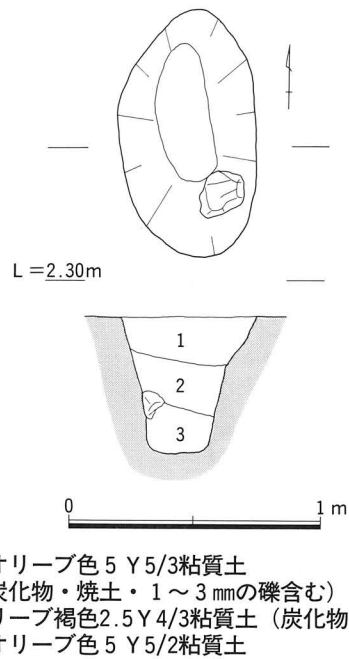
688～690は土師質の杯である。688・689は底部に回転糸切り痕を留め、体部内外面には丁寧な横ナデが施されている。690は回転ヘラ切り痕を留める。691は土師質の皿で、底部切り離し技法は回転ヘラ



第113図 SK3032出土遺物実測図

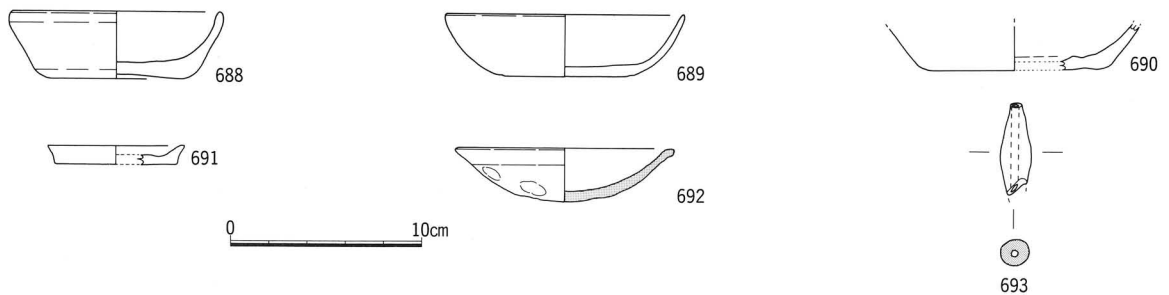


第114図 SK3033実測図



第115図 SK3035実測図

- 1 灰オリーブ色 5 Y 5/3 粘質土
(炭化物・焼土・1~3mmの礫含む)
- 2 オリーブ褐色 2.5 Y 4/3 粘質土 (炭化物・焼土含む)
- 3 灰オリーブ色 5 Y 5/2 粘質土



第116図 SK3035出土遺物実測図

切りである。692は和泉型瓦器椀である。口縁部はやや外反し、端部をわずかに肥厚させる。体部内面のミガキは観察されず、無高台である。器高は2.8cmで、森島編年のIV-4と見られる。693は瓦質の土錘である。

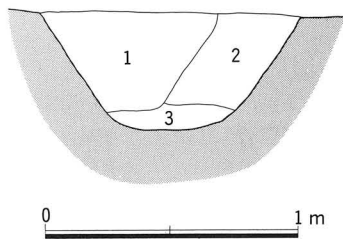
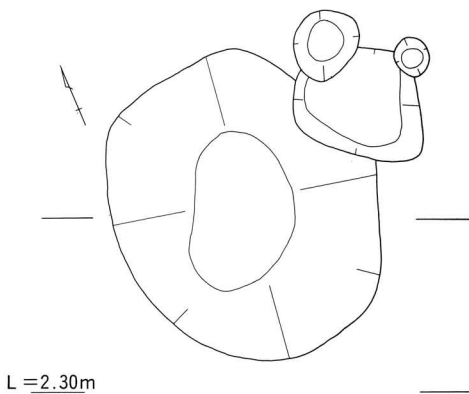
土坑38 (SK3038) (第117図)

E-7で検出した土坑で、平面形は楕円形を呈する。長軸1.25m、短軸0.98mを測り、深さは0.48mである。断面形はU字状で、埋土は1~3mmの礫を多量に含んだ灰オリーブ色粘質土、オリーブ褐色粘質土及び同色粘質土の3層に分層できる。埋土中から鉄滓7点が出土しており、鍛冶関係の遺構ではないかと考えられる。

出土遺物は、鉄滓の他に土師質の杯・瓦器椀がある。

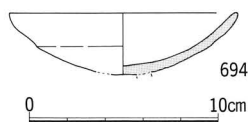
出土遺物 (第118図)

694は和泉型瓦器椀である。本来高台が付いていたと思われるが、剝落している。



- 1 灰オリーブ色 5 Y 5/3 粘質土
- 2 オリーブ褐色 2.5 Y 4/6 粘質土
- 3 オリーブ褐色 2.5 Y 4/4 粘質土

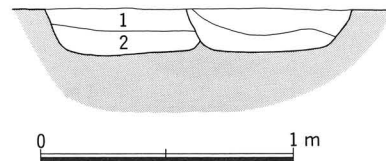
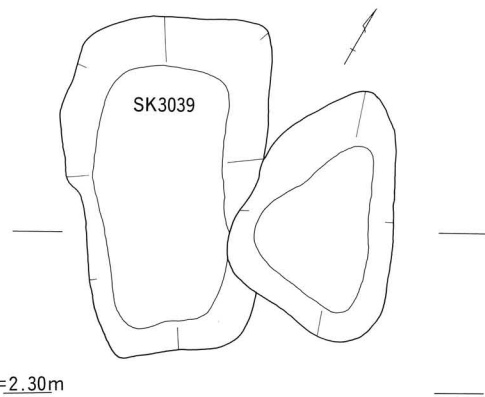
第117図 SK3038実測図



第118図 SK3038出土遺物実測図

土坑39 (SK3039) (第119図)

E-7で検出した土坑で、SK3038の西側に位置する。SK3040と一部重複するが、長軸1.32m、短軸0.79mを測り、平面形は長方形を呈する。断面形は浅いすり鉢状で、深さは0.19mである。埋土は灰オリーブ色粘質土、オリーブ褐色粘質土の2層に分層できる。この土坑からも鉄滓が8点出土しており、SK3038と同様な性格が考えられる。



- 1 灰オリーブ色 5 Y 5/3 粘質土
- 2 オリーブ褐色 2.5 Y 4/4 粘質土

第119図 SK3039実測図

出土遺物 (第120図)

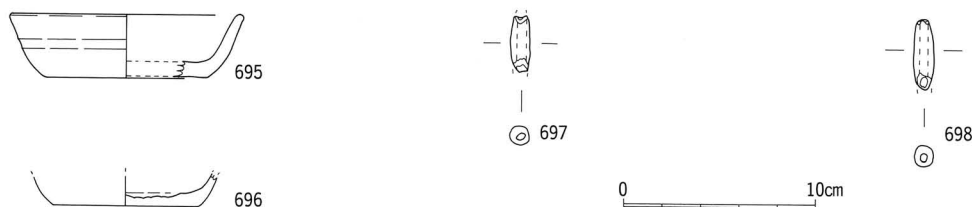
695・696は土師質の杯である。695は底部内面に凹凸があり、外面に回転糸切り痕を留める。696は底部から内彎しながら立ち上がり、底部外面は回転糸切り後やや粗いナデが施される。697・698は土錘である。

土坑43 (SK3043) (第121図)

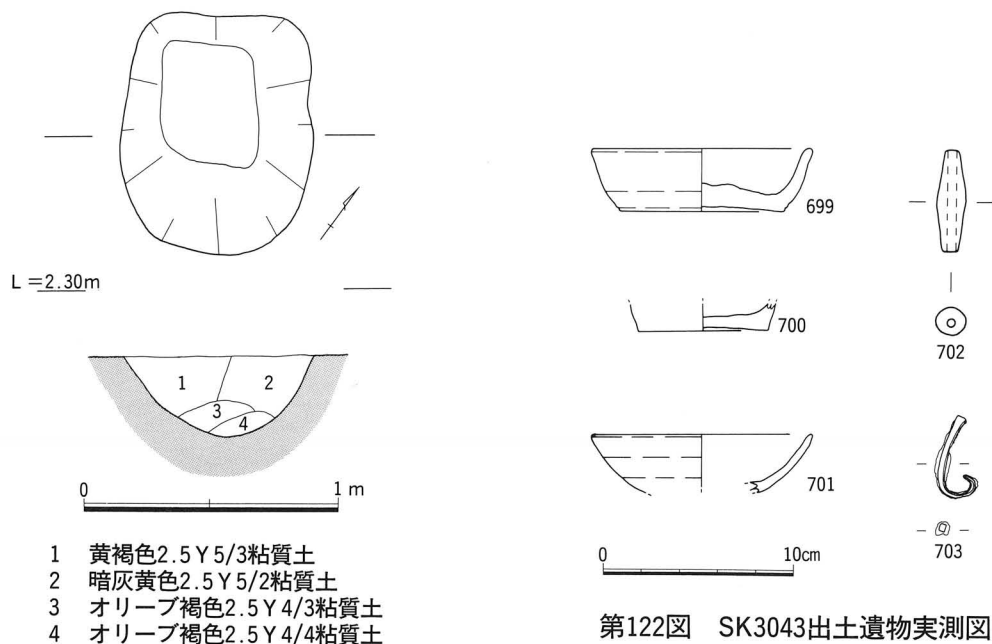
E・F-7で検出した土坑で、SK3039の南側に位置する。長軸0.93m、短軸0.76mを測り、平面形は不整楕円形を呈する。深さは0.32mで、断面形はすり鉢状を呈する。埋土は4層に分層できるが、埋土中から土師質の杯・椀等とともに鉄滓2点と鉄釘1点が出土している。

出土遺物 (第122図)

699は土師質の杯である。底部が厚く、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁端部はやや外反する。底部外面には回転糸切り痕を留める。700は土師質の皿で、底部に回転糸切り後ナデが施されている。701は土師質の椀である。体部は内彎し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。吉備系土師器椀である。702は土師質の土錘である。703は鉄釘である。



第120図 SK3039出土遺物実測図



- 1 黄褐色2.5Y5/3粘質土
- 2 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土
- 3 オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土
- 4 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土

第122図 SK3043出土遺物実測図

第121図 SK3043実測図

坑44 (SK3044) (第123図)

E・F-7で検出した土坑で、SK3043の東側に位置する。SK3045と接しており、長軸1.63m、短軸1.0mを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは0.17mで、底面は平坦で、側面は緩く立ち上がる。埋土は5層に分層できるが、大きくは灰オリーブ色粘質土と黄褐色粘質土に分けられる。

出土遺物は、土師質の碗とともに鉄滓3点が見られる。

出土遺物 (第124図)

704は土師質の碗である。体部外面には成形による稜がつき、体部内外面には丁寧な横ナデが施される。断面三角形の高台が貼り付けられ、器高2.9cmを測る。吉備系土師器碗である。

土坑46 (SK3046) (第125図)

E-8で検出した不整長円形の土坑である。SK3038の東側に位置し、SK3047を切って遺構を形成している。長軸2.47m、短軸0.77mで、深さは0.23mを測る。埋土は2層に分層されるが、ともにオリーブ褐色粘質土である。埋土中から鉄滓4点が出土している。

土坑47 (SK3047) (第125図)

E-8で検出した土坑で、SK3042・3046・3048に切られるため全体は不明であるが、平面形は長円形を呈すると推測される。残存の長軸は1.82m、短軸は0.88mを測り、深さは0.25mである。断面形は浅いすり鉢状で、埋土は灰オリーブ色粘質土、オリーブ褐色粘質土の2層に分層される。この土坑からは鉄滓11点、鉄釘1点が出土しており、鉄滓が出土した土坑の中ではその量が最も多い。鍛冶関係の遺構と考えられる。

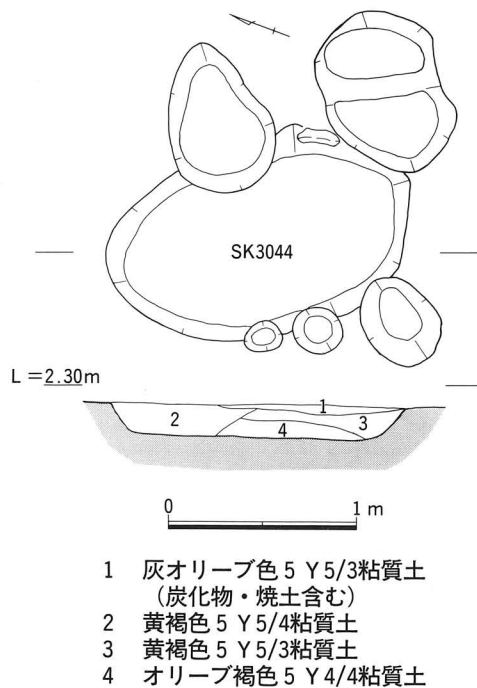
SK3047付近で検出した土坑群 (SK3038・3039・3043・3044・3046・3047・3048・3049) からは鉄滓が多量に出土しており、しかもこれらの土坑群はまとまりをもって位置していることから、この地点で鍛冶が行われたことが想定される。

出土遺物 (第126図)

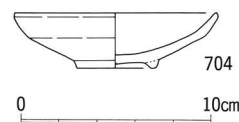
705は鉄釘である。

土坑48 (SK3048) (第125図)

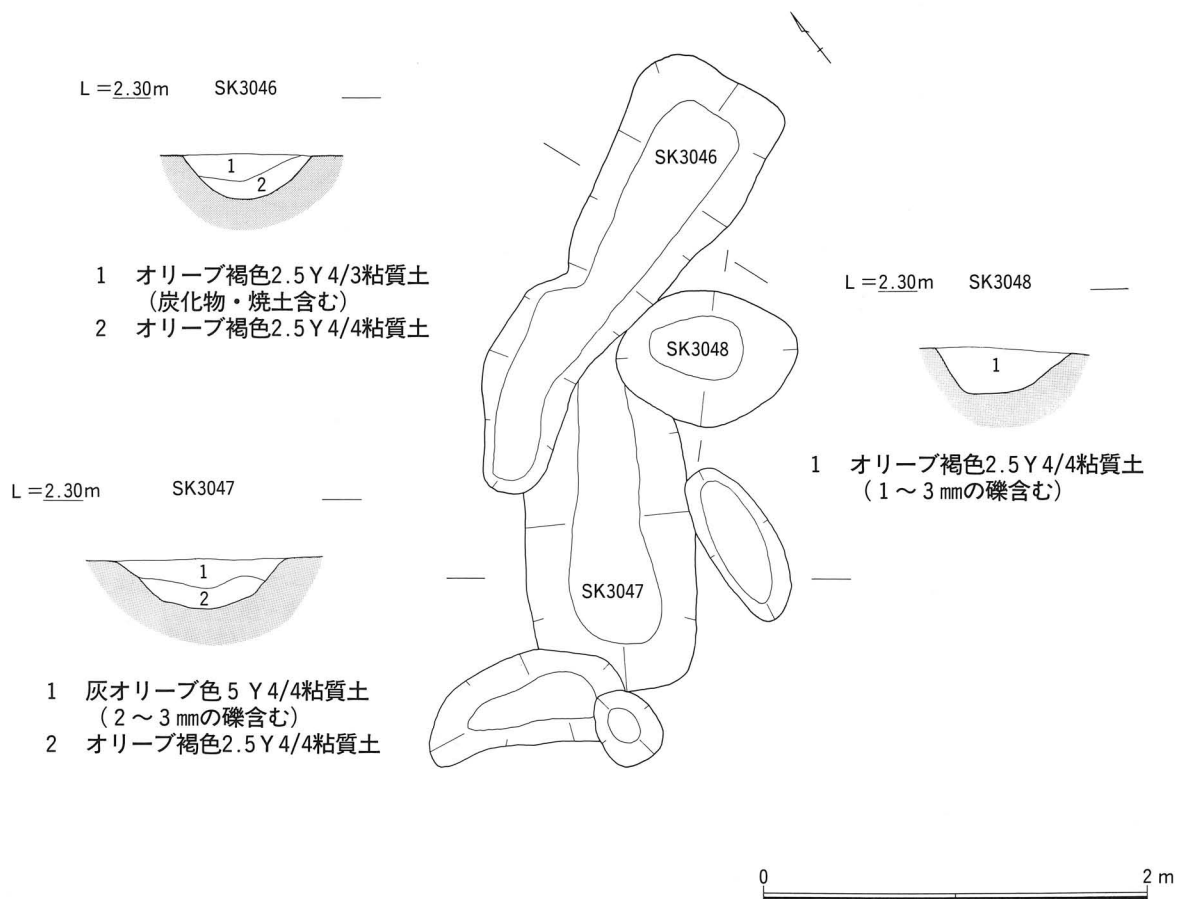
E-8で検出した土坑で、SK3047を切り、SK3046とは南側で接する。長軸0.94m、短軸0.72mを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは0.23mで、断面形は浅いすり鉢状である。埋土はオリーブ褐色粘質土1層で、1～3mmの礫を含む。鉄滓5点が出土している。



第123図 SK3044実測図



第124図 SK3044出土遺物実測図



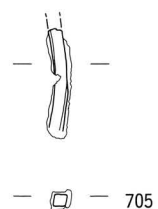
第125図 SK3046・3047・3048実測図

土坑49 (SK3049) (第127図)

E-9で検出した土坑で、SK3048の西側に位置し、柱穴を切って遺構を形成している。長軸1.37m、短軸0.67mを測り、平面形は不整楕円形を呈する。深さは0.14mで、埋土は1~3mmの礫を含む灰オリーブ色粘質土と炭化物を多量に含むオリーブ褐色粘質土の2層に分層される。埋土中から土師質の皿と鉄滓6点が出土している。

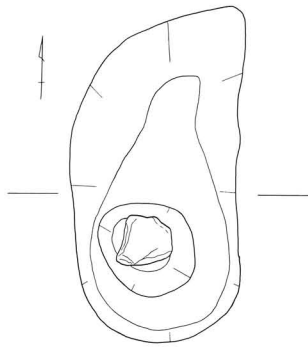
出土遺物 (第128図)

706は土師質の皿である。底部からわずかに内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。器壁を薄く仕上げ、体部内外面に丁寧な横ナデが施される。色調は橙色で、胎土は精良である。底部切り離し技法は不明。

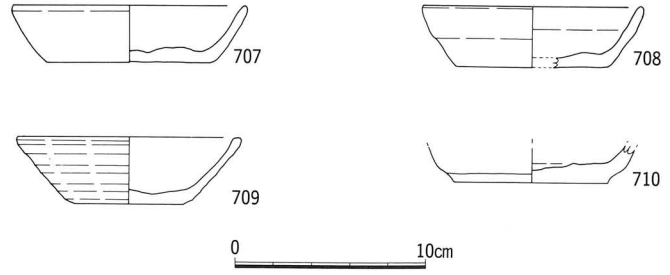


第126図 SK3047出土遺物実測図

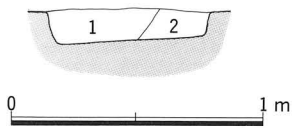
土坑54 (SK3054) (第129図)



L=2.30m

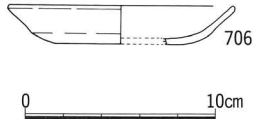


第130図 SK3054出土遺物実測図



- 1 灰オリーブ色 5 Y 5/3粘質土
- 2 オリーブ褐色 2.5 Y 4/3粘質土
(炭化物含む)

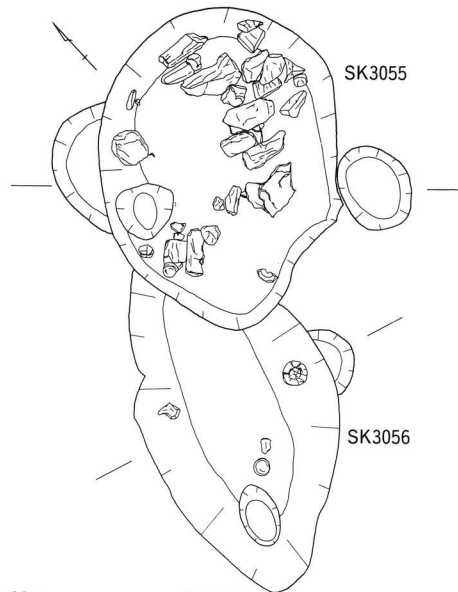
第127図 SK3049実測図



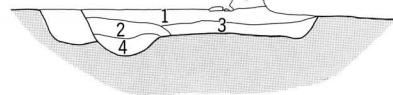
第128図 SK3049出土遺物実測図



L=2.30m



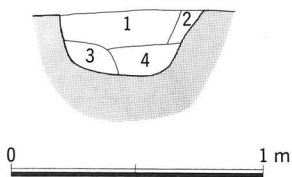
L=2.30m



- 1 暗灰黄色 2.5 Y 5/2粘質土
- 2 黄褐色 2.5 Y 5/3粘質土
- 3 暗灰黄色 2.5 Y 5/2粘質土
- 4 暗灰黄色 2.5 Y 5/2粘質土

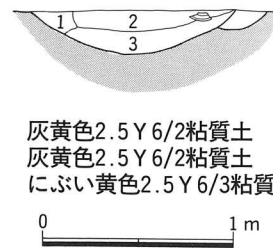
L=2.30m

SK3056



- 1 灰オリーブ色 5 Y 5/3粘質土
- 2 黄褐色 2.5 Y 5/4粘質土
- 3 オリーブ褐色 2.5 Y 4/4粘質土
- 4 オリーブ褐色 2.5 Y 4/3粘質土

第129図 SK3054実測図



- 1 灰黄色 2.5 Y 6/2粘質土
- 2 灰黄色 2.5 Y 6/2粘質土
- 3 にぶい黄色 2.5 Y 6/3粘質土

第131図 SK3055・3056実測図

C-7で検出した土坑で、長軸0.79m、短軸0.53mを測り、平面形は楕円形状を呈する。深さは0.26mで、埋土は灰オリーブ色粘質土、黄褐色粘質土、オリーブ褐色粘質土、同粘質土の4層に分層される。

出土遺物は、土師質の杯4点である。

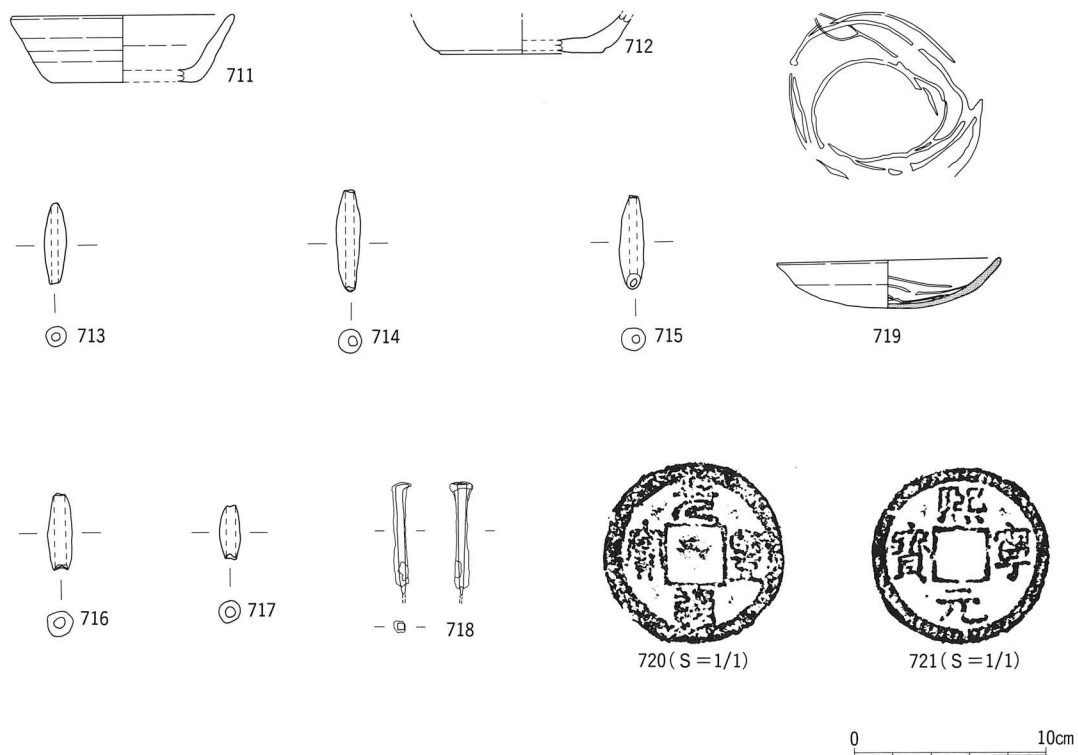
出土遺物 (第130図)

707~710は土師質の杯である。707は底部内面に凹凸があり、口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り痕を留める。708は底部に回転糸切り痕を留め、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げている。709・710は底部に回転ヘラ切り痕を留め、710は底部と体部の境に段が付いている。709は底部内面に凹凸があり、底部からほぼ直線的に立ち上がる。口縁端部は肥厚し、丸く仕上げている。

土坑55 (SK3055) (第131図)

B-6で検出した土坑で、SK3056の北側部を切って遺構を形成する。長軸1.72m、短軸1.25mを測り、平面形は不整楕円形である。深さは0.24mであるが、西側が少し深くなっている。底面西端部で柱穴を検出したが、土坑に伴うものかどうかは不明である。埋土は暗灰黄色粘質土、黄褐色粘質土、暗灰黄色粘質土、同色粘質土の4層に分層できる。この土坑内には大小の礫(結晶片岩・砂岩)が散乱した状態で検出されている。

出土遺物は、土師質の杯、瓦器碗、銅銭、鉄滓等である。



第132図 SK3055出土遺物実測図

出土遺物 (第132図)

711・712は土師質の杯である。711は底部より内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや外に開く。712は底部に回転糸切り痕を留める。713～717は土師質の土錘である。719は瓦器椀で、和泉型である。体部内面に渦巻き状のヘラミガキが施され、高台は付かない。器高は2.5cmを測り、森島編年のⅣ-4に比定される。720・721は銅銭で、720は「元豊通宝」(初鑄年1078年)、721は「熙寧元宝」(初鑄年1068年)の北宋銭である。718は鉄釘である。

土坑56 (SK3056) (第131図)

B-6で検出した土坑で、SK3055に一部切られる。残存の長軸1.9m、短軸0.98mを測り、本来の平面形は長円形を呈すると推測される。深さは0.23mで、断面形は浅いすり鉢状である。埋土は灰黄色粘質土、同色粘質土、にぶい黄色粘質土の3層に分層できる。

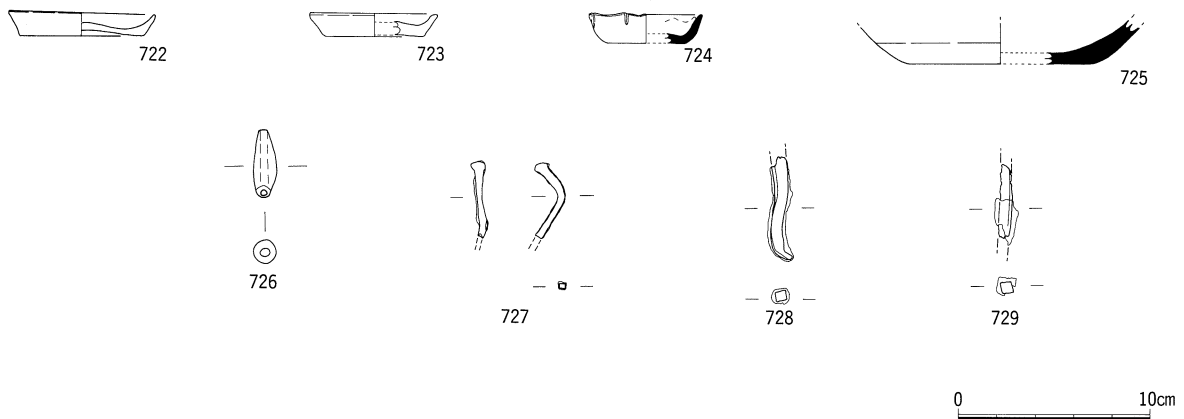
出土遺物は、土師質の皿、陶器の小皿等の他、鉄滓2点、鉄釘6点が見られる。

出土遺物 (第133図)

722・723は土師質の皿である。722は上げ底状で、口縁端部は尖り気味に仕上げている。底部に回転ヘラ切り痕を留める。723は口縁端部を丸くおさめるが、底部切り離し技法は不明である。724は陶器小皿である。底部より少し内彎しながら立ち上がり、口縁部を内方に折り曲げて輪花にしている。色調は灰白色で、底部外面は回転糸切り後ナデが施されている。輪花入子と称されるもので、瀬戸焼と思われる。725は東播系こね鉢の底部である。726は土錘である。727～729は鉄釘である。

土坑57 (SK3057) (第134図)

B-5で検出した小土坑である。長軸0.66m、短軸0.53mを測り、平面形は楕円形である。深さは0.3mを測り、埋土は5層に分層される。埋土上層から底部を欠いた土師質の鍋が上向き状態で出土している。



第133図 SK3056出土遺物実測図

出土遺物 (第135図)

730は土師質の鍋である。口縁部はほぼ直立気味で、口縁部直下に断面台形状の鏝が貼り付けられる。体部内外面下位に横・縦方向のハケ目が施され、外面中位にはユビオサエの跡が残る。

土坑64 (SK3064) (第136図)

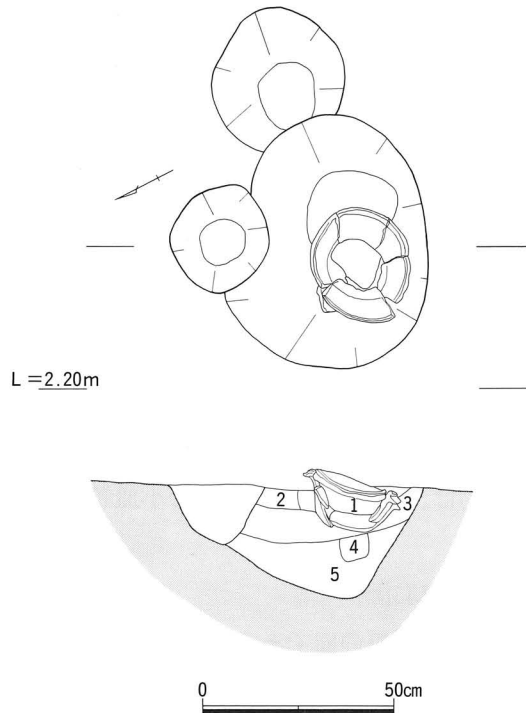
D・E-6で検出した。長軸3.07m、短軸0.9mを測り、平面形は不整長円形を呈する。東側の一部はSK3065と重複している。深さは0.14mと比較的浅く、埋土は土器片・炭化物を多量に含んだオリブ褐色粘性砂質土である。底面で根石をもつ柱穴を検出しているが、これはこの土坑に伴うものではない。

出土遺物は、土師質の杯・皿類・椀・瓦器碗等豊富にあり、一括資料を提供している。

出土遺物 (第137図)

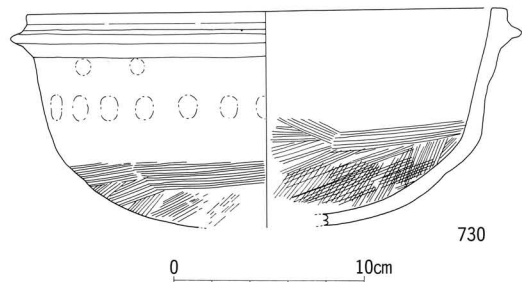
731～741は土師質の杯である。731～736は底部に回転糸切り痕を留める。739・740は同タイプの杯と見られ、739の底部には静止糸切り痕を留める。底部と体部の境に段がつき、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げている。741は底部が張り出し、体部はわずかに内彎しながら立ち上がる。737・738の底部切り離しは不明。742～746は土師質の皿である。743は口縁部をやや肥厚させ、端部を丸くおさめる。底部は回転ヘラ切り痕を留め、吉備系土師質皿と見られる。742・745は底部に回転糸切り痕を留める。746は底面の凹凸が顕著で、体部内外面に粗い横ナデを施す。底部の切り離しは静止糸切りである。744の底部切り離し技法は不明。747～754は高台付皿の底部である。747～752は回転糸切り痕を留めており、747は底端部が少し張り出し、底部内面は凹面状にしている。753・754の底部切り離しは不明である。755～758は土師質の椀で、吉備系土師器椀である。色調はにぶい黄橙色・灰白色を呈し、復原の口径値は11.4～12.3cmを測る。

759は和泉型瓦器椀である。体部内面にミガキが観察されない。760は青磁碗である。口縁部はやや外反しており、体部外面に幅の広い蓮弁文を削り出し、全面に淡緑色の厚い釉を施している。横田・森田分類案の龍泉窯系青磁碗I-5aに分類される。761は土師質の鍋である。口縁端部を平坦に仕上げ、内面は横ハケ目を施し、外面にはユビオサエが見られる。



- 1 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土
- 2 黄灰色2.5Y5/2粘質土
- 3 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土
- 4 灰オリーブ色5Y4/2粘質土
- 5 灰オリーブ色5Y5/2粘質土

第134図 SK3057実測図



第135図 SK3057出土遺物実測図

土坑65 (SK3065) (第136図)

D-6で検出した土坑で、SK3064の東側の一部を切っている。長軸1.41m、短軸1.35mで、平面形は方形状を呈する。断面形はすり鉢状で、深さは0.31mを測る。埋土は4層に分層できるが、オリーブ褐色粘性砂質土を基調にしている。SK3064と同様に埋土中から土師質の杯・皿類等が多量に出土しており、遺物出土状況もSK3064と類似している。

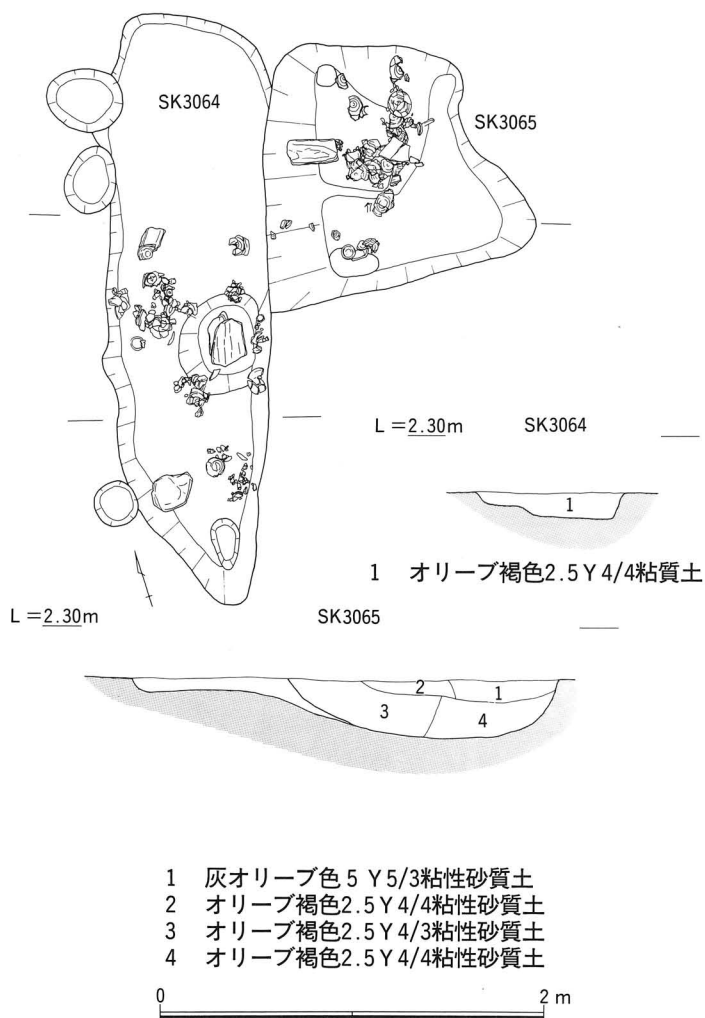
出土遺物 (第138図)

762~782は土師質の杯である。底部切り離し技法から分類すると、762~764・773~775は回転ヘラ切りで、766~770・779~782は回転糸切りである。763・764は同タイプの杯で、体部は直線的に立ち上がり、器壁を薄く仕上げている。色調は橙色・淡赤橙色で、吉備系の土器である。762・765はともに上げ底状で、体部はやや内彎しながら立ち上がり、全体に器壁を薄く仕上げている。同一個体と思われる。口縁部をわずかに肥厚させて、端部は尖り気味である。772は底部にヘラ切り痕を留め、器高が大きく、底部内面、体部外面に成形による凹凸が顕著である。783・784は土師質の皿で、底部に回転糸切り痕を留める。785~788は土師質の高台付皿である。786は他の高台付皿に比べ、底部の器高は低く、底部に回転糸切り痕を留める。

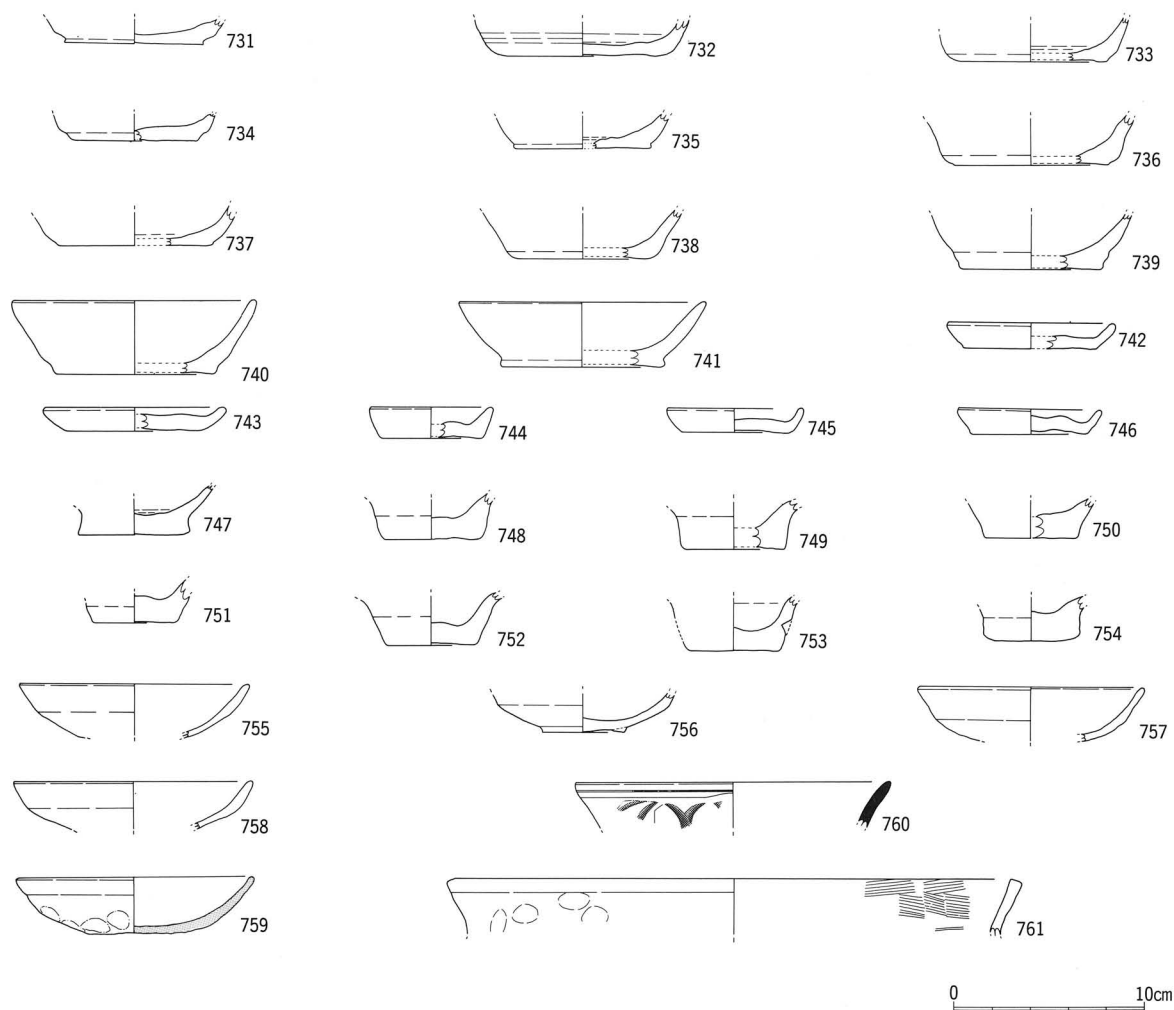
789は和泉型の瓦器椀である。口縁部を若干肥厚させて、体部内面にはヘラミガキがまばらに施される。790・791は土師質の土錘である。792は陶器甕の体部片で、体部外面に格子状の押印文を施し、常滑焼と見られる。

土坑69 (SK3069) (第139図)

D-5で検出した南北に長く延びる土坑で、北端部はSK3068に切られる。残存の長軸は2.28mで、短軸は1.15mを測り、平面形は不整形である。深さは0.17mと浅く、断面は浅いすり鉢状を呈する。南側の底面で検出した根石をもつ柱穴は、この土坑に伴うものではない。埋土は炭化物を含むオリーブ褐色粘質土、黄褐色粘質土、オリーブ褐色粘質土の3層に分層できる。



第136図 SK3064・3065実測図

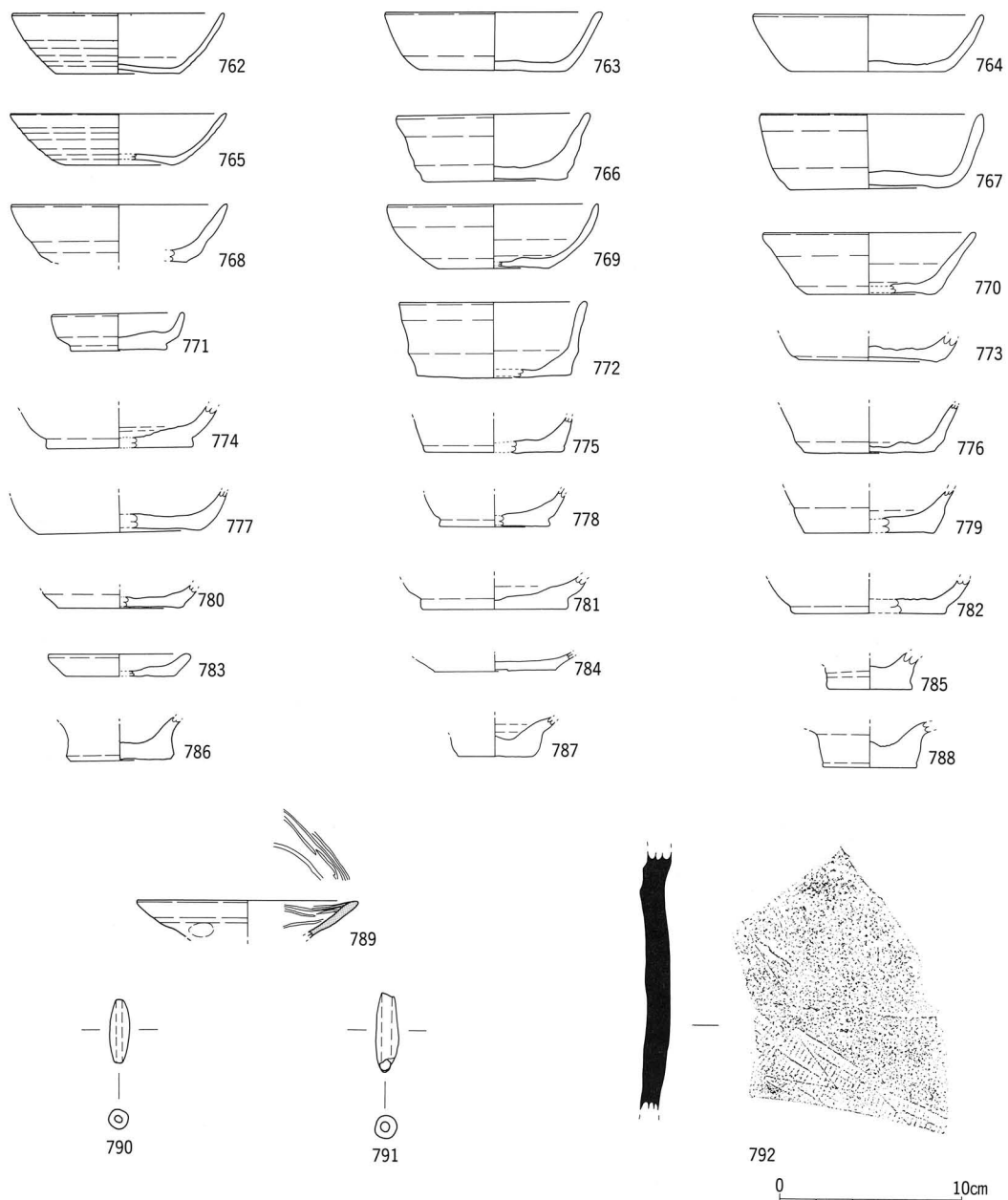


第137図 SK3064出土遺物実測図

出土遺物 (第140図)

793～799は土師質の杯である。793～795は底部に回転糸切り痕を留める。795は底部内面に凹凸があり、底部から直線的に立ち上がるが、口縁部はわずかに内彎し、端部を尖り気味に仕上げている。800は土師質の皿で、底部外面は回転ヘラ切り後ナデ消されている。802・803は土師質の高台付皿である。803の底部にはヘラ切り痕を留める。801は瓦器椀で、和泉型である。体部内面のミガキは観察されない。804・805は土師質の土錘である。

806・807は東播系こね鉢である。806は口縁部を緩やかに外反させ、端部は上方に拡張されている。807は口縁端部を肥厚させ、端部上方への拡張が顕著である。808は銅銭で、北宋銭の「景祐元宝」(初鑄年1034年)である。

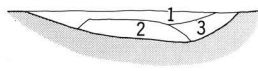
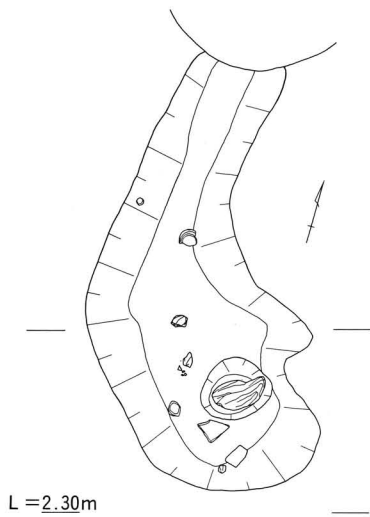


第138図 SK3065出土遺物実測図

土坑71 (SK3071) (第141図)

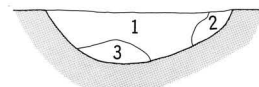
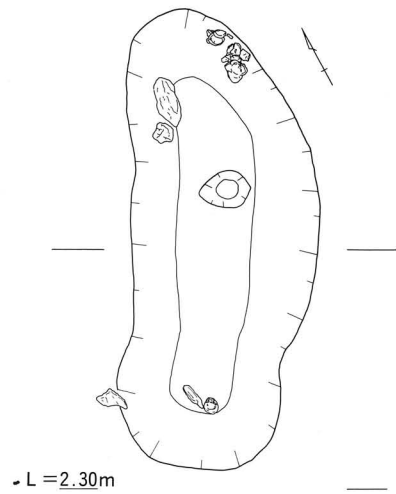
D-5で検出した長円形の土坑で、SK3069の西側に位置する。SK3072の北端部を切って遺構を形成する。長軸2.41m、短軸0.99mを測り、深さは0.27mである。埋土は黄灰色粘質土、にぶい黄色粘質土、黄褐色粘質土の3層に分層できる。

出土遺物は、土師質の杯・皿等である。



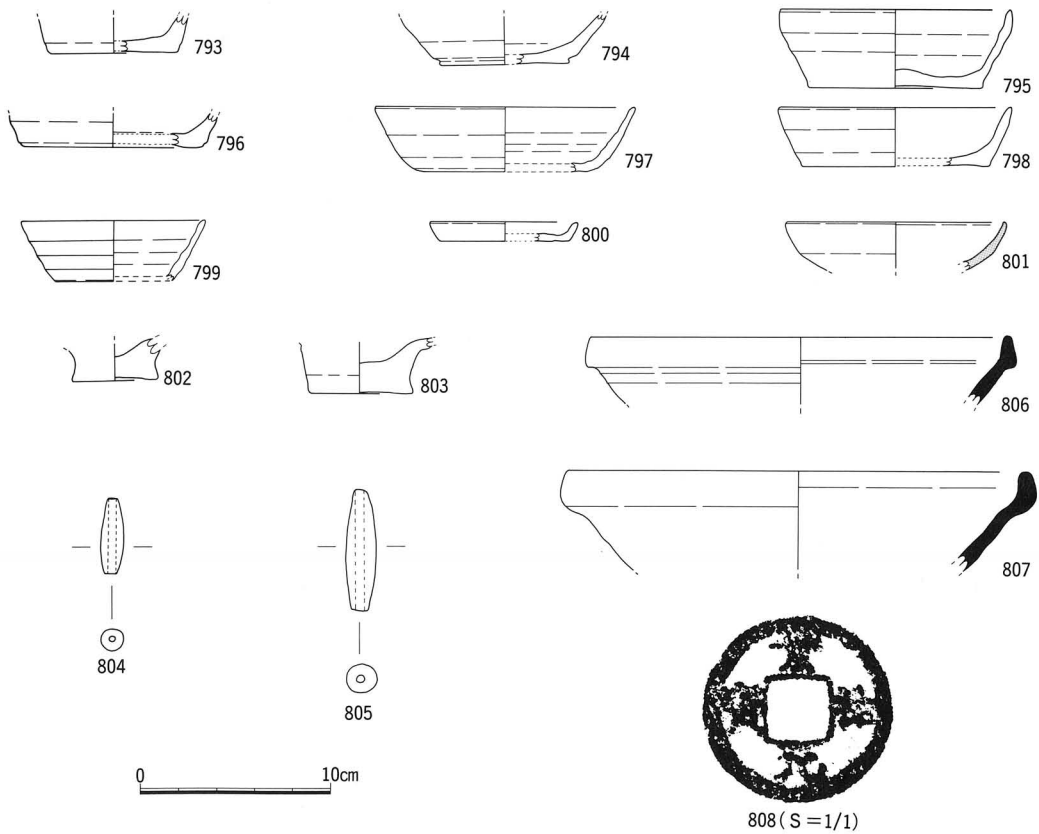
- 1 オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土
- 2 黄褐色2.5Y5/3粘質土
- 3 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土

第139図 SK3069実測図

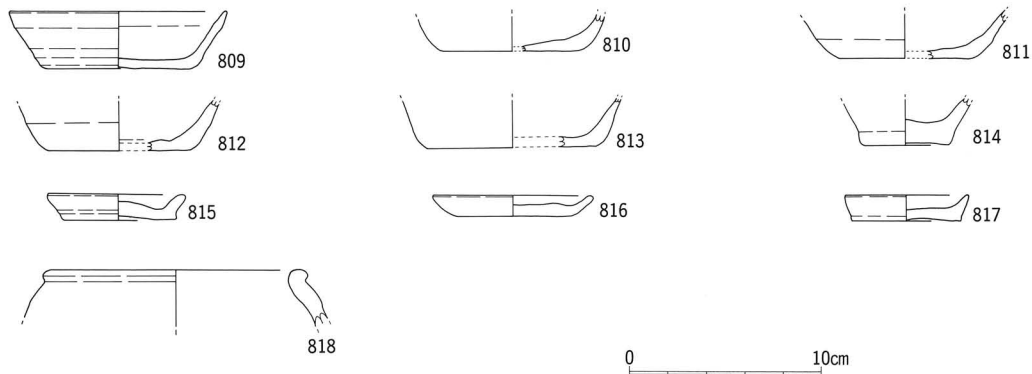


- 1 黄灰色2.5Y5/1粘質土
- 2 にぶい黄色2.5Y6/3粘質土
- 3 黄褐色2.5Y5/3粘質土

第141図 SK3071実測図



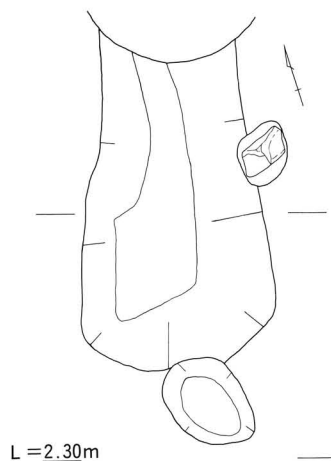
第140図 SK3069出土遺物実測図



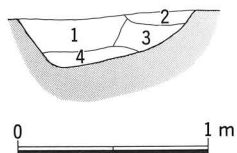
第142図 SK3071出土遺物実測図

出土遺物 (第142図)

809～813は土師質の杯である。809は底部に回転ヘラ切り痕を留め、体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味である。吉備系の土器と思われる。810～813の底部切り離しは回転糸切りであるが、812・813は形態から同タイプの杯である。814は土師質の高台付皿の底部である。815～817は土師質の皿である。815は上げ底状で、全体的に器壁は厚く、底部切り離しは回転糸切りである。816は口縁部がわずかに内彎し、底部に回転ヘラ切り痕を留める。吉備系土師質皿と見られる。817は直線的に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。818は土師質土器である。体部は内彎し、口縁部は「く」の字状の形態である。口縁部内外面には横ナデが施されている。器種は小壺か。



L = 2.30m

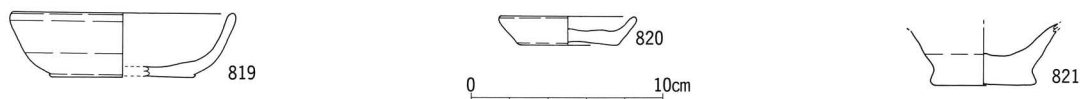


- 1 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土
- 3 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土
- 4 オリーブ褐色2.5Y4/6粘質土

土坑72 (SK3072) (第143図)

D・E-4・5で検出した土坑で、北端部はSK3071に切られる。残存の長軸は1.64m、短軸1.0mを測り、本来の平面形は長円形と推測される。深さは0.25mで、埋土は4層に分層できるが、炭化物を含んだオリーブ褐色粘質土を基調としている。

第143図 SK3072実測図



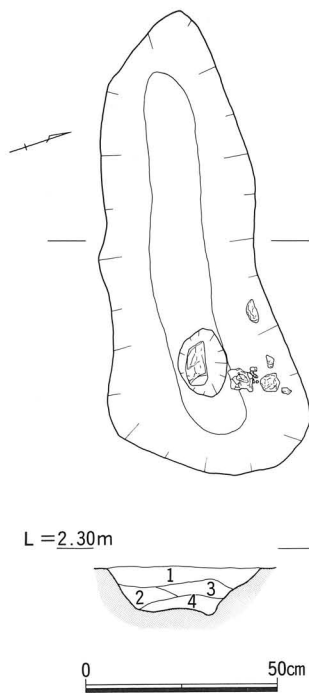
第144図 SK3072出土遺物実測図

出土遺物 (第144図)

819は土師質の杯である。底部から内彎して立ち上がり、口縁端部はやや肥厚して、端部を丸くおさめている。底部切り離しは不明。820は土師質の皿で、底部に回転糸切り痕を留める。821は土師質の高台付皿である。

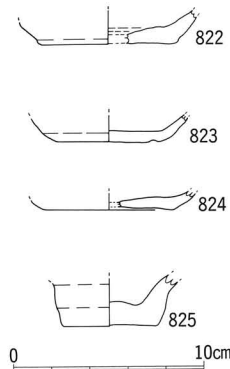
土坑74 (SK3074) (第145図)

D-4・5で検出した土坑で、SK3071の北側に位置する。ほぼ東西に延びた長円形の土坑で、長軸2.4m、短軸1.03mを測る。深さは0.26mで、埋土は4層に分けられる。底面東側で根石をもつ柱穴を検出していることから、この土坑はこの位置に建てられていた建物の廃絶後に造られたものと考えられる。

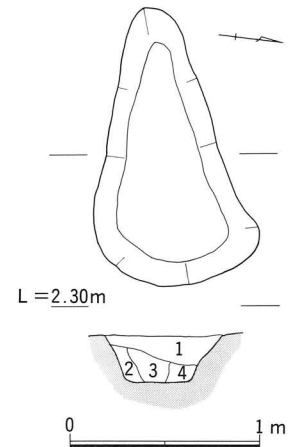


- 1 暗オリーブ色 5 Y 4/3 粘質土
- 2 灰オリーブ色 5 Y 5/3 粘質土
- 3 灰オリーブ色 5 Y 5/2 粘質土
- 4 オリーブ褐色 2.5 Y 4/4 粘質土

第145図 SK3074実測図

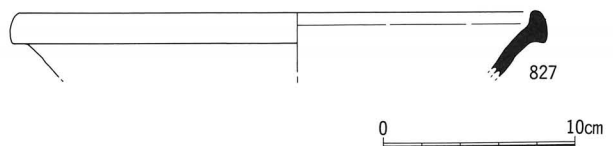


第146図 SK3074出土遺物実測図



- 1 黄褐色 2.5 Y 5/3 粘質土
- 2 黄褐色 2.5 Y 5/4 粘質土
- 3 オリーブ褐色 2.5 Y 4/3 粘質土
- 4 オリーブ褐色 2.5 Y 4/4 粘質土

第147図 SK3077実測図



第148図 SK3077出土遺物実測図

出土遺物 (第146図)

822～824は土師質の杯である。822は底部に静止糸切り痕を留める。823は回転糸切り後やや粗いナデが施されている。824は底部内面に丁寧なナデが施され、外面に回転ヘラ切り痕を留める。色調は灰白色で、吉備系に属する杯である。825は土師質の高台付皿の底部であるが、底部切り離し技法は不明である。

土坑77 (SK3077) (第147図)

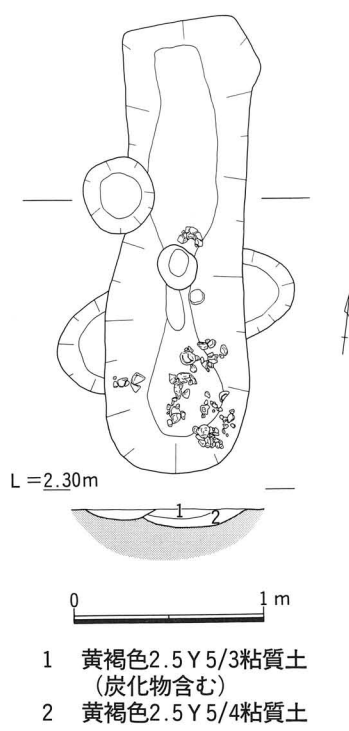
D-4で検出した土坑で、SD3005とSD3013のほぼ中間に位置する。長軸1.46m、短軸0.8mを測り、平面形は西側が突出した楕円形状を呈する。深さは0.24mを測り、埋土は4層に分けられる。埋土中から土師質の羽釜とこね鉢がそれぞれ1点出土している。

出土遺物 (第148図)

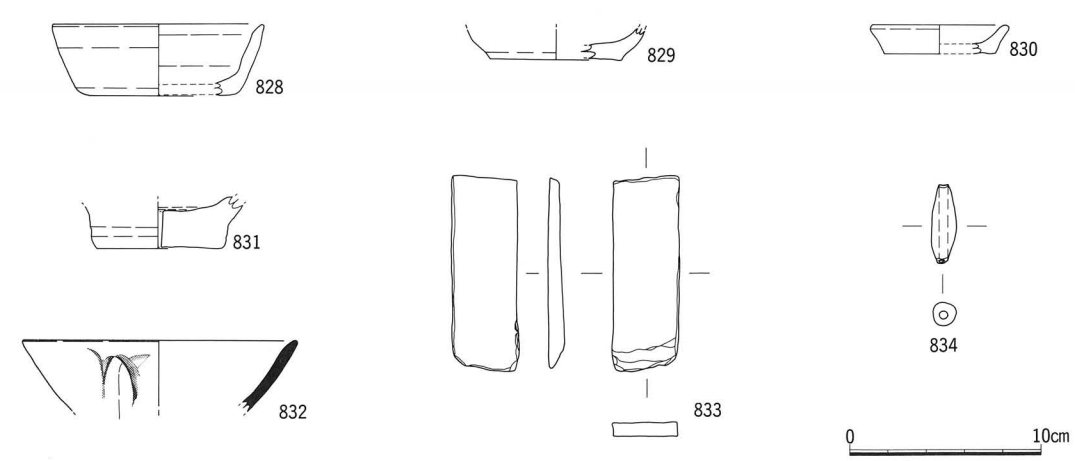
826は土師質の羽釜である。口縁部は直立し、端部は平坦におさめる。口縁部直下に端部が丸みを帯びた鏝が貼り付けられる。口縁部内面には横ナデが施され、外面にはユビオサエがされる。827は東播系こね鉢である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は上下に拡張され、端面は凸面を形成する。森田編年の第Ⅲ期第2段階に比定される。

土坑78 (SK3078) (第149図)

E-6で検出した土坑で、SK3064の南側に位置している。。長軸2.4m、短軸0.76mを測り、平面形は南北に延びた長円形を呈する。深さは0.08mと浅く、埋土は黄褐色粘質土、同粘質土の2層に分層できる。埋土中から土師質土器の細片が多く出土しているが、他に青磁碗、砥石も見られる。



第149図 SK3078実測図



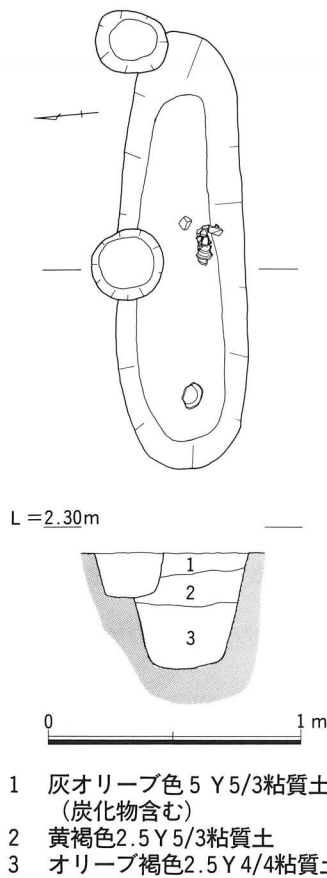
第150図 SK3078出土遺物実測図

出土遺物 (第150図)

828・829は土師質の杯である。828は体部が直線的に立ち上がり、口縁端部を尖り気味に仕上げる。829は底部に回転ヘラ切り痕を留める。830は土師質の皿で、底部には回転糸切り後ナデが施されている。831は土師質の高台付皿である。底部中央が穿孔され、底部外面に回転糸切り痕を留める。832は青磁碗である。体部外面に幅の広い鎬蓮弁文を有す。横田・森田分類案の I - 5 b に分類される。833は砥石である。長方形を呈し、長さ9.9cm、幅4.0cm、厚さ0.7cmである。834は土錘である。

土坑79 (SK3079) (第151図)

E - 5・6 で検出した長円形の土坑で、SK3078の西側に位置している。長軸1.72m、短軸0.52m、深さ0.47mを測る。断面形はU字状で、埋土は3層に分けられる。



- 1 灰オリーブ色 5 Y 5/3 粘質土 (炭化物含む)
- 2 黄褐色 2.5 Y 5/3 粘質土
- 3 オリーブ褐色 2.5 Y 4/4 粘質土

第151図 SK3079実測図

出土遺物 (第152図)

835は土師質の杯で、底部に回転糸切り痕を留める。836・837は土師質の椀である。ともに断面三角形の高台が貼り付けられる。法量は口径10.8cm、器高3.05~3.45cmを測る。吉備系土師器椀である。

土坑80 (SK3080) (第153図)

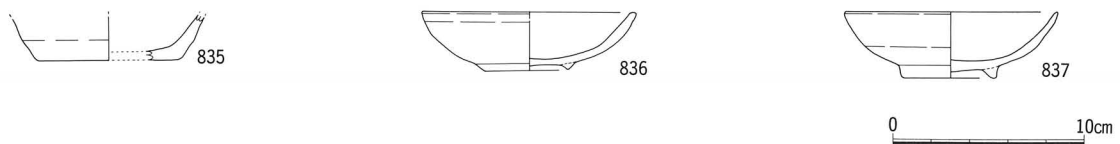
E - 6 で検出した土坑の一部である。南側の大部分が調査区外になるため、全体の規模は不明であるが、長軸0.93m分を検出した。断面形はU字状に近く、深さは0.57mを測る。埋土中から土師質土器の細片が多量に出土しているが、図示可能なものは杯4点である。

出土遺物 (第154図)

838~841は土師質の杯である。838・839の底部切り離し技法は不明であるが、838は体部が直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。839は口縁部が外反する。840は器高がやや大きく、底部内面に凹凸があり、体部は直線的に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕を留める。841は体部が大きく内彎し、底部に回転糸切り痕を留める。

土坑82 (SK3082) (第155図)

E - 5 で検出したが、SK3080と同様に南側の大部が調査区外にかかる。検出した長軸は1.38mで、深さは0.34mを測る。埋土は5層

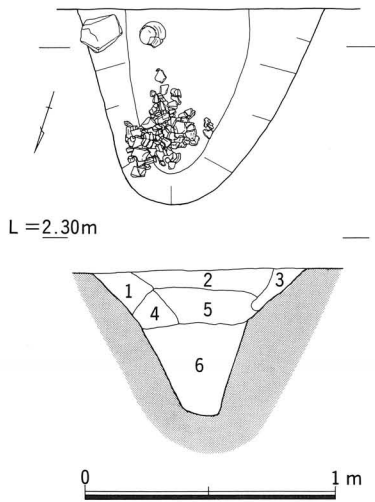


第152図 SK3079出土遺物実測図

に分層できるが、埋土中から土師質の鍋、瓦質の羽釜が出土している。

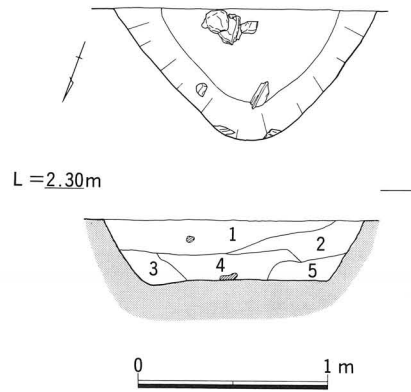
出土遺物（第156図）

842・843は土師質の鍋である。ともに口縁部が「く」の字状の形態で、体部内面に横ハケ目、外面にユビオサエが施される。844は瓦質の羽釜である。口縁部はわずかに内彎し、端部を平坦に仕上げ、断面



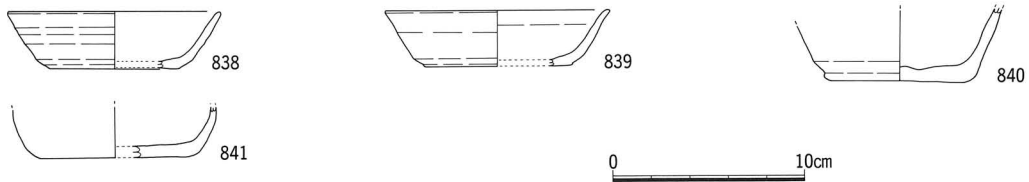
- 1 黄褐色2.5Y5/3粘質土
- 2 オリーブ褐色5Y5/3粘質土
- 3 黄褐色2.5Y5/6粘質土
- 4 灰オリーブ色5Y5/2粘質土
- 5 暗オリーブ色5Y4/3粘質土
- 6 黄褐色2.5Y5/6粘質土

第153図 SK3080実測図

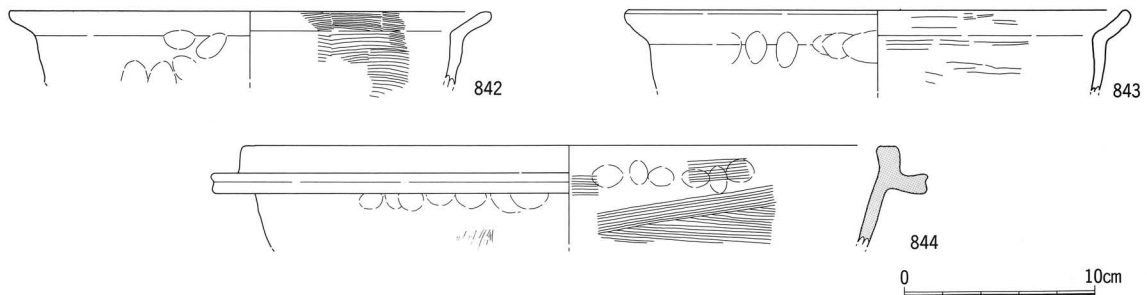


- 1 オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土
- 2 黄褐色2.5Y5/4粘質土
- 3 黄褐色2.5Y5/4粘質土
- 4 黄褐色2.5Y5/3粘質土
- 5 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土

第155図 SK3082実測図



第154図 SK3080出土遺物実測図



第156図 SK3082出土遺物実測図

方形で端部が凹面をなす鏝が貼り付けられる。体部内面には横ハケ目が施され、外面にはユビオサエが明瞭に残る。

土坑89 (SK3089) (第157図)

E-2で検出した。SE3002の北側に位置しており、長軸2.19m、短軸0.82mで、平面形は長円形を呈する。断面形はすり鉢状で、深さは0.32mを測り、埋土は炭化物を多量に含んだ暗灰黄色粘質土、黄褐色粘質土の2層に分層できる。

出土遺物は、土師質土器の細片が比較的多くあり、杯・高台付皿・椀が見られる。

出土遺物 (第158図)

845～852は土師質の杯である。845は底部内面に凹凸があり、底部外面に回転糸切り痕を留める。848～850は底部に回転ヘラ切り痕を留めるが、849・850はともに器壁が厚い。846は丸底状で、体部外面に成形による稜が数条がつく。853～858は土師質の高台付皿である。いずれも底部に回転糸切り痕を留める。854は底部内面に凹凸があり、口縁部にかけて直線的に立ち上がり、器壁を薄く仕上げている。復原口径7.4cm、器高2.4cm、底径4.2cmを測る。859・860は土師質の椀で、吉備系土師器椀ある。859は口縁部にかけて大きく内彎し、体部内外面に横ナデを施す。861は土師質の土錘である。

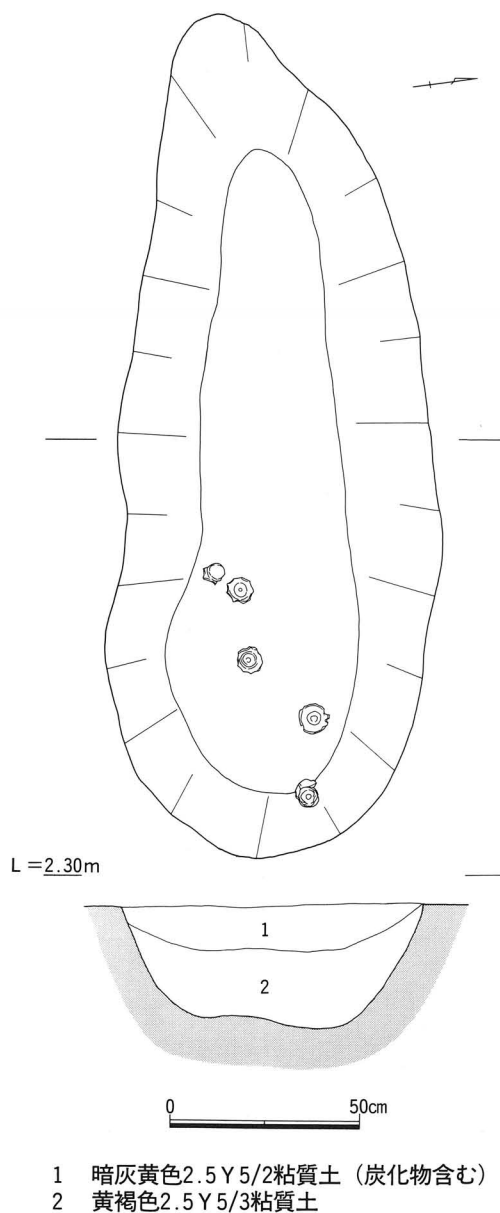
〈4次調査〉

土坑99 (SK3099) (第159図)

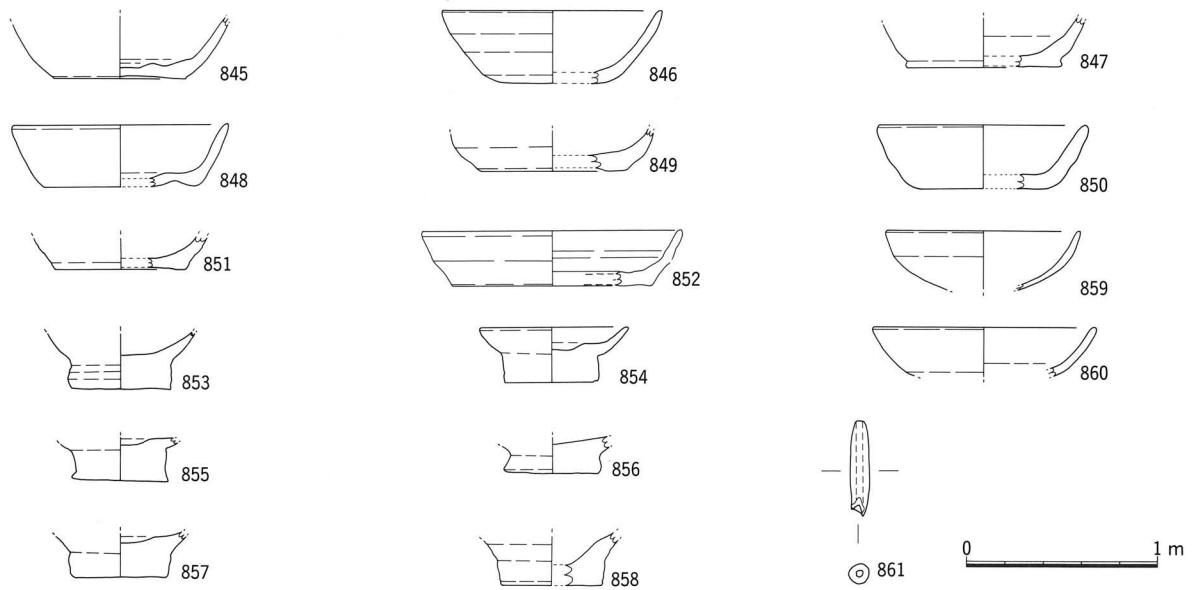
D・E-12で検出した土坑で、攪乱部とSD3016の中間に位置している。長軸1.28m、短軸0.77mを測り、平面形は楕円形を呈する。断面形は浅いすり鉢状で、深さは0.2mである。埋土は5層に分層できるが、上層は灰色粘質土、下層はオリブ灰色粘質土に分けられる。埋土中から土師質の鍋脚部と土錘が各1点出土している。

出土遺物 (第160図)

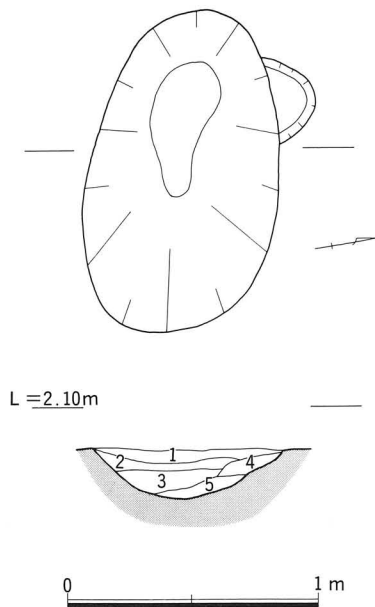
862は土師質の脚部である。断面は長円形で、残存長22.0cmを測る。外面全体にユビオサエが明瞭に残る。鍋の脚部と思われる。863は土師質の土錘である。



第157図 SK3089実測図

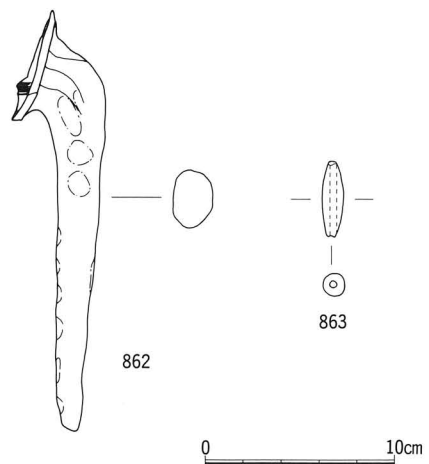


第158図 SK3089出土遺物実測図

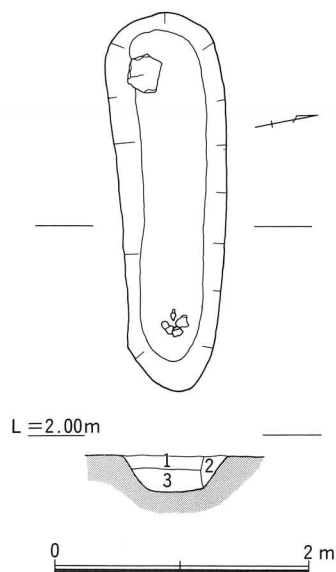


- 1 灰色7.5Y6/1粘質土
- 2 灰色10Y6/1粘質土
- 3 オリーブ灰色10Y6/2粘質土
- 4 灰色10Y6/1粘質土
- 5 オリーブ灰色10Y6/2粘質土

第159図 SK3099実測図

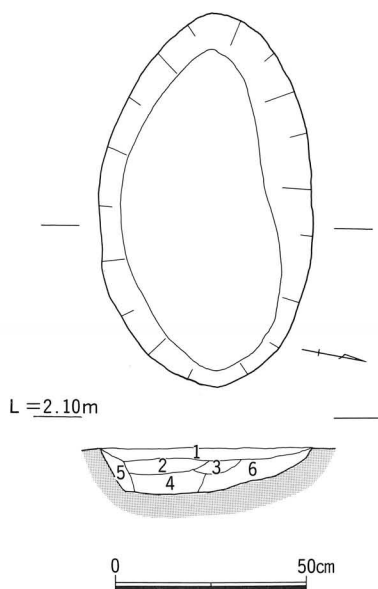


第160図 SK3099出土遺物実測図



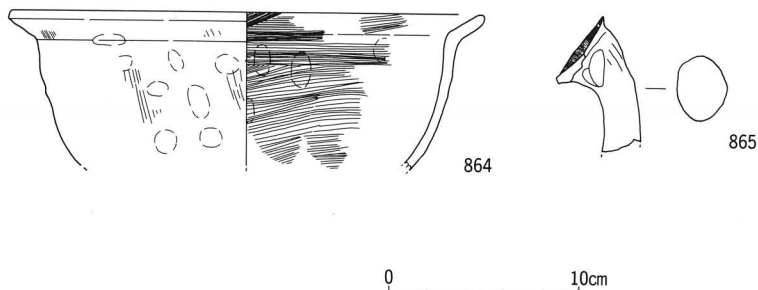
- 1 黄褐色2.5Y5/4粘質土
- 2 にぶい黄色2.5Y6/3粘質土
- 3 黄褐色2.5Y5/3粘質土

第161図 SK3101実測図



- 1 灰色10Y6/1粘質土
- 2 灰色7.5Y6/1粘質土
(炭化物含む)
- 3 灰色10Y6/1粘質土
- 4 灰オリーブ色5Y6/2粘質土
- 5 灰オリーブ色5Y6/2粘質土
- 6 灰色10Y6/1粘質土

第163図 SK3102実測図



第162図 SK3101出土遺物実測図

土坑101 (SK3101) (第161図)

E-11で検出した東西に延びる土坑で、SD3017の北側に位置する。長軸1.49m、短軸0.39mを測り、平面形は長円形で、深さは0.28mである。埋土は黄褐色粘質土、にぶい黄色粘質土、黄褐色粘質土の3層である。

出土遺物は、土師質の鍋と鍋脚部である。

出土遺物 (第162図)

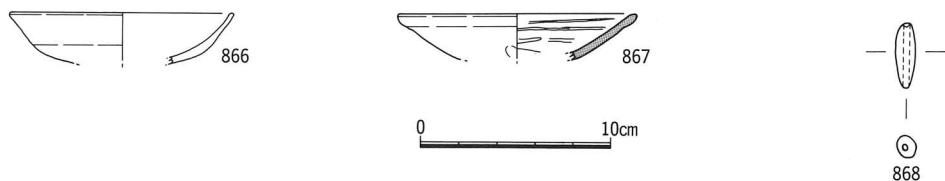
864は土師質の鍋である。口縁部が「く」の字状で、端部はやや平坦に仕上げている。口縁部・体部内面には横ハケ目が施され、外面にはユビオサエ後、縦方向のハケ目が施されている。865は土師質の脚部で、ヘラケズリ後に丁寧な縦方向のナデが施されている。鍋の脚部と見られる。

土坑102 (SK3102) (第163図)

E-12・13で検出した。SD3018の西側に位置し、長軸1.46m、短軸0.84mを測り、平面形は楕円形である。断面は浅いすり鉢状を呈し、深さは0.18mである。埋土は6層に細分され、埋土中から土師質の椀、瓦器椀が出土している。

出土遺物 (第164図)

866は土師質の椀で、吉備系土師器椀である。867は和泉型瓦器椀である。口縁部がやや肥厚し、体部内面にヘラミガキがまばらに施される。868は土錘である。



第164図 SK3102出土遺物実測図

土坑103 (SK3103) (第165図)

E-13で検出した土坑で、SK3102の東側に位置する。北側の一部は攪乱に切られるため全体の規模は不明であるが、残存の長軸は1.38mで、短軸は0.58mである。平面形は不整長円形を呈し、深さは0.25mである。埋土は黄褐色粘質土、にぶい黄色粘質土、黄褐色粘質土の3層に分層できる。埋土中から瓦器碗が2点出土している。

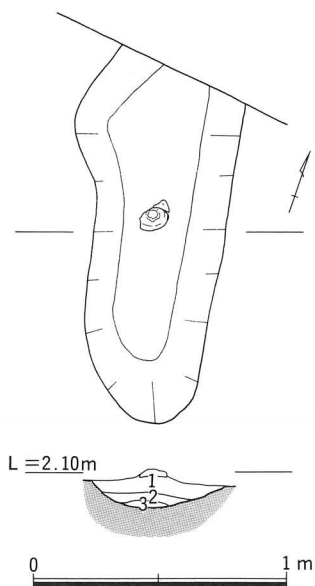
出土遺物 (第166図)

869・870は和泉型瓦器碗である。869は体部内面にヘラミガキがわずかに施され、退化した高台が貼り付けられていたと思われるが、剥落している。870は体部が大きく外に開き、口縁部はやや肥厚している。体部内面のヘラミガキはまばらで、退化した高台が付く。ともに森島編年のIV-4に属する。

土坑109 (SK3109) (第167図)

E-18で検出した土坑で、SD3019の東側に位置している。東側が第2遺構面で検出したSD2007に切られるため、全体の規模は不明であるが、残存の長軸1.42m、短軸1.25mを測る。深さは0.76mとやや深く、断面形はU字状を呈する。埋土は11層に分層できるが、全体に鉄分・炭化物を含んでいる。この

土坑の底面付近から土師質の皿3点と鍋が1点が出土しているが、遺物の様相からこの土坑は時代が下ることが予想され、第2遺構面(室町時代)に伴う土坑の可能性はある。



- 1 黄褐色2.5Y5/3粘質土
- 2 にぶい黄色2.5Y6/3粘質土
- 3 黄褐色2.5Y5/4粘質土

第165図 SK3103実測図

出土遺物 (第168図)

871~873は土師質の皿で、手づくねで成形されている。871は体部が外側に大きく開いて直線的に延びる。全体に器壁は薄い。底部に比べ体部の器壁がやや厚い。体部内面には丁寧な横ナデが施される。色調は淡赤褐色で、胎土は精良である。872は底部を欠くが、871と同じ特徴をもつ。873は871・872と同様に



第166図 SK3103出土遺物実測図

全体に器壁が薄く、体部は大きく外側に開くが、口縁端部は外反し、やや肥厚している。体部内外面に丁寧な横ナデが施される。色調は淡橙色である。871～873のタイプの皿は他に出土しておらず、874の鍋と相伴していることから、時代が下る可能性が高い。

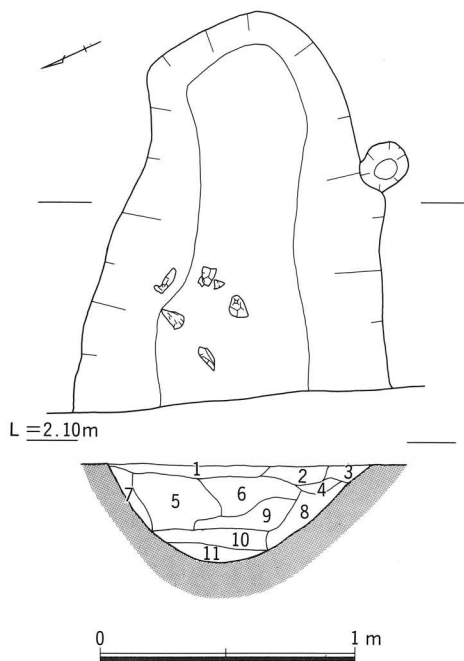
874は土師質の鍋である。体部・口縁部はやや内彎し、口縁部端部を上下に拡張し、端面を凹面に仕上げている。体部内面にはナデが施され、外面にはユビオサエが残る。15世紀代の鍋と考えられる。

土坑112 (SK3112) (第169図)

B-21・22で検出した楕円形の土坑である。長軸1.96m、短軸1.2mを測り、深さは0.36mである。埋土は5層に分層できるが、鉄分・マンガンを含んだ灰オリーブ色粘質土を基調にしている。埋土中から瓦質の椀が1点出土している。

出土遺物 (第170図)

875は瓦質の小椀である。断面三角形の高台が付き、体部は内彎するが、口縁部はやや肥厚し、端部を丸くおさめる。体部内外面には横ナデが施されている。



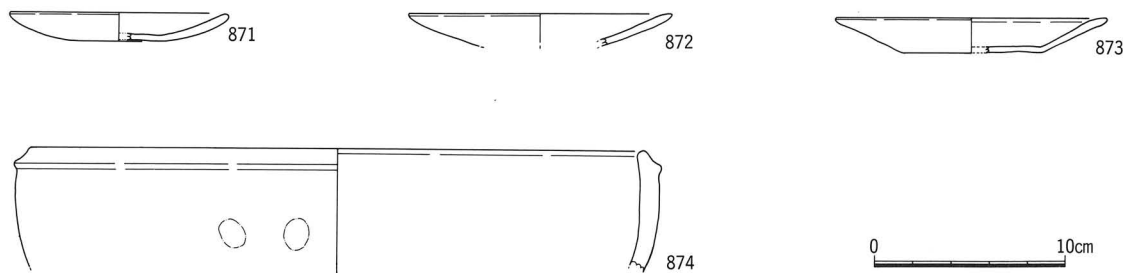
< 5 次調査 >

土坑119 (SK3119) (第171図)

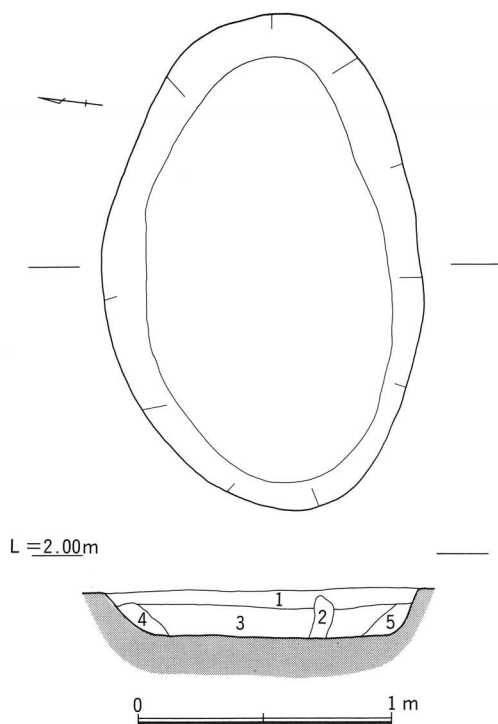
B-35・36で検出した。平面形は不正な楕円形に近く、北側は調査区外にかかっている。西側をSK3120・3127に切られる。長軸9.0m、短軸5.9m、深さ0.45mを測る。埋土は4層に分層され、炭化物を含む。第1層より土師質の杯・椀、陶器類、石鍋が出土している。

- 1 灰オリーブ色 5 Y 5/3 粘質土
- 2 灰オリーブ色 5 Y 5/3 粘質土
- 3 灰オリーブ色 5 Y 5/3 粘質土
- 4 灰オリーブ色 5 Y 5/4 粘質土
- 5 灰オリーブ色 5 Y 5/2 粘質土
- 6 灰オリーブ色 5 Y 5/2 粘質土
- 7 黄褐色 2.5 Y 5/4 粘質土
- 8 灰オリーブ色 5 Y 5/3 粘質土
- 9 灰オリーブ色 5 Y 5/3 粘質土
- 10 暗オリーブ色 5 Y 4/3 粘質土
- 11 オリーブ色 5 Y 5/4 粘質土

第167図 SK3109実測図

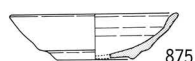


第168図 SK3109出土遺物実測図

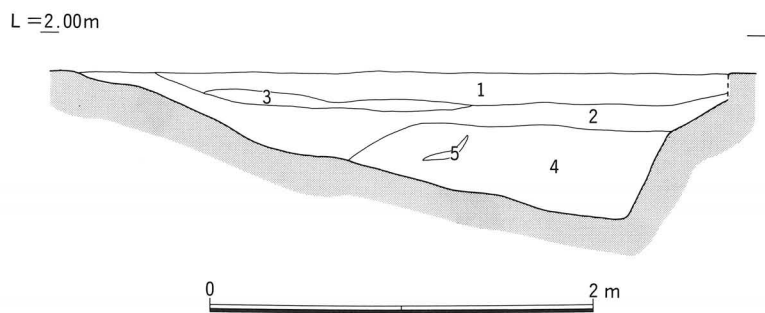


- 1 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土
- 2 灰色 5 Y5/1粘土
- 3 灰オリーブ色 5 Y5/3
- 4 灰色 5 Y5/1粘質土
- 5 灰オリーブ色 5 Y6/2粘質土

第169図 SK3112実測図



第170図 SK3112出土遺物実測図



- 1 黄褐色 2.5 Y5/1シルト
- 2 オリーブ褐色 2.5 Y4/4粘質土
- 3 にぶい黄褐色 10YR4/3粘質土 (炭化物含む)
- 4 オリーブ色 5 Y5/4粘質土
- 5 オリーブ色 5 Y5/4粘質土 (炭化物の集積)

第171図 SK3119実測図

出土遺物 (第172図)

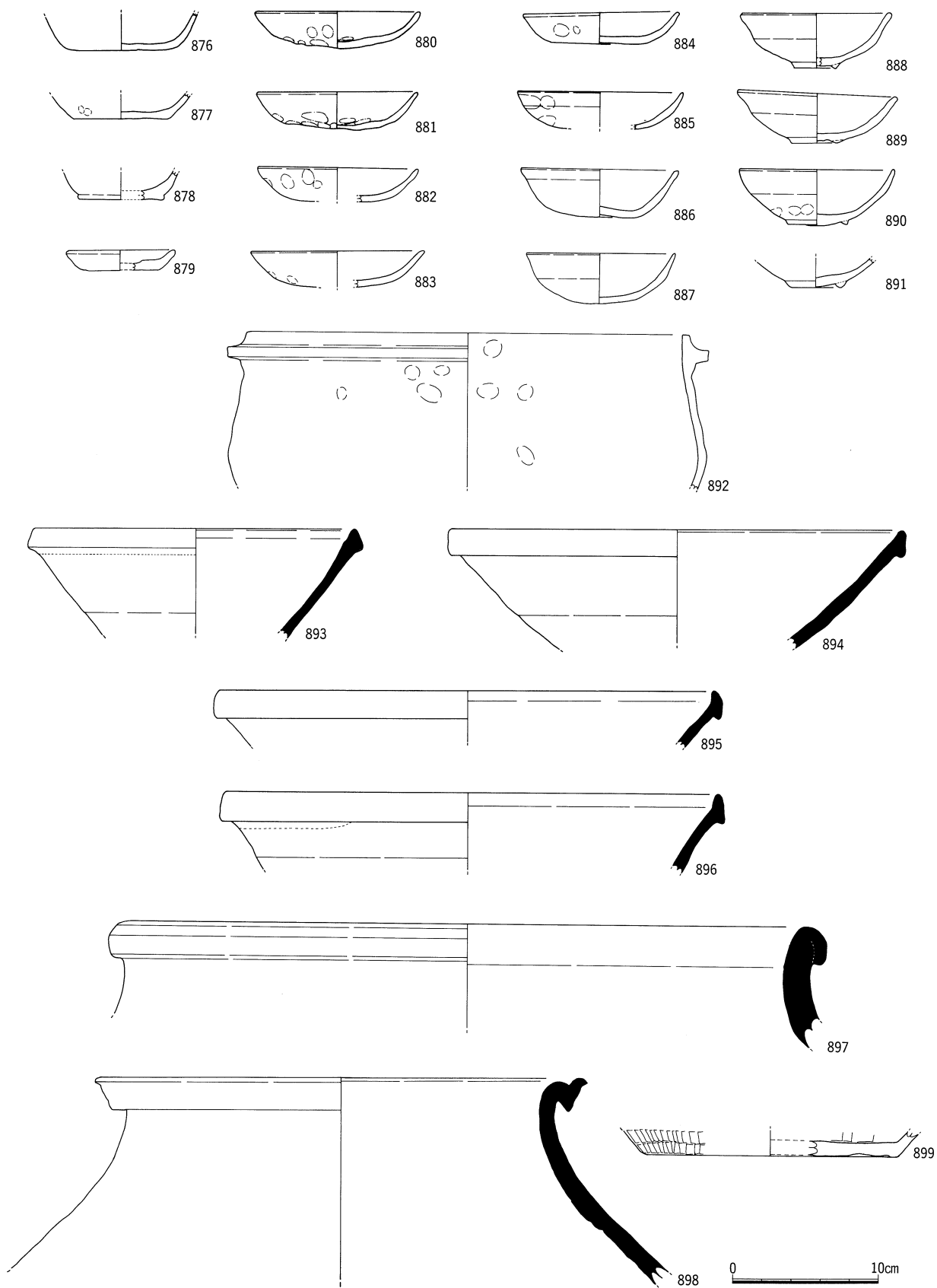
876~878は土師質の杯であるが、いずれも完形に復元できるものはなく、正確な法量は不明である。880~885は土師質の皿で、底部から口縁部にかけて緩やかに内彎し、口縁端部は丸くおさめ、器壁はやや厚い。底部外面に指押さえの跡が顕著に認められる。6点ともほぼ同じ形態で、色調にもぶい黄褐色を呈する。このタイプの皿は、本遺跡では初出で他遺跡でも類例を見ないため、皿に分類したが、不明な点が多い。888~891は吉備系土師器碗で、口径10.4~10.8cm、器高3.4~3.7cmで高台を貼り付けている。886・887は無高台の碗である。893~896は東播系のこね鉢、898は常滑焼の甕で口縁部断面がL字状を呈する受け口の口縁形態を持つ。口縁縁部が2cm前後で、中野編年の6b型式に比定される。899は滑石製の石鍋である。

土坑120 (SK3120) (第173図)

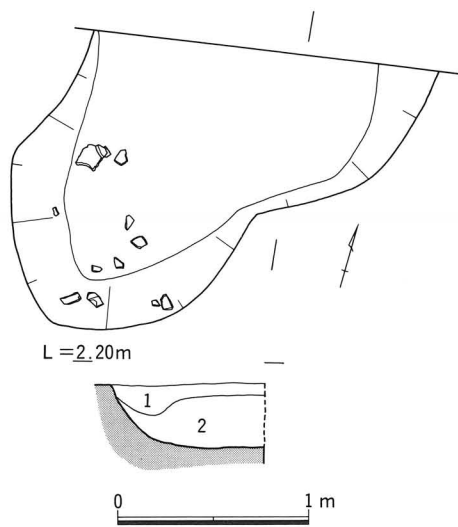
B-35で検出された。北側は調査区外にかかっているため全体の形状・規模は不明であるが、長軸1.83m、短軸1.17m、深さ0.33mを測る。埋土はオリーブ褐色粘質土・黄褐色シルトの2層に分層され、炭化物が帯状に堆積している。

出土遺物 (第174図)

900・901は土師質の皿である。900は底部回転ヘラ切りで、一部板目を留める。色調は赤褐色を呈し、口径6.8cm・器高1.4cm・底径5.1cmを測る。901は底部から口縁部にかけて緩やかに内彎し、体部及び底部外面に指押えの痕を残す。復元口径11.7cm・器高2.15cm・復元底径6.6cmを測る。SK3119より出土した6点の皿と同じ形態のものである。902は吉備系土師器碗で無高台である。復元口径10.3cm・器高2.85cmを測り、底部中央部が指押さえにより内側に窪む。

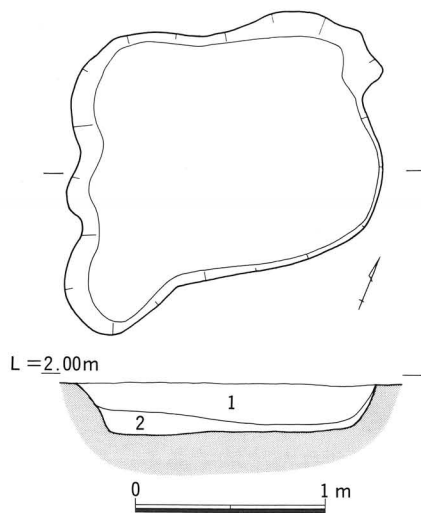


第172図 SK3119出土遺物実測図



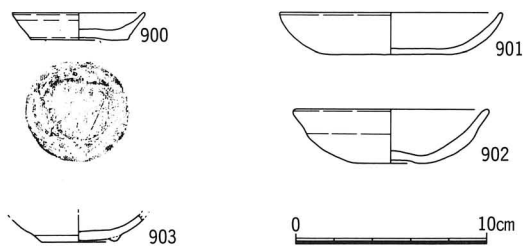
- 1 オリーブ褐色2.5Y4/6粘質土
- 2 黄褐色2.5Y5/4シルト

第173図 SK3120実測図

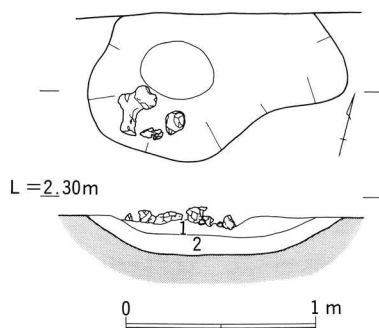


- 1 灰黄褐色10YR4/2粘質土 (炭化物含む)
- 2 暗オリーブ色5Y4/4粘質土

第175図 SK3121実測図

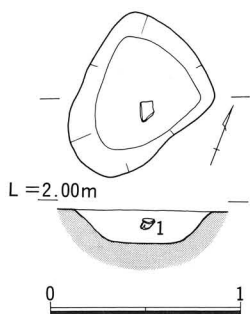


第174図 SK3120出土遺物実測図



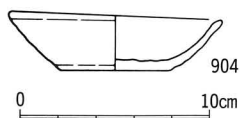
- 1 オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土 (鉄・炭化物含む)
- 2 にぶい黄色2.5Y6/3粘質土

第176図 SK3123実測図

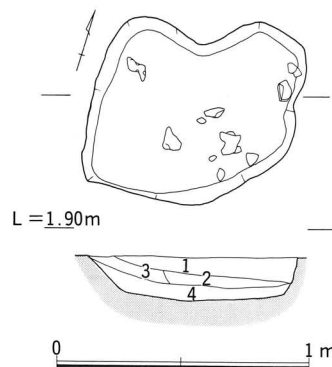


- 1 黄褐色2.5Y5/4シルト

第177図 SK3127実測図



第178図 SK3127出土遺物実測図



- 1 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土 (炭化物・焼土含む)
- 2 にぶい黄色2.5Y6/3粘質土
- 3 黄褐色2.5Y5/3粘質土
- 4 灰黄色2.5Y6/2粘質土

第179図 SK3130実測図

土坑121 (SK3121) (第175図)

B-35で検出された。長軸2.09m・短軸1.48m・深さ0.27mを測り、埋土は暗オリーブ色粘質土・灰黄褐色粘質土の2層に分層され、炭化物を多く含んでいる。出土遺物は特にない。

土坑123 (SK3123) (第176図)

B-37で、調査区北壁にかかか形で検出。長軸1.25m・短軸0.8m・深さ0.2mのほぼ楕円形の土坑である。埋土は、オリーブ褐色粘質土・にぶい黄色粘質土の2層に分層され、焼土・炭化物・多量の鉄滓が含まれている。

土坑127 (SK3127) (第177図)

B-35で検出された土坑である。長軸0.83m・短軸0.61mを測り、平面は不整な円形を呈する。深さは0.17mと浅い。埋土は黄褐色シルト1層で、マンガンを含む。

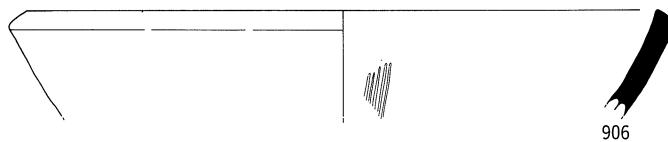
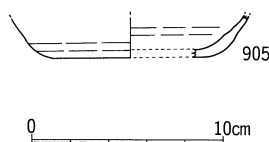
出土遺物 (第178図)

ほぼ完形の土師質の杯が1点出土している。口径11.3cm・器高2.9cmを測り、体部から口縁部にかけて直線的に斜め外方に開く。体部・口縁部の内外面とも丁寧なナデが施されている。

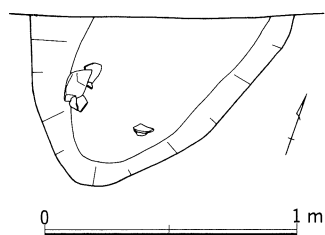
土坑130(SK3130) (第179図) B-38で検出された土坑で、平面は不整形である。長軸0.82m・短軸0.68m・深さ0.17mを測る。埋土は4層に分層され、マンガン・炭化物を含む。

出土遺物 (第180図)

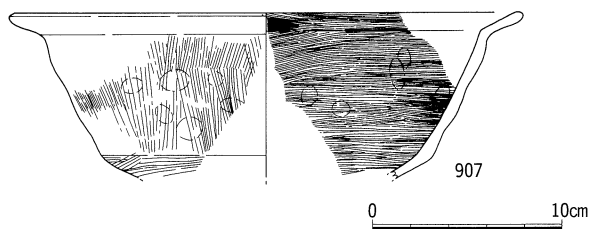
905は土師質の杯である。906は体部内面に5条以上を1単位とする櫛描条線を施す備前焼の播鉢である。



第180図 SK3130出土遺物実測図



第181図 SK3131実測図



第182図 SK3131出土遺物実測図

土坑131 (SK3131) (第181図)

B-38で検出された土坑であるが、調査区北壁にかかるため、全体の形状・規模は不明である。検出面では、長軸0.82m・短軸0.68m・深さ0.17mを測る。

出土遺物 (第182図)

907は土師質の鍋で、口縁部が「く」の字状に屈曲し、体部がやや膨らみを持つタイプで、外面には煤が付着し、よく使用されている。

土坑132 (SK3132) (第183図)

B・C-40で検出された土坑で、長軸1.3m・短軸1.15m・深さ0.32mを測り、平面形はほぼ円形を呈する。SK3133と切り合うが、新旧関係は明確でない。埋土は、4層に分層でき、マンガン・炭化物を含んでいる。

出土遺物 (第184図)

908は銅製の仏具と考えられる。口径3.9cm・器高1.2cm・高台径2.2cmを測る。

土坑133 (SK3133) (第183図)

C-40で検出された土坑で、長軸1.25m・短軸0.67m・深さ0.33mを測り、平面形は楕円形を呈する。SK3132と切り合う。埋土は3層に分層でき、マンガン・炭化物を含んでいる。

出土遺物 (第185図)

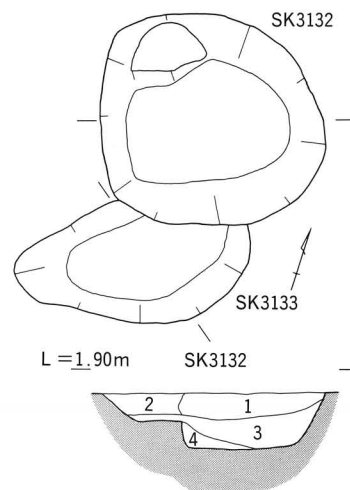
909は土師質の杯で、910は吉備系土師器碗で、口径10.7cm・器高3.1cmを測る。911は不整な方形をした砥石で、使用面は2面である。

土坑139 (SK3139) (第186図)

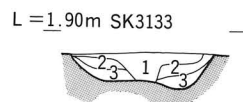
D-40で検出された土坑で、後世の攪乱により一部削平されている。検出面では長軸0.46m・短軸0.8m・深さ0.2mを測る。埋土は、にぶい黄色シルトで、土器片・マンガン・炭化物を含む。

出土遺物 (第187図)

913は吉備系土師器碗で、復元口径11.0cm・器高3.6cmを測



- 1 黄褐色2.5Y5/4シルト
- 2 黄褐色2.5Y5/3シルト
- 3 オリーブ褐色2.5Y4/3シルト
- 4 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土



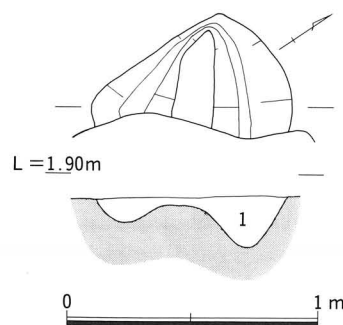
- 1 黄褐色2.5Y5/4シルト
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/4シルト
- 3 黄褐色2.5Y5/3粘質土



第183図 SK3132・3133実測図

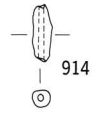
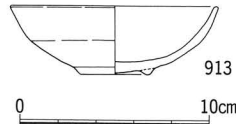
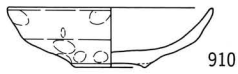
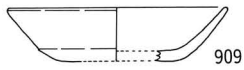


第184図 SK3132出土遺物実測図

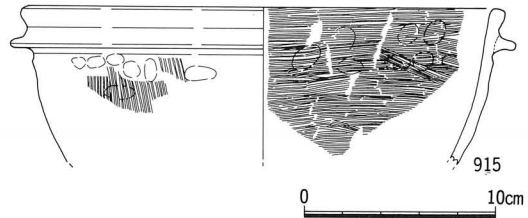
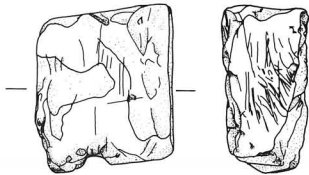


- 1 にぶい黄色2.5Y6/4シルト

第186図 SK3139実測図

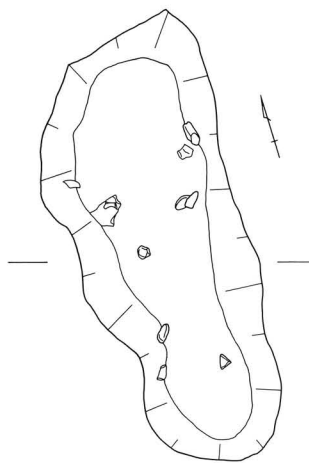


第187図 SK3139出土遺物実測図

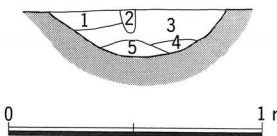


第189図 SK3142出土遺物実測図

第185図 SK3133出土遺物実測図

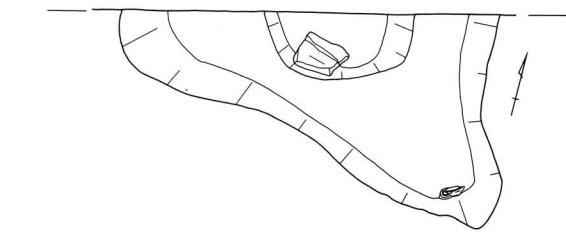


L = 2.00m

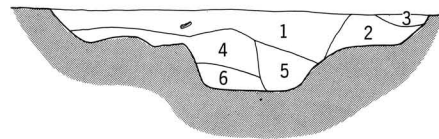


- 1 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土
- 2 黄褐色2.5Y5/3シルトやや粘性あり
- 3 灰オリーブ色5Y5/2粘質土
- 4 オリーブ褐色2.5Y4/3
- 5 暗灰黄色2.5Y5/2

第188図 SK3142実測図

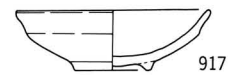
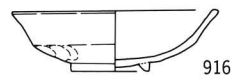


L = 2.30m



- 1 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土 (炭化物・焼土含む)
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/6粘質土
- 3 オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土 (炭化物・焼土含む)
- 4 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土
- 5 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土
- 6 暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土 (砂含む)

第190図 SX3001実測図



第191図 SX3001出土遺物実測図

り、断面三角形の高台を貼り付ける。914は土錘で、長さ2.7cm・胴径0.9cm・重さ2.5gである。

土坑142 (SK3142) (第188図)

C-38で検出された土坑で、長軸1.75m・短軸0.65m・深さ0.18mを測る。平面形は長楕円形を呈する。埋土は5層に分けられ、マンガン・炭化物を含む。

出土遺物 (第189図)

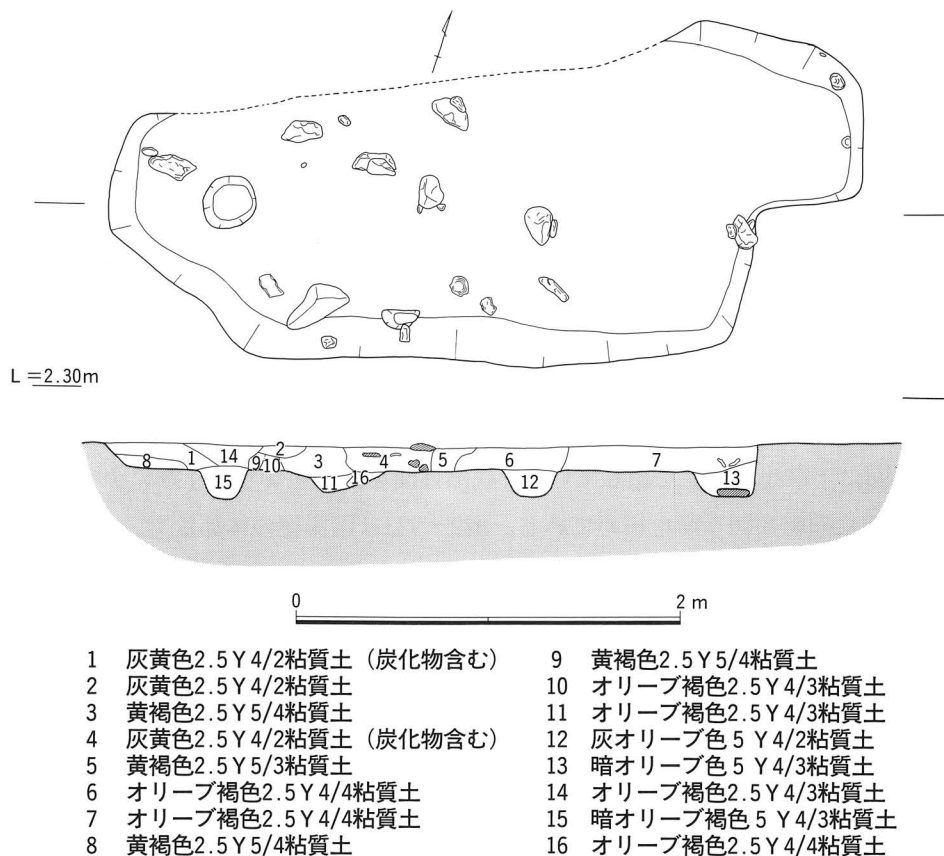
915は土師質の羽釜で、短い口縁部に断面方形の鏝が水平に貼り付けられている。体部内外面に煤の付着が顕著である。

不明遺構

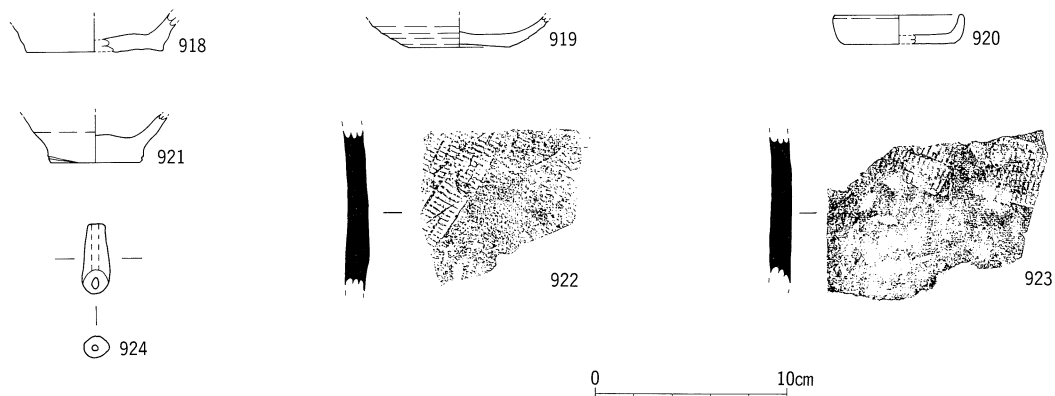
<3次調査>

不明遺構1 (SX3001) (第190図)

B-7で一部を検出した。SA3006の西側に位置し、遺構の北側は調査区外になるため、全体の規模は不明である。検出分の長軸は1.97m、短軸は1.13mである。深さは0.25mを測り、底面には起伏がある。埋土は暗灰色粘質土、オリーブ褐色粘質土、同粘質土の3層に分層できる。この遺構はSA3005を構成する柱穴を切っていることから、SA3005の使用後に構築されたことが分かる。



第192図 SX3002実測図



第193図 SX3002出土遺物実測図

出土遺物は、土師質の椀2点と鉄滓4点である。

出土遺物（第191図）

916・917は土師質の椀である。ともに断面三角形の高台が貼り付けられ、体部内外面に丁寧な横ナデが施される。916は口径10.4cm、器高3.1cm、917は器高3.1cmを測る。吉備系土師器椀で、山本吉備系土師器椀類型のⅢ－3期C3類に当てはまる。

不明遺構3（SX3002）（第192図）

D－5・6で検出した。北側の一部が近世の池に切られるため、全体の規模は不明であるが、平面形は不整長円形を呈するものと推測される。残存の長軸は3.94m、短軸は1.71mを測る。深さは0.28mで、底面はほぼ平坦である。底面で柱穴を8個検出したが、その内2個はSA3003に伴うものである。埋土は全体に炭化物を多量に含んでいる。埋土中から土師質の杯・皿、陶器片ならびに鉄釘が出土している。

出土遺物（第193図）

918・919は土師質の杯である。918は底部に回転糸切り痕を留める。919は底部より内彎しながら立ち上がり、底部に回転ヘラ切り痕を留める。920・921は土師質の皿である。920は底部よりほぼ直立気味に立ち上がり、内外面に丁寧な横ナデを施している。底部外面を回転糸切り後丁寧にナデ消している。921は高台付皿で、底部に回転糸切り痕を留めている。922・923は陶器甕の体部片で、ともに格子状の押印文をスタンプした常滑焼である。924は土錘である。

不明遺構3（SX3003）（第194図）

E－4・5で検出した。長軸4.72m、短軸2.28mを測り、平面形は不整形である。南側でSD211・SD212と重複するが、新旧関係は判然としない。深さは0.25mと比較的浅く、底面は平坦である。南西部の底面で検出した根石をもつ柱穴は、SA3001に伴うことから、SA3001の廃絶後に遺構が形成されたと考えられる。埋土は4層に分層され、埋土中から土師質の椀、土錘、白磁皿が出土している。

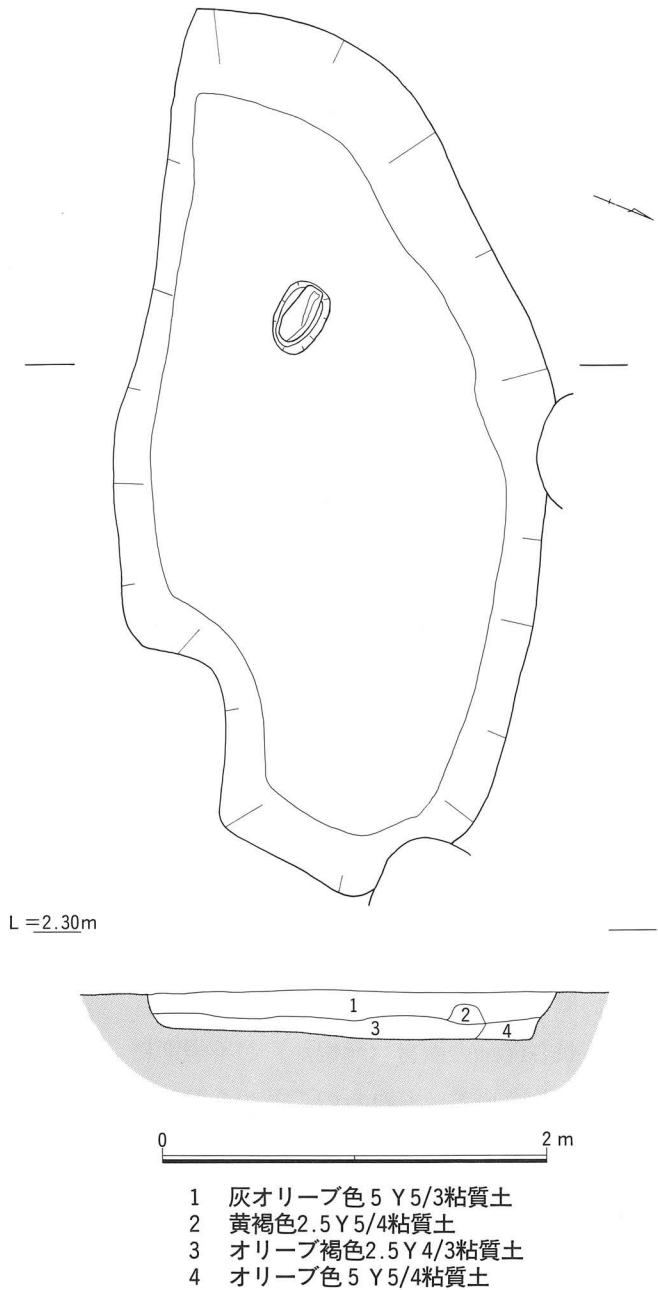
出土遺物 (第195図)

925は土師質の椀である。全体にいびつな形態となっており、体部中位の器壁が肥厚する。底部には退化した断面三角形の高台が貼り付けられている。吉備系土師器椀である。926は白磁碗である。口縁部は外反し、口縁端部を尖り気味に仕上げている。胎土は灰白色で、精良である。白色の釉を施すが、口縁端部の釉は掻き削られ、「口禿」となっている。横田・森田分類案の白磁皿Ⅸ-1dに属する。927~930は土師質の土錘である。

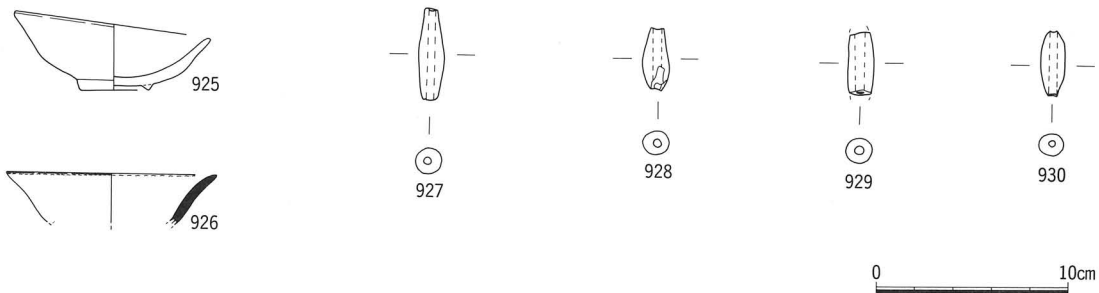
〈4次調査〉

不明遺構5 (SX3005) (第196図)

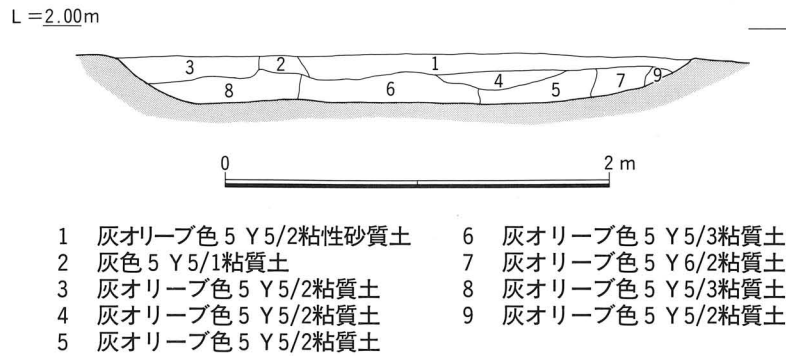
B・C-22・23で検出した。北側が調査区外になるため、全体の規模は不明である。検出分は長さ約6.6m、幅は2.64~2.93mを測る。深さは0.24~0.27mで、断面形は浅いU字状を呈する。埋土は9層に分層できるが、鉄分・マンガンを含む灰オリーブ色粘質土を基調にしている。埋土中から土師質の椀と土錘が各1点出土している。



第194図 SX3003実測図



第195図 SX3003出土遺物実測図



第196図 SX3005実測図

井戸

〈3次調査〉

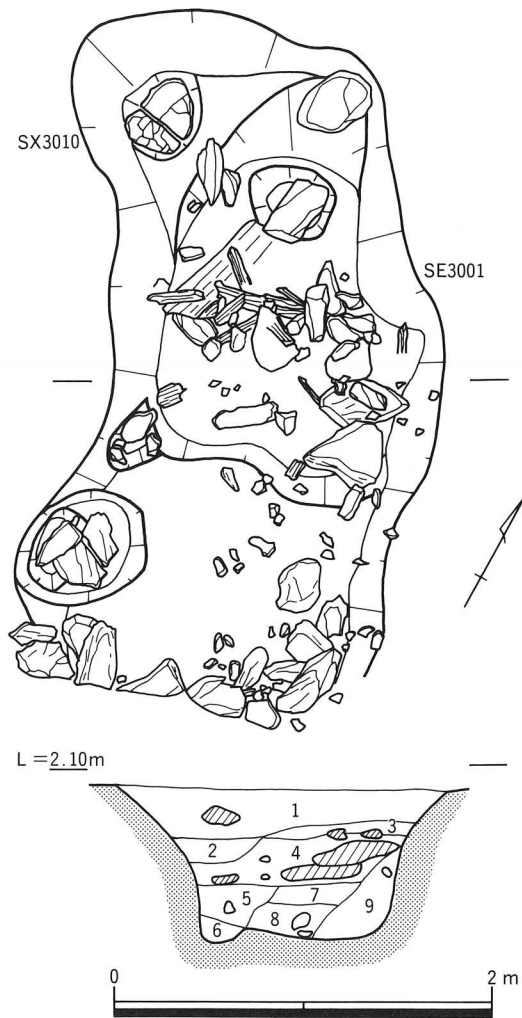
井戸 1 (SE3001) (第197図)

E・F-9で検出した。井戸廃絶後、故意に埋められたことが観察され、遺存状態はよくない。またSX3010と重複するため、本来の形状・規模を明らかにすることは困難であるが、井戸の内径は0.8m以上、深さは1.0m以上と推測される。埋積土は9層に分層できるが、中層には大型の礫、大小の用材が多量に混入している。また最下層からは井側の用材と考えられる長さ92~100cm、幅4.5~9cm、厚さ3~5cmの角材が3本と幅13cm、厚さ2cm、長さ66cmの板材（側板か）が不規則に重なって出土している。これらのことから井側部は木組み構造をもつ井戸であったことが推測される。この井戸は、SA3007ならびにSX3010と重複するが、その前後関係は井戸が埋め戻された後にSA3007が建てられ、その廃絶後SX3010が形成されたと考えられる。

出土遺物は、土師質の杯・皿、土錘、鉄滓等である。

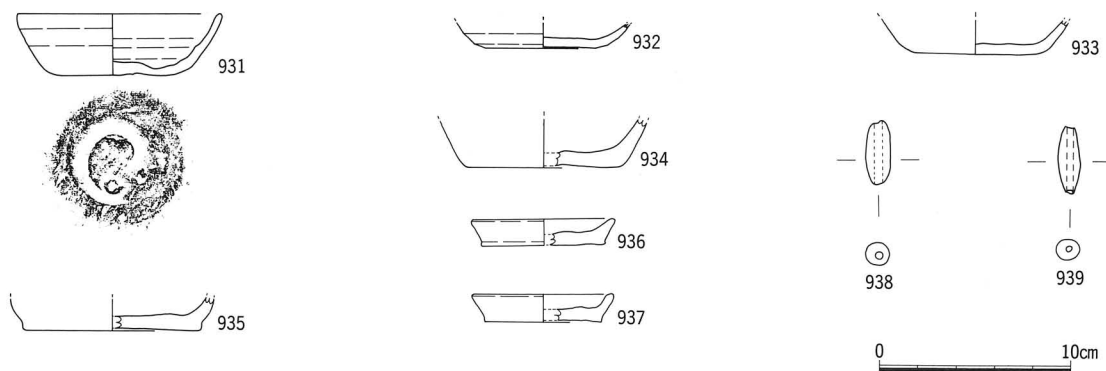
出土遺物 (第198図)

931~935は土師質の杯である。931~933は底部に回転ヘラ切り痕を留める。931は底面に凹凸があり、体部はやや内彎し、全体に器壁を薄く仕上げる。932・933は同タイプの杯と見られる。934は底部がやや丸底状で、回転糸切り痕を留める。935は

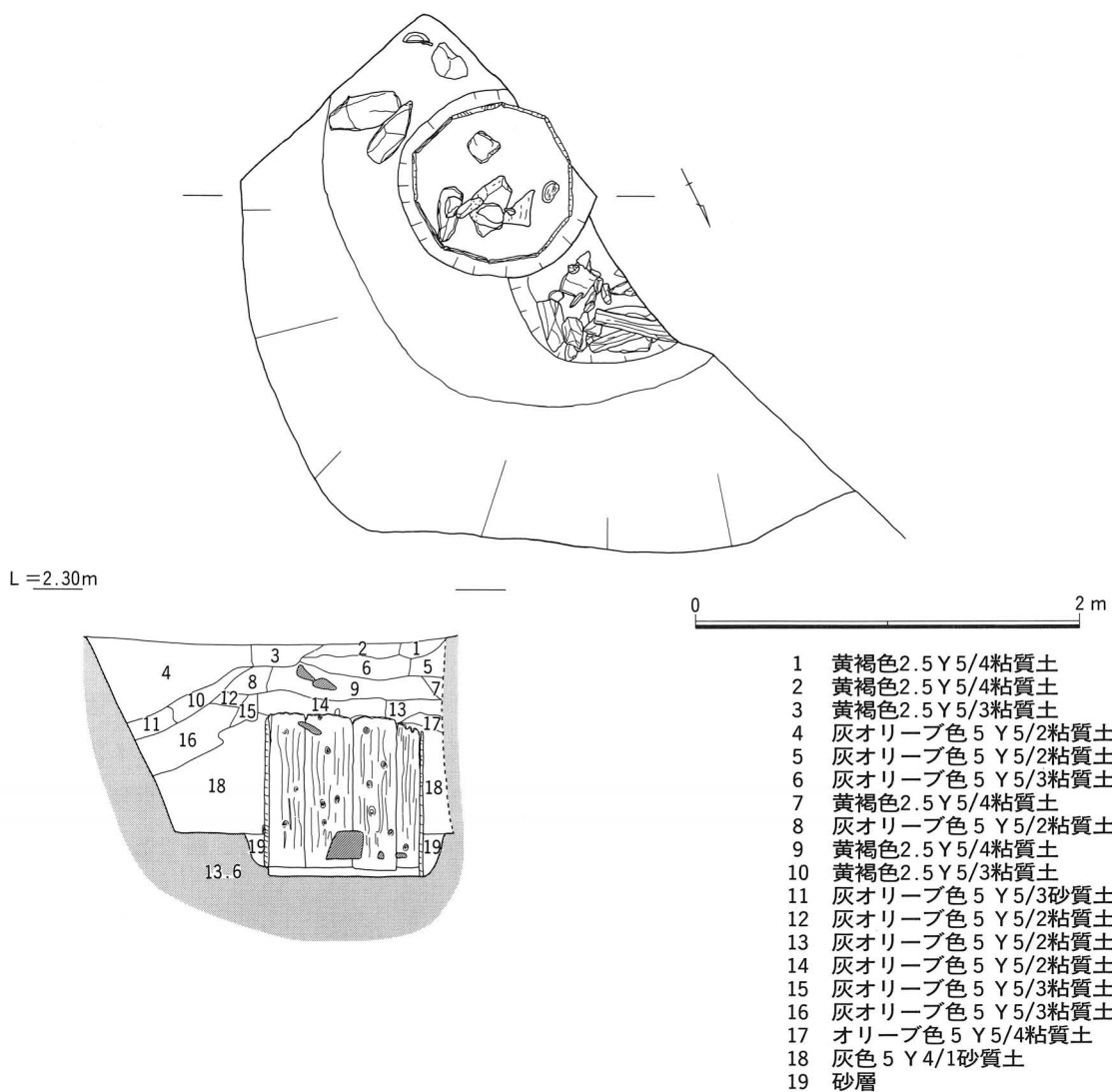


- | |
|----------------------|
| 1 黄褐色 2.5 Y5/3砂質土 |
| 2 にぶい黄褐色 2.5 Y6/3砂質土 |
| 3 灰黄色 2.5 Y6/2砂質土 |
| 4 灰オリーブ色 5 Y5/2シルト |
| 5 灰オリーブ色 5 Y5/3シルト |
| 6 灰色 5 Y5/1シルト |
| 7 灰オリーブ色 5 Y5/2シルト |
| 8 灰色 7.5 Y4/1シルト |
| 9 オリーブ黄色 5 Y6/3シルト |

第197図 SE3001実測図

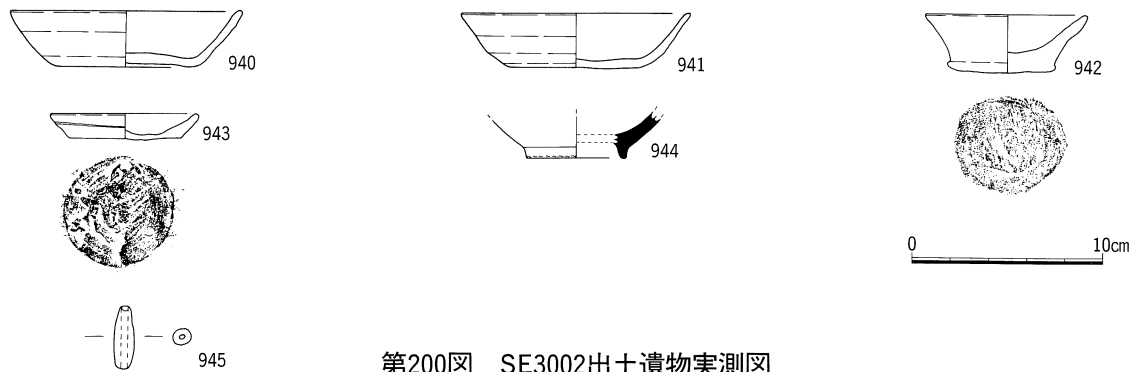


第198図 SE3001出土遺物実測図



第199図 SE3002実測図

底部と体部の境に段がつき、体部内外面にやや粗い横ナデが施されている。底部の切り離しは回転糸切りである。936・937は土師質の皿で、同タイプのものと思われる。937の底部は回転糸切り後ナデが施されている。938・939は土錘である。



第200図 SE3002出土遺物実測図

井戸 2 (SE3002) (第199図)

E-2で検出した。調査区西南端に位置し、掘方の大部分が調査区外になるため、全体の規模・形状は不明であるが、検出分の形状から掘方の平面形は不整円形状であったと推測される。検出した掘方の半径は約2.2mを測り、全体の径は少なくとも4m以上であったと考えられる。井側部の遺存状態は良好で、その構造は木組多角形(10角形)縦板型の井戸であることが分かる。幅25~27cm、厚さ4.0~4.5cm、長さ80~84cmの縦板10枚を10角形に組み合わせ(内径0.78m)、縦板の下部外側には竹製のタガが巻かれて縦板全体を固定している。また縦板とタガの間には木製の楔がほぼ等間隔に計3本打ち込まれ、タガの締めを強固にしている。縦板の最下部は砂礫の湧水層に達しており、特に井筒は見られない。湧水層までの最大の深度は1.23mを測る。井戸掘方の底部には角礫、用材片が、井側内部の底面からは角礫がそれぞれ出土している。

出土遺物は、井戸掘方から土師質の皿、土錘、青磁碗が、また井側内部の最下層から土師質の杯・高台付杯が出土している。

出土遺物 (第200図)

940・941は土師質の杯である。940は底部からわずかに内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。全体に器壁は薄く、体部内外面に丁寧な横ナデを施している。底部に回転ヘラ切り痕を留める。胎土は精良で、色調はにぶい黄橙色を呈する。941は形態に若干の差異があるが、940と同タイプの杯である。942は土師質の高台付杯である。底部は丸底状で下部が張り出し、口縁部に向かって外反する。体部内外面には丁寧なナデが施され、底部には回転ヘラ切り痕を留める。943は土師質の皿である。底部切り離しは回転ヘラ切りで、色調は灰黄色を呈する。

944は青磁碗である。断面台形状の高台を有し、体部は内彎しながら立ち上がる。全面に淡緑色の厚い釉を施している。945は土錘である。

柱穴

ここでは掘立柱建物を構成するに至らなかった柱穴のうち、遺物の出土状況に特色の認められる柱穴ならびに各柱穴からの出土遺物を一括して取り上げる。

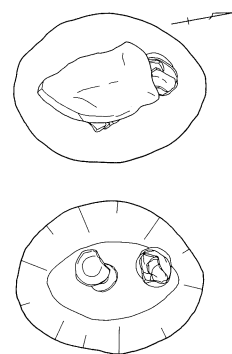
〈3次調査〉

SP3130 (第201図)

C-7で検出した柱穴で、SD3001の中央部南側に位置する。掘方の形状は楕円形で、長径0.49m・短径0.4m、深さ0.45mを測る。柱穴中心部の上位に大きさ19.0cm×30.0cm、厚さ約12cmの結晶片岩の角礫が置かれ、その直下に土師質の杯・皿を2～3枚上向きに重ねたものが2組出土している。1組は柱穴内の北側に位置し、杯を3枚重ねる。もう1組は柱穴のほぼ中心部に位置し、杯・皿を1枚ずつ重ねている。両者は約5cm隔てて置かれるが、ともに出土した層位は同じで、上位層である。

柱穴内の土器の出土状況は、前述のSP3100(SA3005)と極めて類似しており、この柱穴もSP3100と同様に地鎮が営まれたことを示す遺構と思われる。土器の出土した位置が柱穴中心部にかかることから、柱抜き取り後に土器が埋納されたものと考えられる。

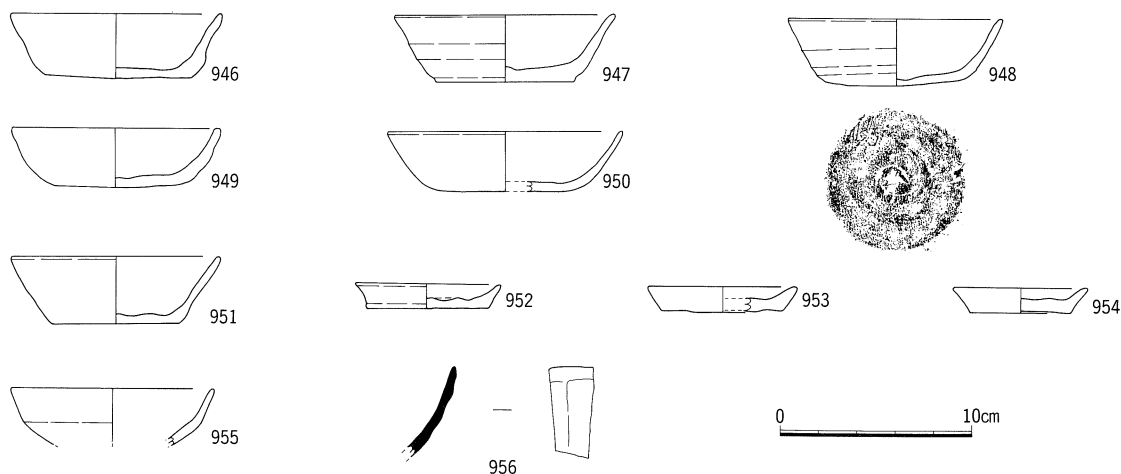
SP3100・3130はともに屋敷地における地鎮の形態を具体的に示すもので、中世の屋敷地における祭祀の形態を考える上で、貴重な資料を提供する。



第201図 SP3130実測図

出土遺物 (第202図)

946～951は土師質の杯である。946・947は底部に回転糸切り痕を留める。948～950は底部外面に回転ヘラ切り後、丁寧なナデが施されるものである。ともに底部よりやや内彎して立ち上がり、全体に器壁を薄く仕上げる。胎土は微砂粒を含むが、概ね精良で、色調は灰白色である。吉備系土器との組み合わせ関係にある杯である。951は底部に回転糸切り痕を留め、底部からほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。胎土は砂粒を多く含み、色調はにぶい橙色を呈する。952～954は土師質の皿である。いずれも口縁部内外面に丁寧な横ナデが施され、952・954は底部に回転糸切り痕を留める。955は土師質の碗で、吉備系土師器碗である。口縁部外面に横ナデが施され、復元口径10.5cmを測る。956は青磁の破片で、龍泉窯系青磁碗と思われる。

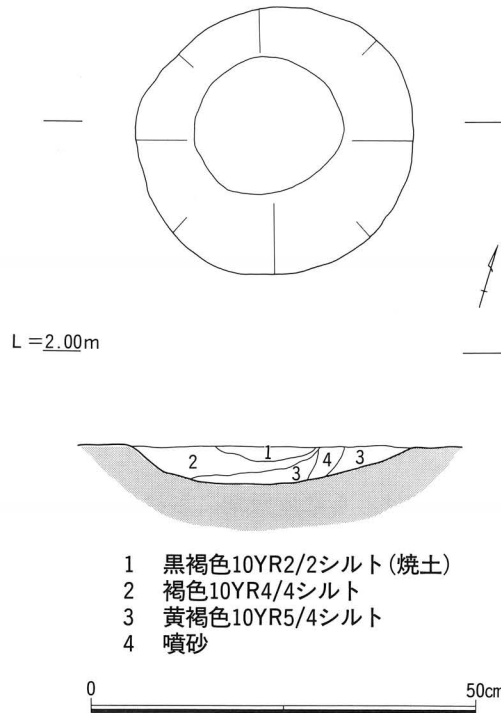


第202図 SP3130出土遺物実測図

〈5次調査〉

SP3551 (第203図)

多量の鉄滓が出土した SK3123の1 m南で検出したピットで、上面が直径0.25mの円形状に赤褐色に変色しており、熱による変化が認められる。深さは5 cmを測り、3層に分層される。また、埋土中に填砂が確認された。



- 1 黒褐色10YR2/2シルト(焼土)
- 2 褐色10YR4/4シルト
- 3 黄褐色10YR5/4シルト
- 4 噴砂

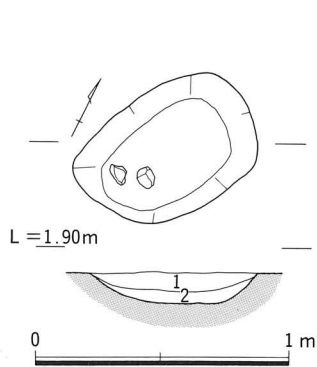
第203図 SP3551実測図

SP3584 (第204図)

C-38で検出された。長軸1.75m・短軸0.65m・深さ0.18mを測る。平面形は長楕円形を呈する。埋土は5層に分けられ、マンガン・炭化物を含む。

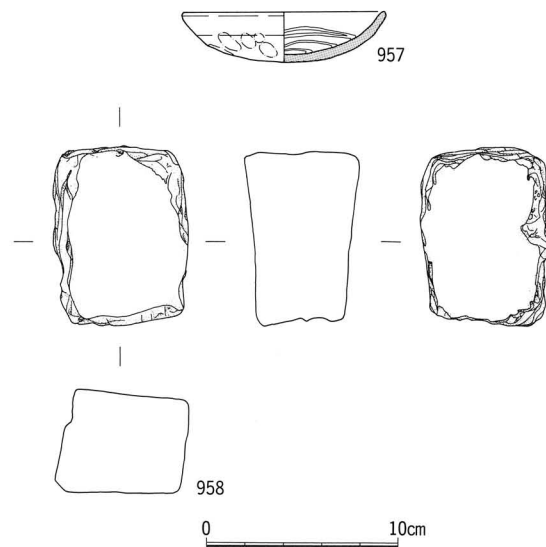
出土遺物 (第205図)

957は和泉型の瓦器碗で、口径10.3cm・器高2.6cmを測る。体部外面には指押さえ跡が認められ、内面には螺旋状にヘラミガキを施す。958は2面が使用された砥石である。



- 1 にぶい黄褐色10YR5/3粘質土
- 2 にぶい黄色2.5Y6/3粘質土

第204図 SP3584実測図



第205図 SP3584出土遺物実測図

〈3・4次調査〉

柱穴内出土遺物（第206～208図）

959～976は土師質の杯である。959～968は底部外面に回転糸切り痕を留める。959・963は体部がほぼ直立気味に立ち上がり、全体に器壁を厚く仕上げる。964～966は底部から口縁部にかけてほぼ直線的に延び、964は口縁端部を丸くおさめ、965・966は端部を尖り気味に仕上げる。960は体部内外面に丁寧な横ナデを施し、全体に器壁を薄く仕上げる。967は底部がやや上げ底状で、底部よりやや内彎しながら立ち上がり、口縁端部を尖り気味に仕上げる。体部外面には横ナデが施される。961・962は体部が口縁部にかけて直線的に延びるが、底部下位に粘土のはみ出しが見られる。968は高台付杯である。底部下位をやや拡張し、口縁部をわずかに内彎させる。

969～975は底部に回転ヘラ切り痕を留める杯である。969は口径・底径の小さい杯で、復元口径8.0cmを測る。底部外面に板状圧痕を留め、体部内外面に丁寧な回転ナデが施される。969～971は底部より口縁部にかけて直線的に延び、口縁端部を尖り気味に仕上げる。全体に器壁を薄くつくり、色調は浅黄橙色を呈する。972は底部がやや上げ底状で、色調は橙色を呈する。973は底部より直線的に立ち上がり、口縁部にかけて体部器壁を厚くする。胎土は砂粒を多く含み、色調は橙色である。974は体部外面下位に回転成形による稜がつき、体部内外面に丁寧な回転ナデが施される。胎土は精良で、全体に硬質感がある。976は底部より内彎しながら立ち上がり、口縁部をわずかに外反させる。体部内外面に丁寧な回転ナデを施し、色調は灰白色を呈する。

977～986は土師質の皿である。いずれも底部切り離しが回転糸切り技法によるものであり、胎土に砂粒を多く含み、色調は橙色を呈する。981～986は底部外面に回転糸切り後ナデが施される。987～991は高台付皿である。987は底部から直線的に立ち上がり、口縁部をわずかに内彎させる。990はやや高い高台をもち、989・991は底径の大きな高台を有す。992・993は底部に回転ヘラ切り痕を留める皿で、いずれもヘラ切り後にナデが施される。色調はにぶい橙色・黄褐色を呈し、吉備系土師質皿と思われる。994は高台付の皿で、高台外面に横ナデが施される。

995～1008は土師質の椀である。いずれも吉備系土師器椀で、体部内面に丁寧な横ナデが施される。胎土は砂粒を含むが、概ね精良で、色調はにぶい橙色・浅黄橙色を呈する。995～1002・1006は底部に退化した断面三角形の高台が貼り付けられ、復元値を含むが、口径10.0～11.5cm、器高3.1～3.7cmを測り、山本吉備系土師器椀類型のⅢ－3期C3類に属する。

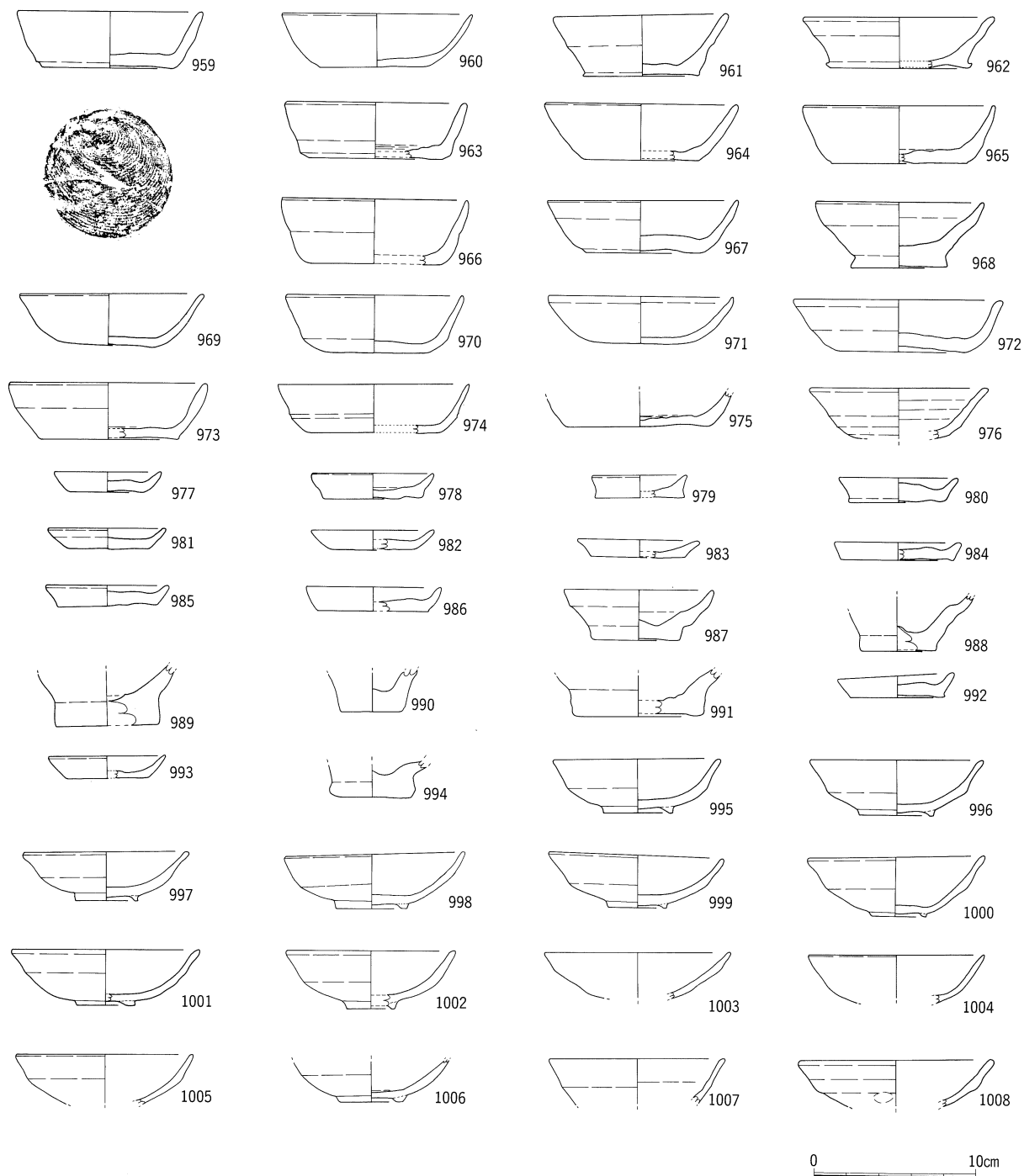
1009～1012は瓦器椀で、和泉型に属する。1009は無高台で、やや平底状を呈する。1010は退化した高台が一部付く。いずれも体部内面に施されたヘラミガキはまばらで、渦巻き状である。炭素の吸着は不良で、色調は灰色・灰白色を呈する。復元口径値で10.9～12.7cmを測り、森島編年の和泉型瓦器椀Ⅳ－3・4に比定される。

1013は瓦質の羽釜である。直立した口縁部の直下に断面方形の鏝をもち、鏝先端部を凹面に仕上げる。体部外面にユビオサエの跡があり、口縁部内面・体部内面及び口縁部外面・鏝部に横ナデが施される。1014は瓦質の鍋である。口縁部は「受け口」状で、口縁端部をわずかに肥厚させる。体部内面に横方向のハケ目が施され、外面にユビオサエが見られる。口縁部内外面には横ナデが施される。

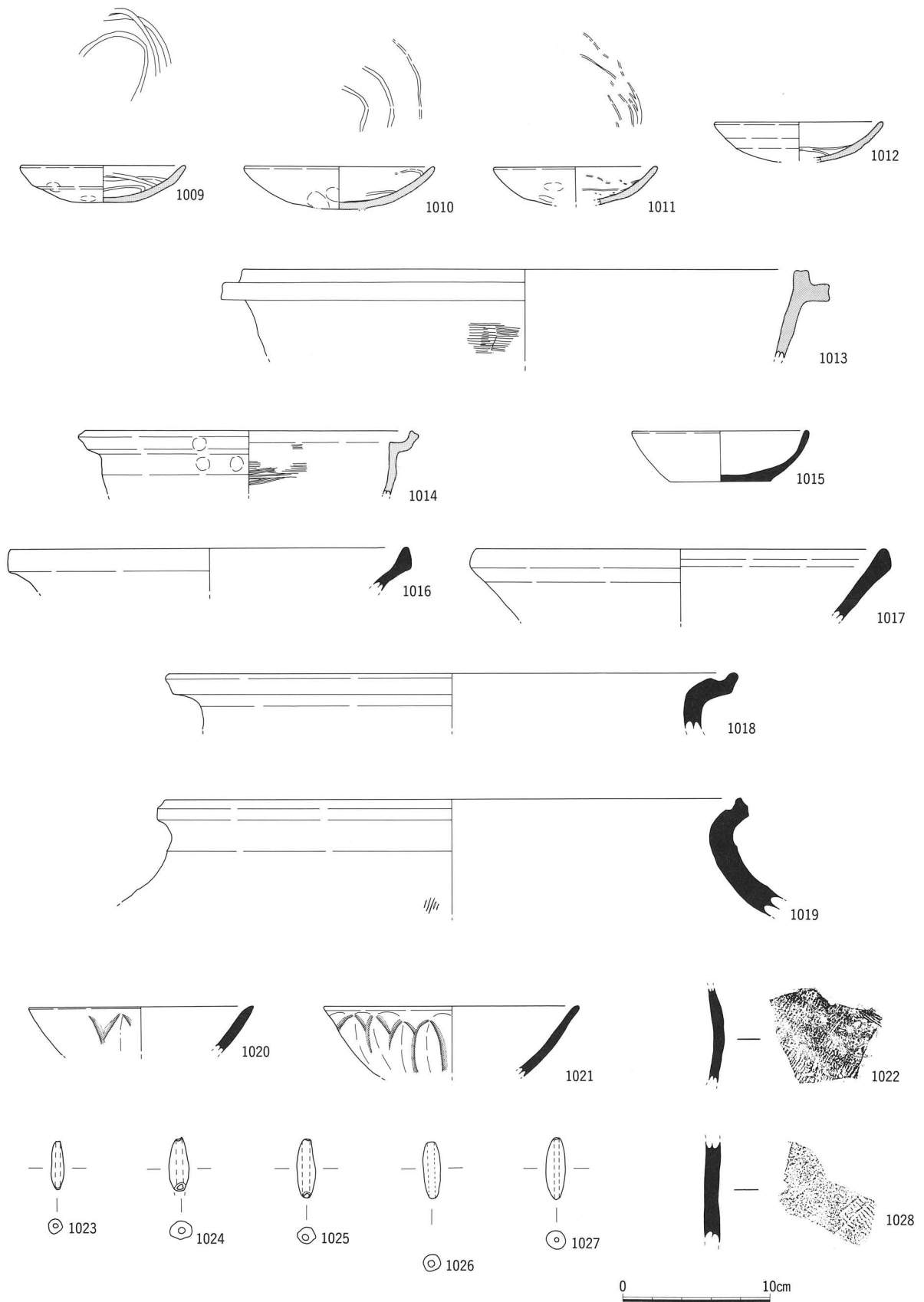
1015は陶器椀である。底部より口縁部にかけて内彎し、口縁端部をやや丸くおさめる。底部外面には回転糸切り後、粗いナデが施される。胎土は微砂粒を含むが精良であり、色調は灰白色である。備前焼の椀と見られる。1016・1017は東播系のこね鉢である。1016は口縁端部の上方への拡張が見られ、森田

編年の第Ⅲ期第1段階に属する。1017は同編年の第Ⅱ期第2段階に当てはまる。1018・1019は陶器甕である。1018は口縁端部を摘み上げ、断面が「L」字状を呈する「受け口」の形態である。1019は受け口状の口縁部であるが、1018に比べると外反の度合いが弱い。ともに常滑焼の甕で、中野編年の5型式に比定される。1022・1028は陶器の体部片で、1022は外面に平行タタキ目が施される。1028は格子状の押印文がスタンプされ、常滑焼と見られる。

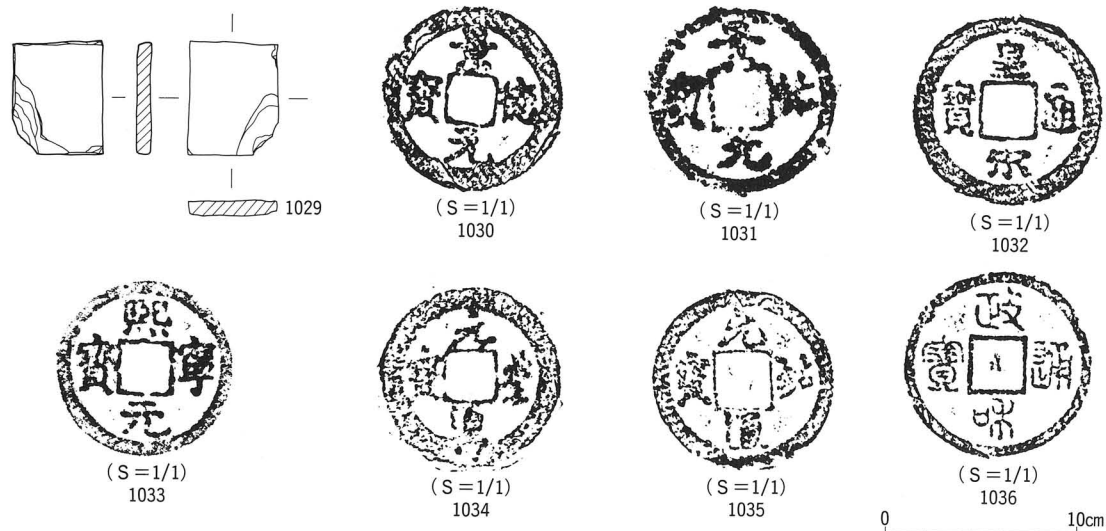
1020・1021は青磁碗である。ともに体部外面に幅広の鎬蓮弁文を削り出す龍泉窯系青磁碗である。横



第206図 SP 群出土遺物実測図 (1)



第207图 SP 群出土遺物実測図 (2)



第208図 SP 群出土遺物実測図 (3)

田・森田分類案の I-5 b ではないかと思われる。

1023～1027は土師質の管状土錘である。1029は砥石の破片で、本来の形状は長方形と見られる。

1030～1036は銅銭で、すべて北宋銭である。1030は「景德元宝」(初鑄1004年)、1031は「景祐元宝」(1034年)、1032は「皇宋通宝」(1039年)、1033は「熙寧元宝」(1068年)、1034は「元祐通宝」(1086年)、1035は「元符通宝」(1098年)、1036は「政和通宝」(1111年)である。

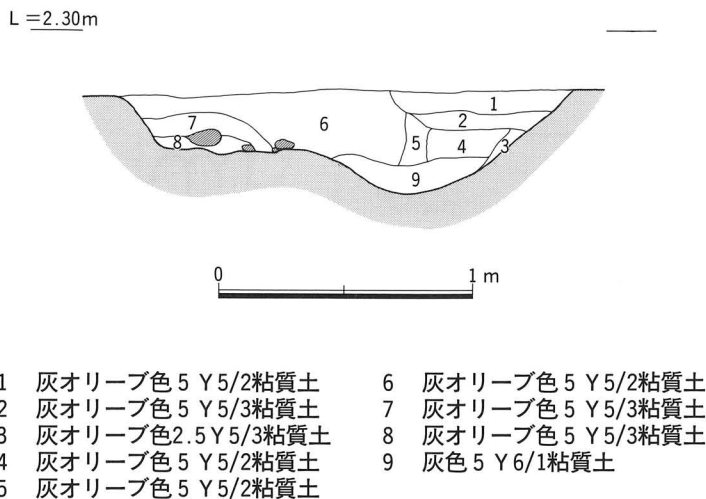
(2) 室町時代

溝

<4次調査>

溝1 (SD2001) (第209図)

A～E-25～29で検出した溝で、方位は北西-東南に延びる。溝の北端及び南端は調査区外に延びるため、全体の長さは不明であるが、約34.5m分を検出した。幅は1.9～2.51mを測り、深さは約0.4mである。底面には起伏があり、埋土は灰オリーブ色粘質土を基調とし、鉄分を含んでいるが、最下層は粘性の強い灰色粘質土である。この溝はSD2011を切って掘削している。出土遺物の中に16



第209図 SD2001実測図

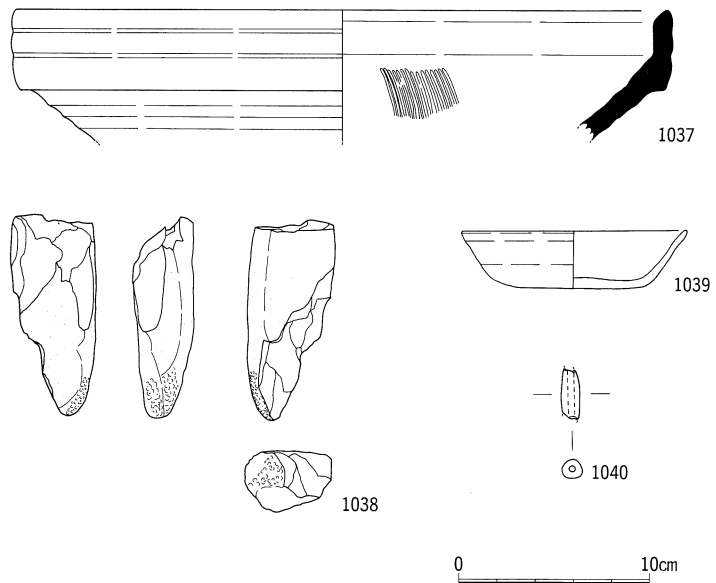
世紀代の備前焼播鉢が含まれることら、この溝はやや時代が下るものと考えられる。

なお馬歯が並べられた土師質の杯が溝東側の縁辺部から出土しており、水に関わる祭祀の営まれたことが窺われる。

出土遺物 (第210図)

1037は播鉢である。体部上位が直線的で、口縁部はほぼ直立する。口縁端部は上方に大きく拡張し、上端部はやや尖る。体部内面に15条を1単位とする櫛描条線が施される。備前焼播鉢で、真壁編年のV期に属する⁽⁸⁾。1040は土錘である。

1038は石斧で、先端部に使用痕が残る。1039は土師質の杯で、底部は回転ヘラ切り、やや白っぽい色調を呈する。口径11.6cm・器高3.2cm・底径6.5cmで、体部から口縁部にかけて斜め上方にほぼ直線的に立ち上がり、器壁を薄く仕上げている。



第210図 SD2001出土遺物実測図

溝4 (SD2004) (第211・212図)

A～D-19～21で検出した溝で、方位はほぼ南北に延びる。北端は調査区外に延び、南端は閉塞しており、延長で約20.3m分を検出した。幅は0.98～1.68mを測り、深度は0.13mと比較的浅い。埋積土は2層に分層できるが、いずれも灰オリーブ色粘質土である。北側の溝底面には3～10cmの砂岩礫がまばらに存在していた。埋土中から青磁碗、白磁高台付皿が出土している。この溝は一部SD2007を切っていることから、SD2007の廃絶後に掘削されたと考えられる。

出土遺物 (第213図)

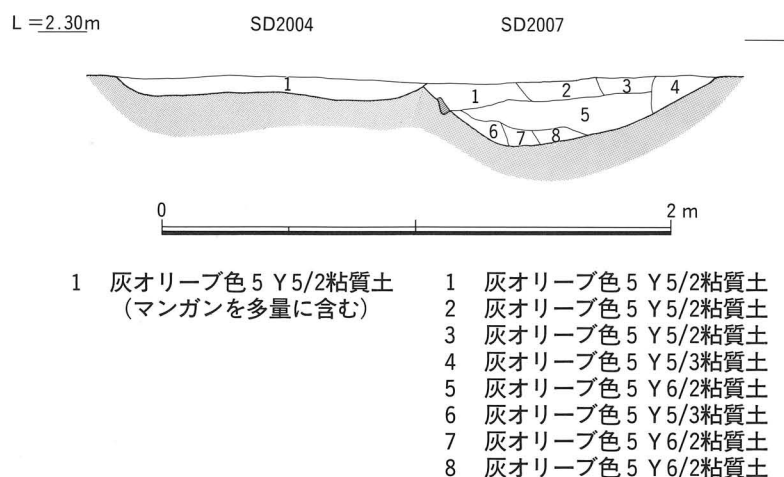
1041は青磁碗で、完形に近い。体部は大きく内彎し、口縁部はわずかに肥厚しつつ端部を丸く仕上げる。底部は厚く、断面逆台形状の高台をもつ。口縁部外面に雷文帯を有し、全面に濃緑色の釉を施すが、外底の釉を輪状に削り取っている。上田分類の龍泉窯系青磁碗C-II bに当てはまる⁽⁹⁾。1042は白磁の底部である。高台の底径は小さく、断面方形の高台を有す。器種は皿か。

溝7 (SD2007) (第211・212・214図)

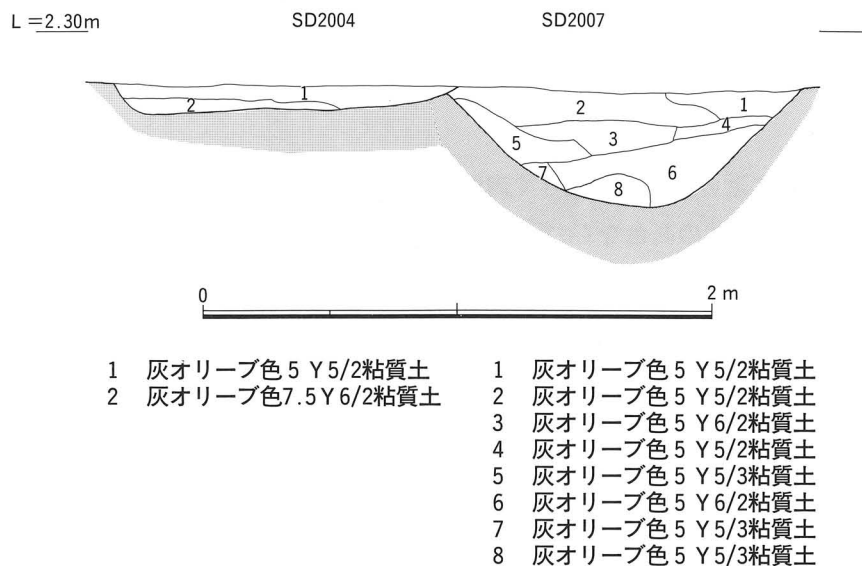
C～F-17～19で検出した溝で、SD2004と平行して南北に延びる。北端は閉塞しており、南端は調査区外に延び、延長で9.2m分を検出した。幅は0.91～1.55mを測るが、西側の一部はSD2004に切られている。深さは0.25～0.5mで、北から南側に向かって深度が増している。埋積土は灰オリーブ色粘質土を基調にしている。また、埋積土中に液状化現象による墳砂が確認でき、埋積土を切っていることから、SD2007埋まってから後に強い地震があったことが推測される。

出土遺物 (第215図)

1043は吉備系土師器碗で、1044は体部外面に幅広の蓮弁文を持つ龍泉窯系青磁碗である。1045は口縁部が玉縁状を呈する備前焼の甕で、真壁編年Ⅳ期のものと考えられる。



第211図 SD2004・2007実測図 (1)

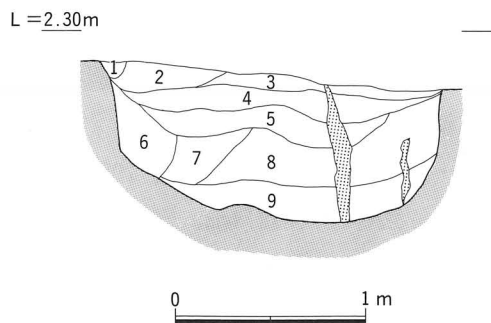


第212図 SD2004・2007実測図 (2)

溝 5 (SD2005) (第216図)

A～E-17～20で検出した比較的大きな溝で、SD2004の西側をほぼ平行して南北に縦走する。両端は調査区外に延びており、総延長で約24.5m分を検出した。幅は1.88～4.0mを測り、南端部が拡張している。断面形はU字状で、深度は北側部が約0.3mであるのに対して南端の拡張部では0.97mを測る。これはこの部分が第3遺構面で検出したSD3019と重複しているためであり、南端部の土層堆積状況を観察しても、溝の使用時期が2期にわたることが認められる。またこの溝も埋積土の中層では砂脈に通じた約20cmの砂層の堆積が見られ、地震に伴う液状化現象(噴砂)が観察される。このことからSD2005はこの砂層の下位を底面としていたのではないかと考えられる。

出土遺物は、土師質の杯・皿、瓦質火鉢、播鉢、こね鉢、白磁皿等であるが、遺物間に時期差があり、SD3019に伴う遺物が混入している。

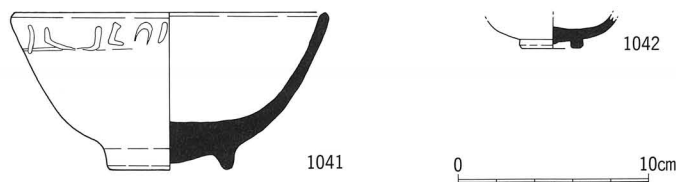


- 1 暗灰黄色2.5 Y 5/2粘質土
- 2 灰オリーブ色 5 Y 5/2粘質土
- 3 灰オリーブ色 5 Y 5/3粘質土
- 4 灰オリーブ色 5 Y 5/3粘質土
- 5 灰オリーブ色 5 Y 5/2粘質土
- 6 灰オリーブ色 5 Y 5/3粘質土
- 7 灰色 5 Y 5/1
- 8 灰オリーブ色 5 Y 5/2
- 9 オリーブ褐色 2.5 Y 4/4

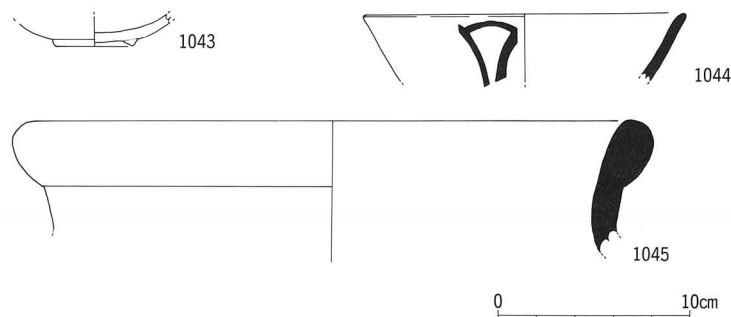
第214図 SD2004・2007実測図 (3)

出土遺物 (第217図)

1046は土師質の杯である。底部から直線的に延び、口縁部をやや肥厚させる。器壁は全体に薄く、体部内外面に丁寧な横ナデを施す。底部外面には回転ヘラ切り痕を留める。1047は土師質の皿である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部を尖り気味に仕上げる。体部内外面に丁寧なナデが施され、底部外面にヘラ切り痕を留める。1048は瓦質の火鉢である。口縁部は直立し、端部はやや丸みを帯びる。口縁部外面に菊花文が押印される奈良火鉢である。



第213図 SD2004出土遺物実測図



第215図 SD2007出土遺物実測図

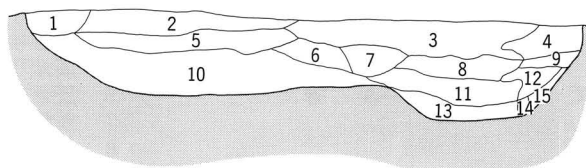
1052は陶器播鉢である。体部内面に8条を単位とする櫛描条線が施されている。備前焼播鉢である。1053・1054は東播系こね鉢である。1053は口縁端部を上下に拡張し、「く」の字状に近い形態である。森田編年の第Ⅲ期第2段階に当てはまる。1054は口縁部がやや内彎し、端部を肥厚させて端面を凸面としている。胎土に砂粒が多く含まれ、雑なつくりとなっている。森田編年の第Ⅲ期第3段階に比定される。1055は陶器壺と見られる。口縁部はやや外反し、玉縁状の口縁をもつ。口縁部内外面にロクロナデが施

され、外面に自然釉がかかる。備前焼で、間壁編年のⅣ期に相当する。

1049は白磁皿である。口縁部が外反し、端部を尖り気味に仕上げる。口縁端部は釉が掻き取られる「口禿」の皿である。1050は青磁碗の底部で、断面方形の高台をもち、底部外面以外に緑色の釉が施される。龍泉窯系青磁碗である。1051は青磁皿の底部である。平底で、体部の器壁は薄いものと見られる。底部内面に淡緑色の釉を施している。

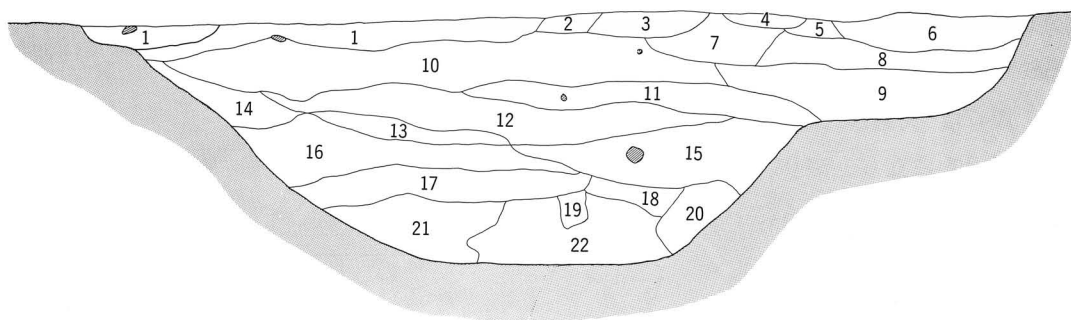
1056・1057は土師質の脚部で、1058・1059は土錘である。1060は木製品で曲物片と考えられる。残存長18.4cm、残存最大幅2.4cm、厚さ0.4cmを測り、釘穴が開けられている。

L=2.20m



- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 | 9 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 |
| 2 灰オリーブ色 5 Y5/3粘質土 | 10 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 |
| 3 灰オリーブ色 5 Y5/3粘質砂質土 | 11 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 |
| 4 灰オリーブ色 5 Y5/3粘質土 | 12 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 |
| 5 灰オリーブ色 5 Y5/3粘質土 | 13 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 |
| 6 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 | 14 灰オリーブ色 5 Y5/3粘質土 |
| 7 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 | 15 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 |
| 8 灰オリーブ色 5 Y5/3粘質土 | |

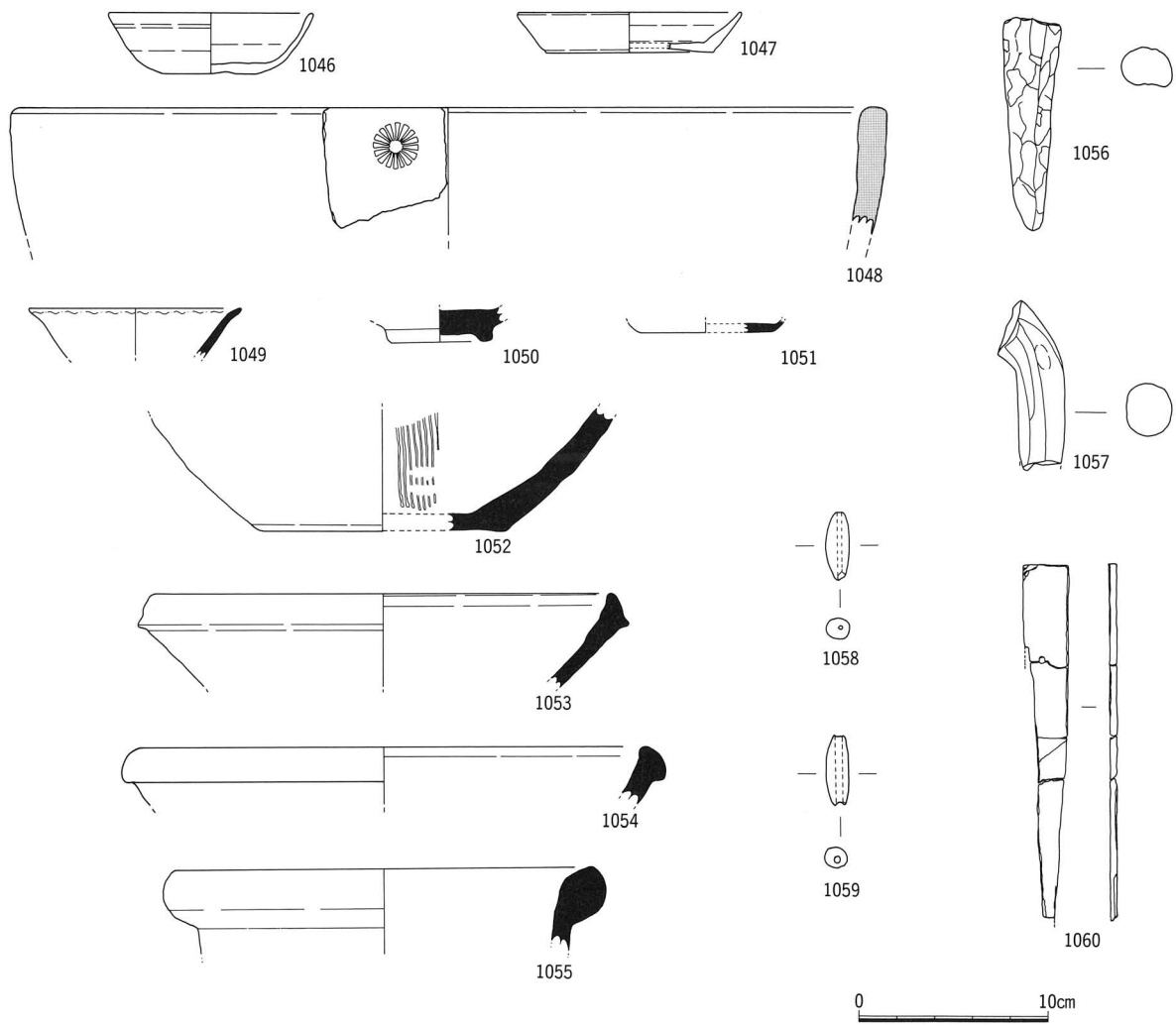
L=2.30m



- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 | 12 黄褐色 2.5 Y5/4砂層 |
| 2 灰オリーブ色 5 Y5/3粘質土 | 13 黄褐色 10YR5/6砂層 |
| 3 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 | 14 オリーブ黄色 5 Y6/3粘質土 |
| 4 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 | 15 灰色 5 Y6/1粘質土 |
| 5 灰オリーブ色 5 Y6/2粘質土 | 16 灰色 5 Y6/1粘質土 |
| 6 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 | 17 灰オリーブ色 5 Y6/2粘質土 |
| 7 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 | 18 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 |
| 8 灰オリーブ色 5 Y6/2粘質土 | 19 灰色 10 Y5/1粘土 |
| 9 灰オリーブ色 5 Y6/2粘質土 | 20 緑灰色 10GY5/1粘土 |
| 10 灰オリーブ色 5 Y6/2粘質土 | 21 緑灰色 10 Y5/1粘土 |
| 11 灰オリーブ色 5 Y6/2粘質土 | 22 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土 |

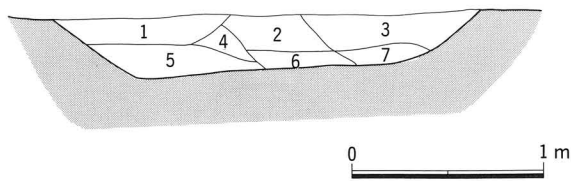
0 2 m

第216図 SD2005実測図



第217図 SD2005出土遺物実測図

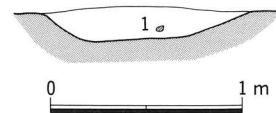
L = 2.40m



- 1 灰オリーブ色 5 Y5/3粘質土
- 2 灰オリーブ色 5 Y5/3粘質土
- 3 灰オリーブ色 5 Y5/3粘質土
- 4 灰オリーブ色 5 Y5/3粘質土
- 5 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土
- 6 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土
- 7 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土

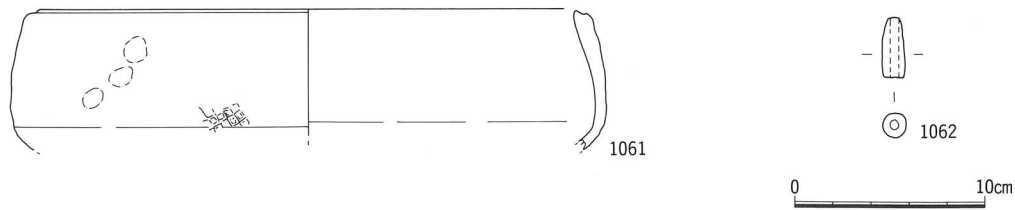
第218図 SD2008実測図

L = 2.40m



- 1 灰オリーブ色 5 Y5/3粘質土

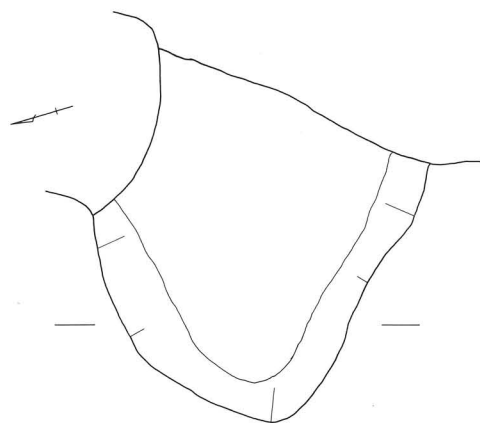
第219図 SD2010実測図



第220図 SD2010出土遺物実測図

溝8 (SD2008) (第218図)

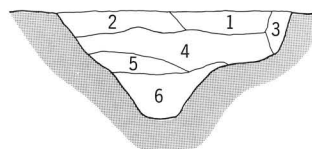
E・F-11~14で検出した溝で、東西方向に延びる。東端は調査区外に延びるが、西側は攪乱によって切られる。延長で約11.8m分を検出し、幅は0.65~0.98mを測る。深さは0.15mと比較的浅い。埋積土は灰オリーブ色粘質土である。この溝とSD2010とは平行関係にある。埋積土からの出土遺物は土錘1点である。



溝10 (SD2010) (第219図)

E・F-11・12で検出した溝で、ほぼ東西に延びる。東端は調査区外に延び、西端は掘方が判然としない。検出分は長さ6.39m、幅0.41~0.91mを測り、深さは0.09mとかなり浅い。埋積土は灰オリーブ色粘質土で1層である。

L=2.10m



出土遺物は土師質の鍋、土錘である。



出土遺物 (第220図)

1061は土師質の鍋である。体部が大きく内彎し、器壁は口縁部にかけて肥厚し、端部を凹面に仕上げられる。体部外面の下位には格子目のタタキが施され、上位にはユビオサエが残る。また内面には横ナデが施される。1062は土錘である。

- 1 灰オリーブ色 5 Y 5/2 粘質土
- 2 灰オリーブ色 5 Y 5/3 粘質土
- 3 灰オリーブ色 5 Y 5/2 粘質土
- 4 灰色 5 Y 5/1 粘質土
- 5 灰オリーブ色 5 Y 5/2 粘質土
- 6 灰オリーブ色 5 Y 5/3 粘質土

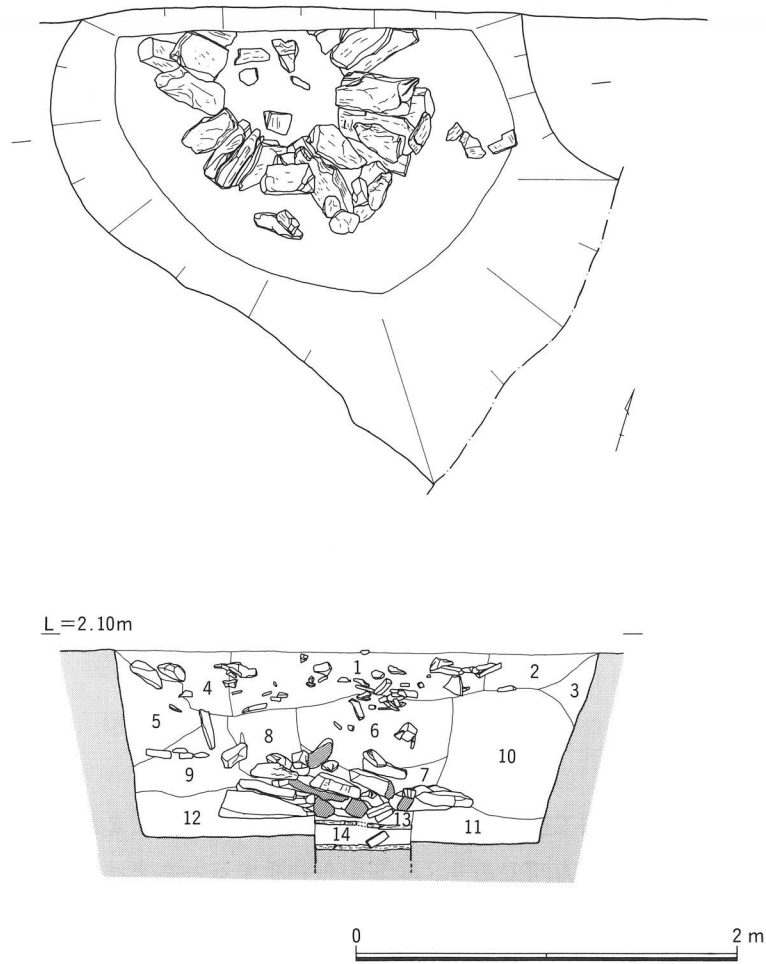
第221図 SK2003実測図

土坑

〈4次調査〉

土坑3 (SK2003) (第221図)

E-17・18で検出した。北側はSD2004に、東側はSD2007に切られるため、本来の規模は不明である。残存の長軸2.05m、短軸1.75mを測る。断面形は不整なU字状を呈し、深さは0.56mである。埋土は6層に分層できるが、鉄分・マンガンを含む灰オリーブ色粘質土を基調としている。出土遺物は特にない。



- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 灰色7.5Y4/1粘質土 | 8 オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土 |
| 2 灰オリーブ色5Y5/2粘質土 | 9 暗緑灰色7.5GY4/1粘土 |
| 3 灰色5Y5/1粘質土 | 10 暗緑灰色10GY4/1粘土 |
| 4 灰オリーブ色5Y5/2粘質土 | 11 暗緑灰色10GY3/1粘土 |
| 5 灰色5Y5/1粘質土 | 12 暗緑灰色10GY3/1粘土 |
| 6 灰オリーブ色7.5Y5/2粘質土 | 13 暗緑灰色7.5GY4/1粘土 |
| 7 暗緑灰色10GY4/1粘土 | 14 褐色7.5YR4/3砂礫層 |

第222図 SE2001実測図

井戸

〈4次調査〉

井戸1 (SE2001) (第222図)

B-12で検出した石組井戸である。北側の一部が調査区外にかかり、また東部が攪乱によって切られるため、全体の形状・規模は不明であるが、検出分の計測から、径約2.5mの円形状の掘方をもつと推測される。井戸上部の残存状態はよくなく、石組の一部と考えられる5～25cmの礫が埋積土に散乱していたが、基底部では30～40cm大の角礫（結晶片岩）によって内径約0.6mの井側が1～2段組で整然と構築されていた。石組下部では井筒として木桶が埋設されていたことが推測され、それに伴うタガ2条が部分的に残存していた。掘方の検出面から深度約1.1mの地点で湧水層である砂礫層になっており、井筒の最深部はそれ以上であったと考えられる。掘方の東側の土層断面を観察すると、この井戸は時期的に古い溝を切って築造していることが認められ、溝の方位を考えると、第3遺構面で検出したSD3019が西に延びていたことが推測される。

出土遺物は、井側内から出土した柄杓の底板片、土師質土器の細片である。

出土遺物 (第223図)

1063は柄杓の底板片である。残存長9.0cmを測り、厚さは0.8cmである。

自然流路

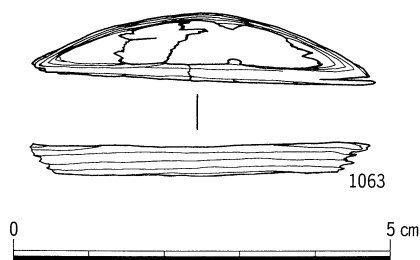
〈5次調査〉

自然流路 (SR3001) (第224図)

G調査区の東部を斜めに横切る形で検出された。調査区内にかかる西岸部は検出できたが、東岸部については、調査区外にかかるため確認できなかった。流路幅については不明であるが、調査区内で確認した最大幅は27mであった。

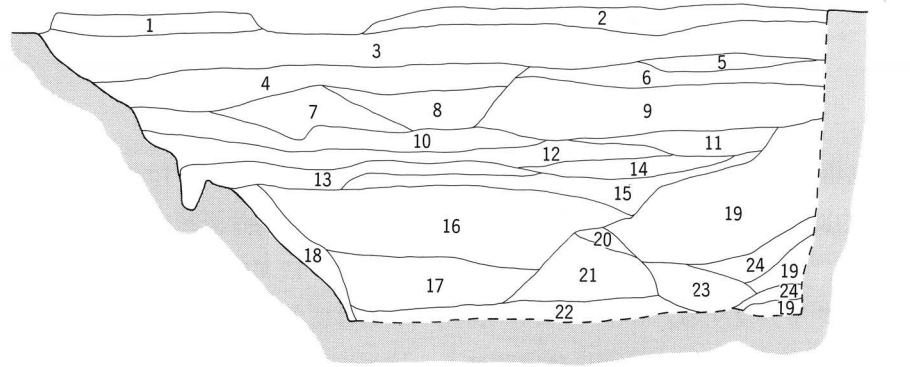
この流路は、第2遺構面上面で検出したが、第3遺構面の遺構が営まれた時期にも流れていたと考えられる。流路の方向はほぼ南北方向であり、地形から判断すると本来は北から南に向かって流れていたものと推定される。深さについても、トレンチにより確認を試みたが、2m以上は砂層のため掘削が困難で、正確には不明である。

埋土は、上部はやや粗い砂の混入する粘土で、流路の落ち込みの部分には土器片や炭化物を含んでいる。下部は、砂層と粘土の互層で、緑灰色の粘土の堆積が見られた。この層からも土器片が出土している。



第223図 SE2001出土遺物実測図

L=2.40m



0 2 m

- | | | | |
|----|--------------------------------|----|-------------------------|
| 1 | オリブ褐色2.5Y4/6シルト質 | 13 | 灰オリブ色7.5Y5/2粘質土 |
| 2 | オリブ褐色2.5Y4/4シルト質 | 14 | 黄褐色2.5Y5/3砂まじり粘土 |
| 3 | 黄褐色2.5Y5/6シルト質 | 15 | 黄褐色2.5Y5/3粘土 |
| 4 | にぶい黄褐色10YR5/3粘質土
(土器片・焼土含む) | 16 | 緑灰色10GY5/1粘土 (土器片含む) |
| 5 | オリブ褐色2.5Y4/4シルト質 | 17 | 暗緑灰色10GY4/1粘土 |
| 6 | オリブ褐色2.5Y4/4シルト質砂まじり | 18 | 緑灰色7.5GY5/1粘質土 (炭化物含む) |
| 7 | 黄褐色2.5Y5/4粘質土 | 19 | 砂 |
| 8 | 黄褐色2.5Y5/4シルト質砂まじり | 20 | 緑灰色10GY5/1粘土砂まじり |
| 9 | オリブ色5 Y5/4粘土 (大量の砂まじり) | 21 | 暗緑灰色7.5GY4/1粘土 (炭化物含む) |
| 10 | オリブ黄色5 Y6/3粘土 (土器片・炭化物含む) | 22 | 暗オリブ灰色5 GY4/1粘土 |
| 11 | オリブ色5 Y5/4粘土砂まじり | 23 | 緑灰色7.5GY5/1砂混粘土 (炭化物含む) |
| 12 | オリブ黄色5 Y6/3粘土 (炭化物含む) | 24 | 暗オリブ色7.5Y5/3砂まじり粘土 |

第224図 SR3001実測図

出土遺物

流路内からの遺物は、土師質土器の小片や陶器片が少量出土したが、いずれも小片のため図示可能なものはない。口径の計測の可能な吉備系土師器碗については、口径10.0～10.5cmの範囲におさまる。遺物が埋没したと見られる14世紀の終わり頃まで流路として機能していたと推定される。

(3) 包含層出土遺物 (第225～246図)

土師質土器 (第225～232図)

杯 (第225・226図)

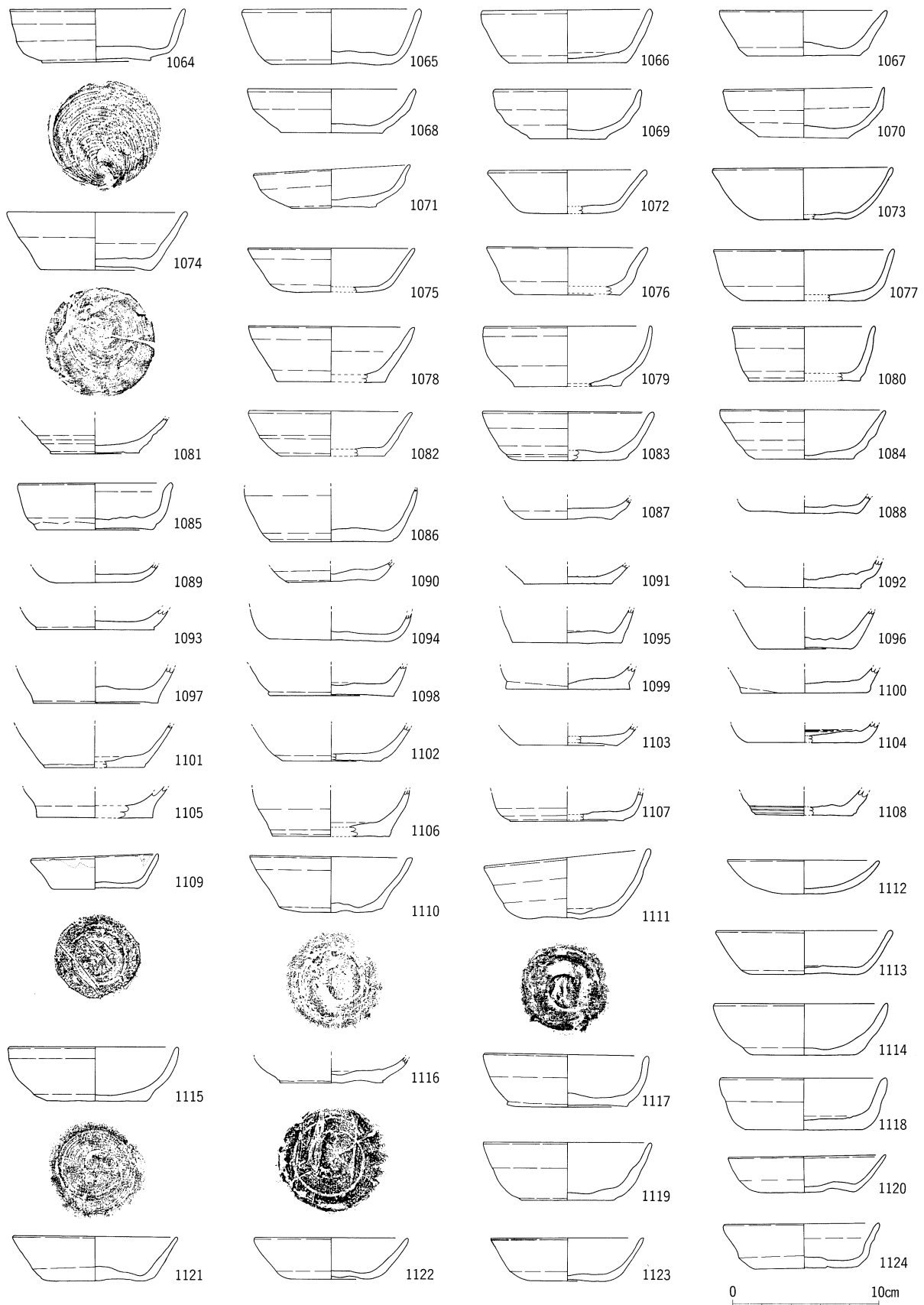
底部切り離し技法が回転糸切りよるものは1064～1108である。1064～1067・1072～1078・1080～1084は底部からほぼ直線的に立ち上がり、全体に器壁が厚く、口縁端部を尖り気味に仕上げる。体部内外面には横ナデが施される。胎土は微砂粒を多く含み、色調は赤褐色・にぶい橙色を呈する。1076は体部中位から口縁部にかけてやや外反する。1068～1071・1079・1085は底部から大きく内彎して立ち上がり、口縁端部を尖り気味に仕上げる。体部外面には成形による稜がつき、体部内面には丁寧なナデが施される。形態は備前焼の椀に類似する。1072・1073・1075・1082・1094は全体に器壁を薄く仕上げる杯である。1072・1101は体部が口縁部にかけて斜め上方に延び、1073・1049は底部から内彎して立ち上がる。いずれも底部外面には回転糸切り後ナデが施されている。1074・1078は器高がやや大きい杯で、底部から斜め上方に立ち上がり、体部中位にわずかな稜がつく。体部内外面には横ナデが施され、色調はにぶい橙色を呈する。1084は体部がわずかに内彎し、外面には成形による凹凸が見られる。内外面には丁寧な横ナデが施され、胎土は精良である。

1109～1189は回転ヘラ切り痕を留める杯である。1110・1113・1114・1119～1122・1125～1130・1132～1138は底部内面にわずかに凹凸があり、体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部を尖り気味に仕上げる。器壁は全体に薄く、体部内外面にナデが施される。底部外面には回転ヘラ切り後丁寧なナデが施され、板状圧痕を留めるものも含まれる。胎土は精良で、色調はにぶい橙色・黄褐色・灰白色を呈する。このタイプの杯は吉備系土師器椀と組み合わせ関係にあると考えられる。1125・1145は底部から外方に開いて立ち上がり、1145・1149は体部中位から口縁部にかけて少し外反する。全体に器壁を薄く仕上げ、色調はにぶい橙色を呈する。1124は底部から内彎して立ち上がり、体部中位から口縁部にかけて少し外反する。体部内面は丁寧な横ナデが施される。胎土は精良で、色調は灰黄褐色を呈する。1117は体部が内彎して立ち上がり、口縁端部をわずかに肥厚させる。成形がやや雑で、胎土は砂粒を多く含む。1110～1112・1135・1136・1140・1150・1167は底部が丸底状の杯で、体部外面に成形による凹凸が顕著に見られる。1140の体部は大きく内彎するが、他は口縁部にかけてほぼ直線的であり、1136は口縁部がわずかに外反する。1109・1123は口縁部内外面に煤が付着し、灯明皿として使用されたものである。1109は底部外面に板状圧痕を留め、体部内外面にナデが施される。完形品で、口径8.5cm、器高2.25cm、底径5.9cmを測り、色調は灰白色である。

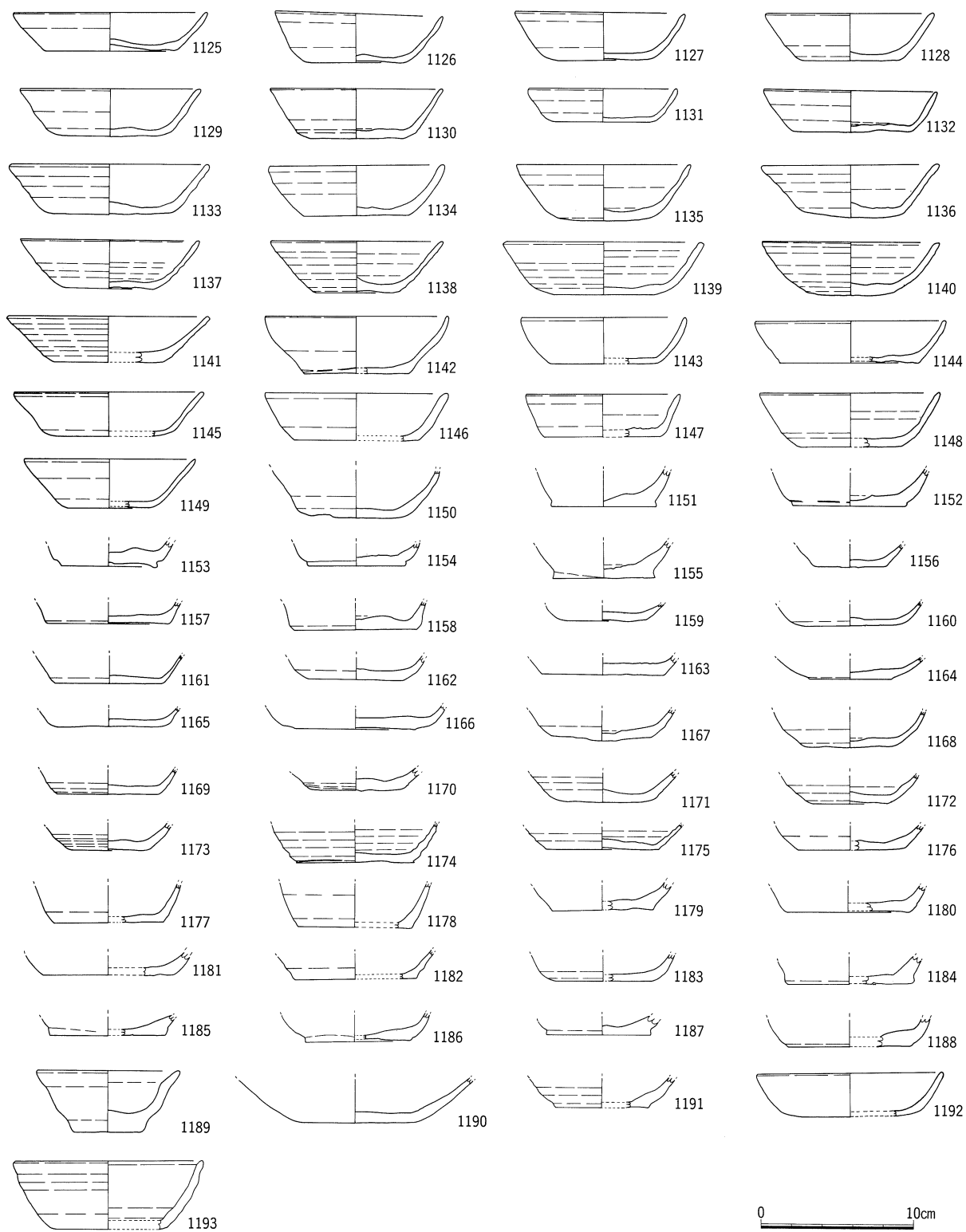
1189は底部から内彎して立ち上がり、口縁部を外反させる。高台付の杯か。1190～1193の底部切り離しは不明であるが、1192は形態・色調から吉備系土師器椀と組み合わせ関係にある杯と見られる。

皿 (第227図)

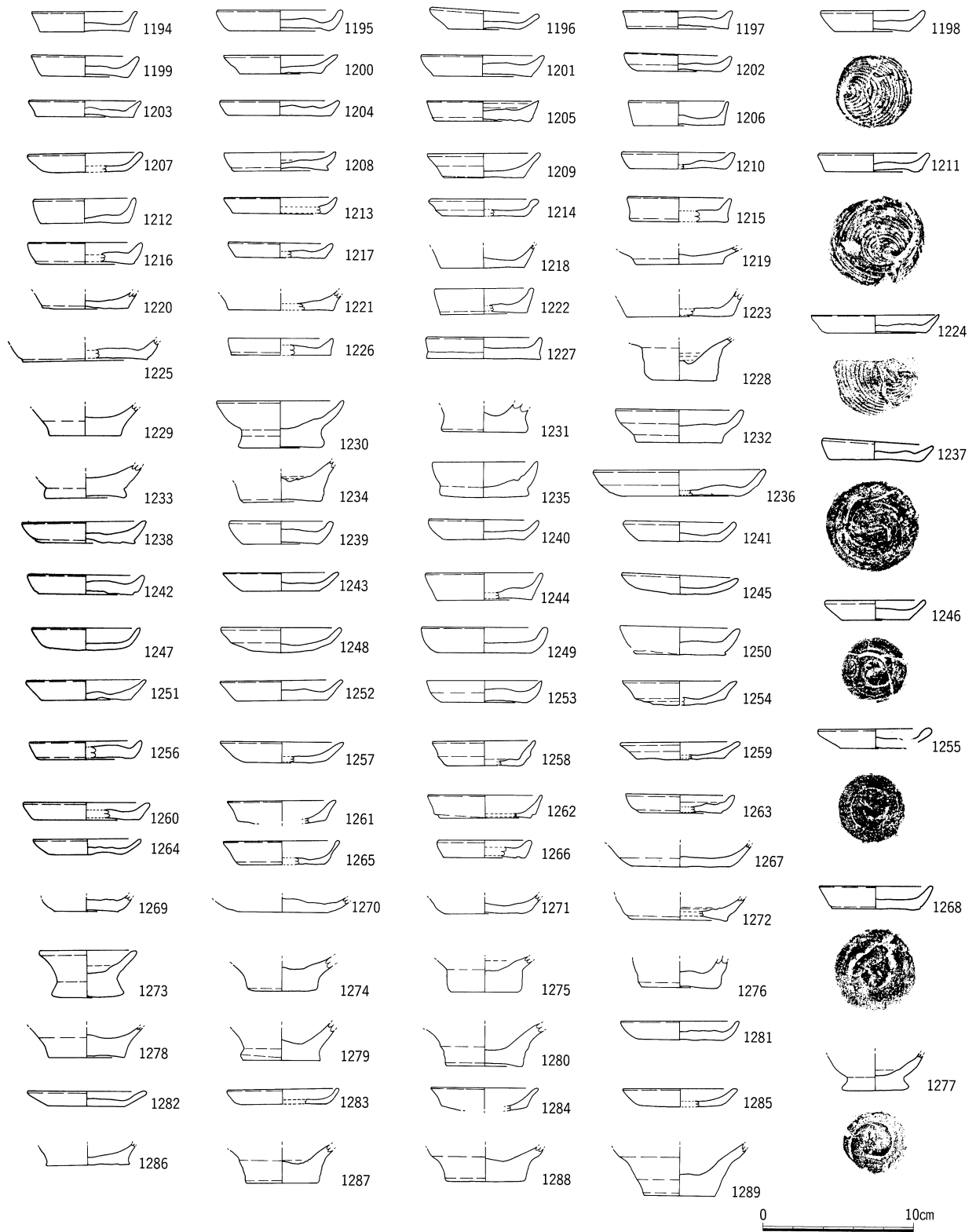
1194～1227は底部に回転糸切り痕を留める皿である。1194～1200・1202～1207・1209～1227は形態に差異はあるが、色調は赤褐色・橙色を基調にしており、胎土に砂粒を多く含むものである。底部外面には回転糸切り後にナデが施されるものが多い。1225は口径がやや大きい皿で、体部内外面に横ナデが施される。



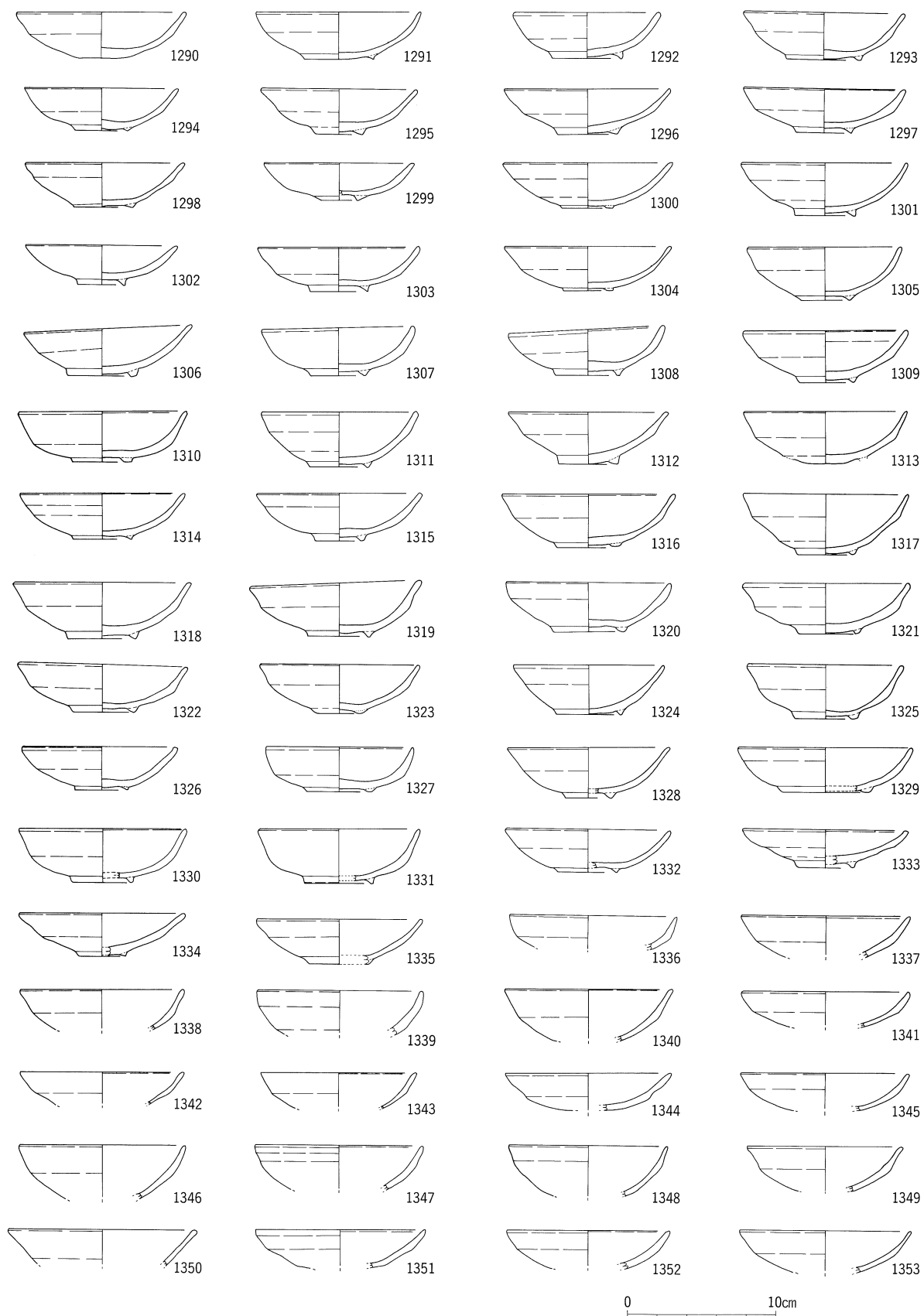
第225图 包含層出土遺物実測図 (1)



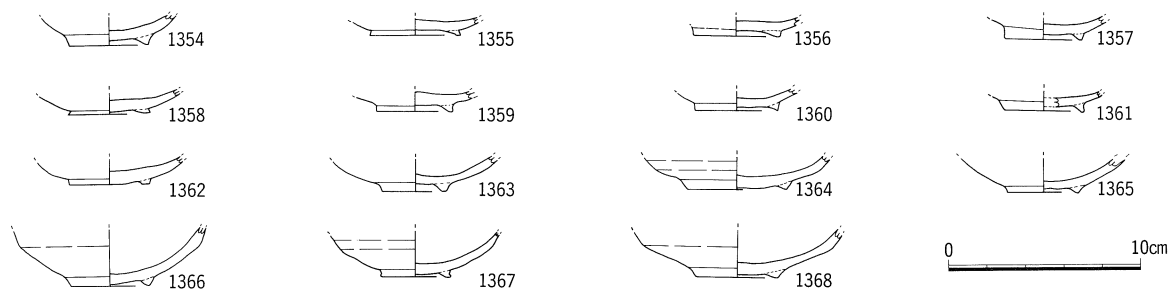
第226图 包含層出土遺物実測図 (2)



第227图 包含層出土遺物実測图 (3)



第228图 包含層出土遺物実測图 (4)



第229図 包含層出土遺物実測図 (5)

1228～1234は高台付の皿である。1230・1233は高台下部が張り出し、底部外面は回転糸切り痕を粗くナデ消している。1230は体部は内彎して立ち上がり、口縁端部を尖り気味に仕上げる。1228・1231・1234は底部が厚く、底部内面の凹凸が顕著である。胎土に砂粒を多く含み、色調は橙色である。1253は底径がやや大きく、低い高台をもち、口縁部はやや内彎するものである。

1235は底面に静止糸切り痕を留めるものである。底部は厚く、下部に拡張が見られる。体部は内彎して立ち上がり、器壁を厚く仕上げる。

1236～1272は底部切り離し技法が回転ヘラ切りによるものである。1244・1250・1264・1268・1271は吉備系土師質皿である。口径は復元値を含むが、1236・1249・1252・1257は8.0cm以上を測り、他は底部欠損のものを除くと、7.0～8.0cmである。形態に若干の差があるが、全体に器壁を薄く仕上げ、体部内外面には回転の横ナデが施される。底部外面は回転ヘラ切り後ナデが施されるものがほとんどで、一部ユビオサエの跡を留めるものもある(1249・1263)。また底部内外面に回転ヘラ切りによって顕著な凹凸がついたものも見られる(1251・1264)。胎土は微砂粒を含むが、概ね精良で、色調は淡橙色・浅黄橙色を呈する。これら吉備系土師質皿は山本吉備系土師器碗類型のⅢ-3期C3類に対応するものと思われる⁽¹⁰⁾。

1273は高台の付く皿である。また1274～1280は高台付皿の底部である。形態から底部が厚く、ほぼ直立するもの(1273・1276)と、厚みがやや薄く、外反するもの(1274・1278～1280)、底部下位が張り出し、断面が台形状のもの(1273・1277)に分類される。1277は体部が内彎しながら立ち上がるが、1274はやや外反して立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。

1281～1289は底部切り離し技法が不明なものである。1283～1285は形態・色調から吉備系土師質皿と見られる。1286～1289は高台付皿の底部であるが、1289は高台付の杯の可能性はある。

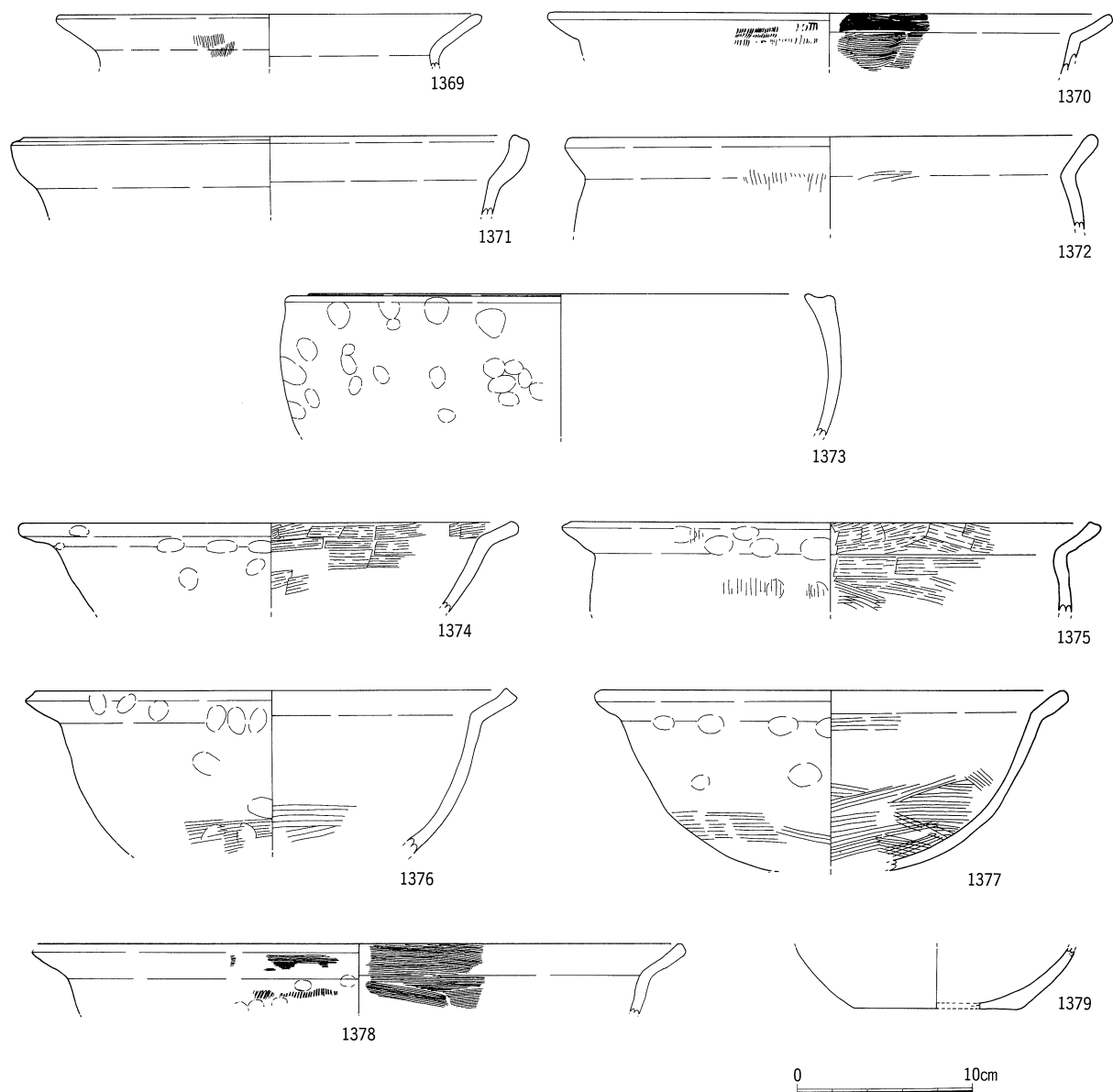
碗 (第228・229図)

碗はいずれも吉備系土師器碗である。底部から内彎して立ち上がり、口縁部をわずかに外反させる。全体に器壁を薄く仕上げ、体部外面の中上位には横ナデによる稜が付く。また体部外面中位から底部にかけてはユビオサエの跡が残り、体部内面は全体にナデが施される。高台は退化傾向が顕著で、断面三角形のものが大半を占めるが、一部逆台形状のものが見られる(1300・1304・1306・1310・1316・1321・1362)。1290・1344は高台の付かないタイプである。法量は総じて小さく、復元値も含まれるが、山本吉

備系土師器碗類型のⅢ-3期C3類の基準値とした口径10.7~11.6cm、器高3.0~3.5cmか、それ以下である。このことからこれらの碗は14世紀前半の年代観が与えられる。

鍋 (第230図)

1369~1378は鍋である。口縁部を「く」の字状に屈曲させる形態が最も多く、このうち口縁部端面を平坦とするものと凹面とするもの (1371・1373) に分類される。前者には体部内面に横ハケ目が施され、体部外面にはユビオサエ後に縦ハケ目を施すものが多く見られる。後者のうち1371は口縁部を肥厚させ、内面に丁寧な横ナデが施されている。1373は体部・口縁部が内彎するもので、口縁端部を肥厚させて、端面を凹面に仕上げる。体部外面にはユビオサエの跡が残る。1379は鍋の底部と見られる。



第230図 包含層出土遺物実測図 (6)

羽釜・播鉢（第231図）

1380～1385は羽釜である。1380は口縁部が内彎するもので、体部外面に平行タタキが施され、断面三角形の鍔が貼り付けられている。1381・1384は口縁部がほぼ直立し、端部を平坦に仕上げる。体部外面にユビオサエの後横ナデが施され、口縁部直下に断面方形状の鍔が付く。1382・1383・1385は口縁部が体部から斜め上方に延びるもので、口縁端部を少し肥厚させている。1382・1385は体部内面にユビオサエの後横ハケ目が、1383は体部内面に横ナデがそれぞれ施される。

1386は播鉢の底部である。体部内面に6状以上を単位とする楕円条線が施される。

脚部（第232図）

鍋もしくは羽釜の脚部と見られる。1387は完形で、長さ18.7cm、中央部の径2.1cmを測る。いずれもユビオサエ後にヘラケズリで成形し、1387・1390～1392はその後縦方向のナデを施している。断面の形状は円形状で、胎土は砂粒を多く含んでいる。

瓦器・瓦質土器（第233・234図）

瓦器椀・皿（第233図）

1394～1417は和泉型の瓦器椀である。1412・1416・1417の底部には退化した高台が貼り付けられるが、それ以外は無高台である。見込みから体部内面に施されたヘラミガキは全体にまばらで、渦巻き状のものである。炭素の吸着は不良で、色調は灰色・灰白色を呈するものが多い。口径は10.5～12.9cm、器高は2.6～4.1cmの範囲にあり、総じて法量は小さい。1412は底部に断面三角形の高台が付き、体部が大きく内彎して立ち上がり、口縁部が外反する。内面のミガキは渦巻き状に施され、口径、器高とも大きいものである。

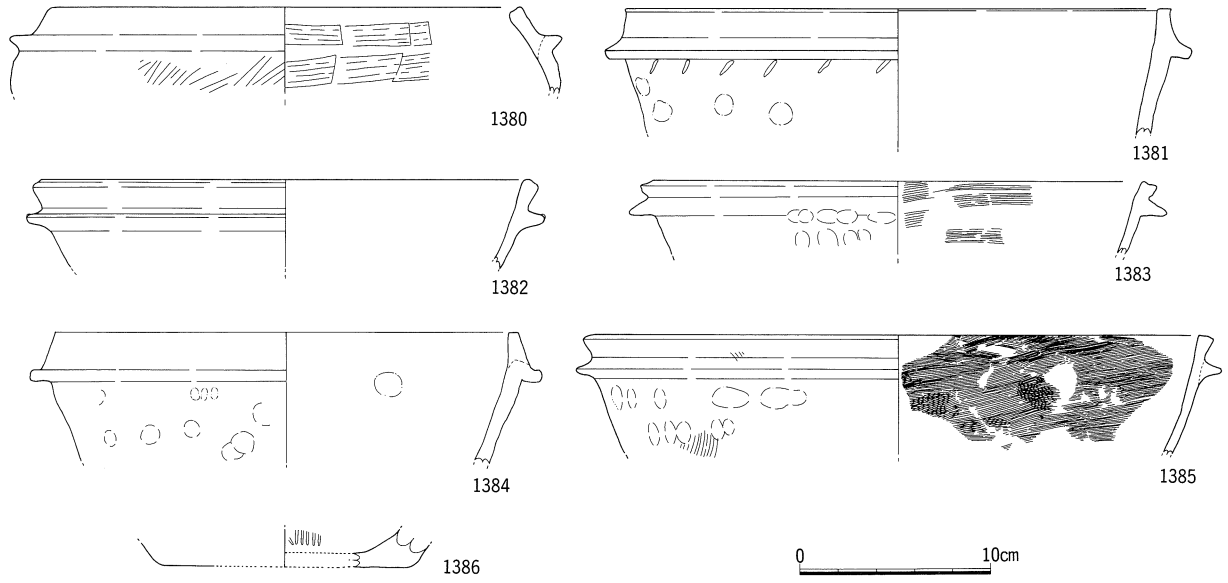
復元値を含む口径の大きさから分類すると、口径12.0～13.0cmは1397・1402・1404・1412、11.0～12.0cmは1395・1396・1398・1399・1401～1403・1405～1408・1414～1416、10.0～11.0cmは1394・1400・1409～1411となる。1412は森島編年のⅣ－2に、1397・1399・1404は同編年のⅣ－3に、それ以外は同編年のⅣ－4に比定される。

1418は和泉型瓦器皿である。口縁部が外反し、内外面に横ナデが施される。

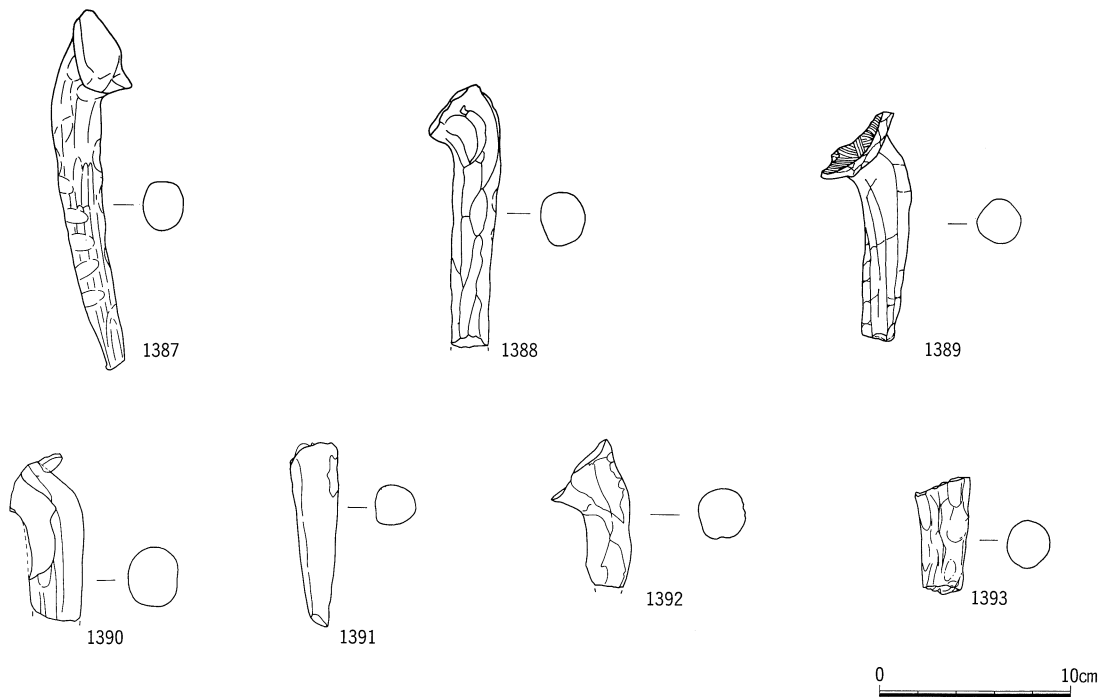
鍋・羽釜・こね鉢・脚部・火鉢（第234図）

1419・1423は鍋である。1419は口縁部が直立気味で、端部を平坦におさめる。口縁部直下には断面方形状の鍔が貼り付けられる。体部内面には横ハケ目が施され、外面にはユビオサエが見られる。1423は口縁部を直立させ、端部を尖り気味に仕上げる。体部外面下位には格子状のタタキ目ならびに斜め方向のハケ目が施される。口縁部外面は横ナデが、同内面にはユビオサエ後に横ナデが施される。口縁部には断面方形状の鍔が付く。1420～1422は羽釜である。1420・1422は体部・口縁部が大きく内彎し、ともに口縁端部を丸くおさめる。体部内外面に横ナデが施され、1420は口縁部直下に断面三角形の鍔が付き、1422は体部中位に鍔が貼り付けられる。1421は口縁部が直立し、端部は平坦である。断面台形状の鍔が貼り付けられ、体部内面は横ナデが施される。

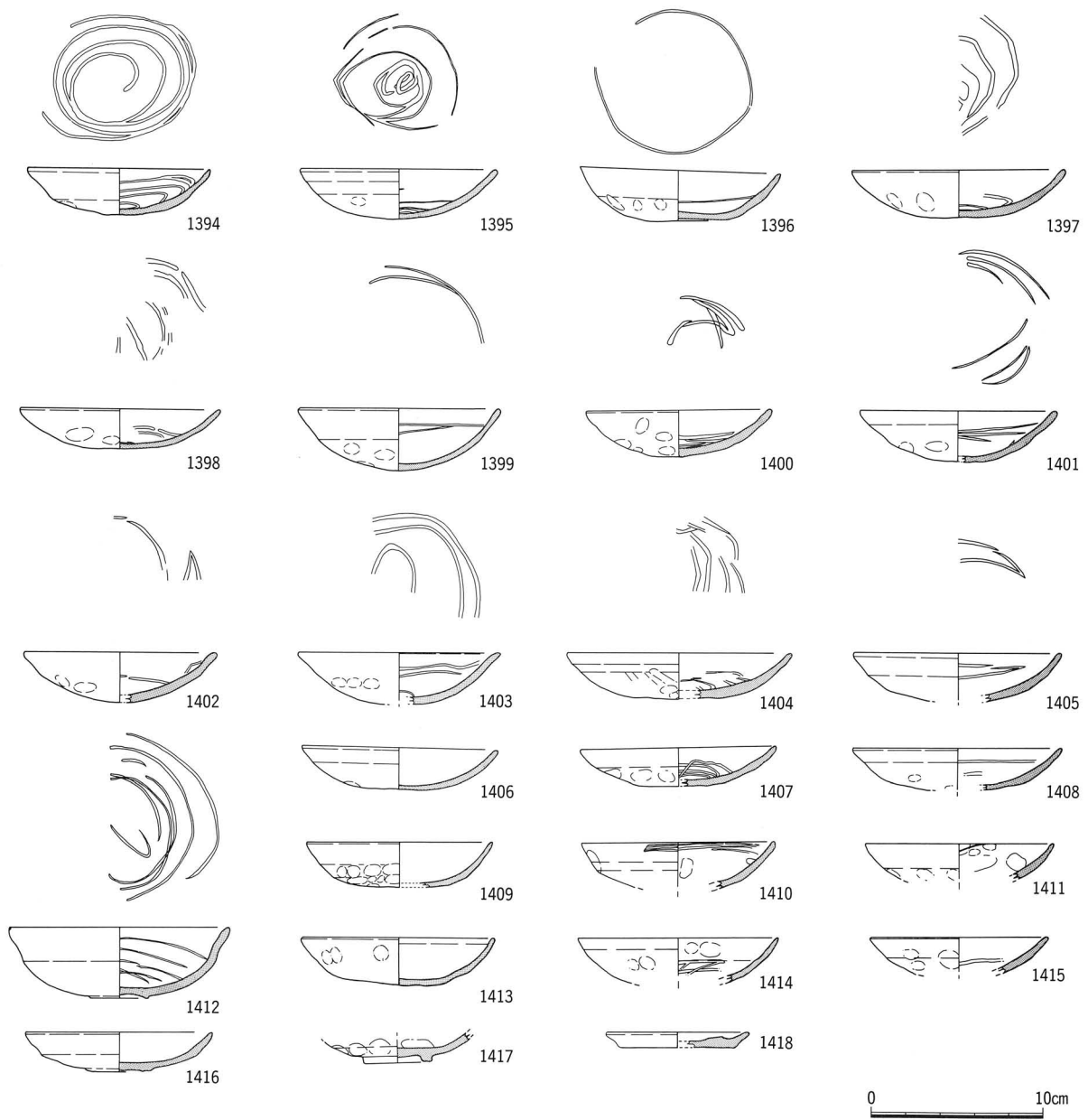
1424～1429は脚部である。いずれも断面円形状で、1428は外面にユビオサエが残る。1430～1432は火



第231図 包含層出土遺物実測図 (7)

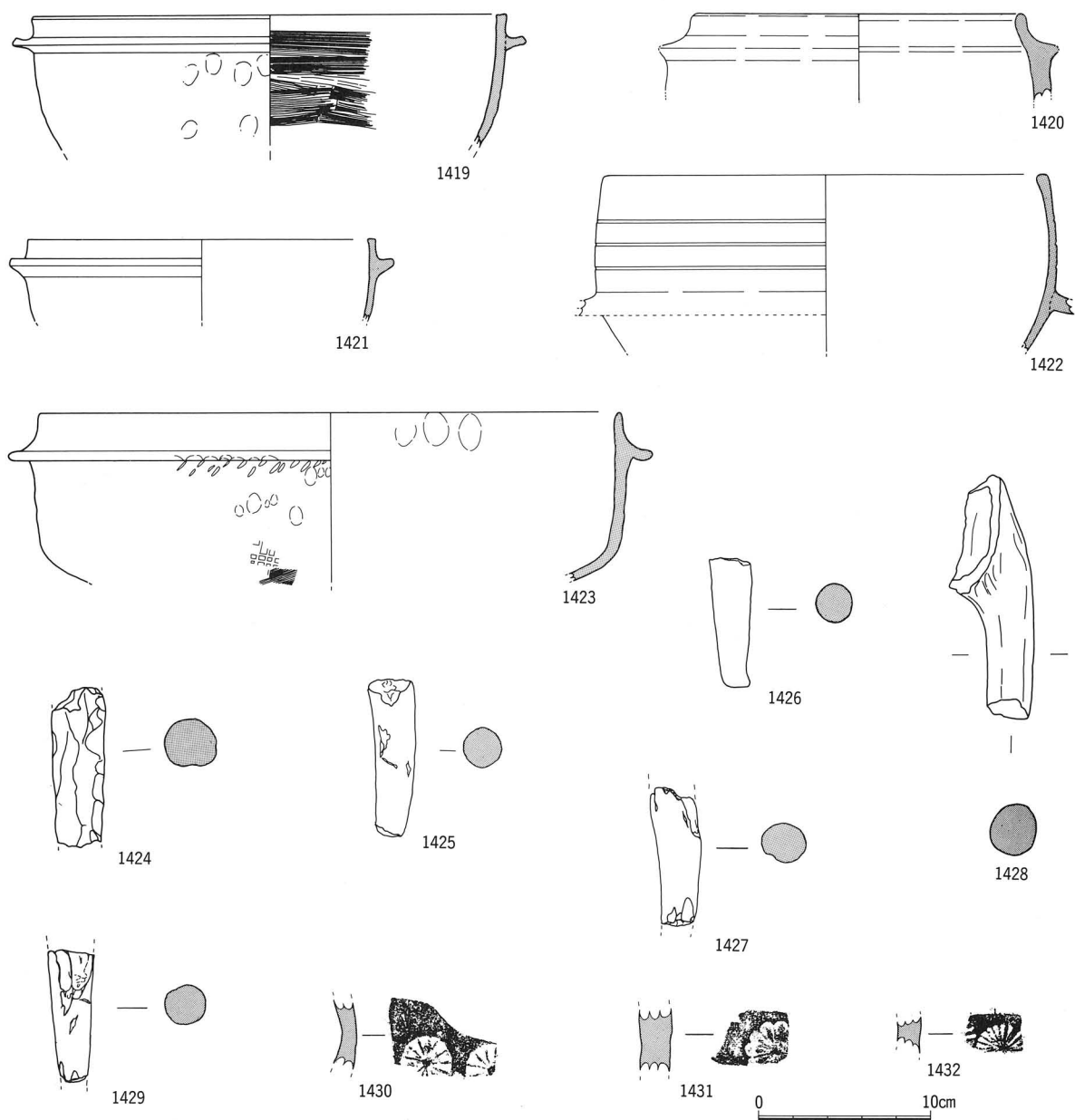


第232図 包含層出土遺物実測図 (8)



第233図 包含層出土遺物実測図 (9)

鉢の破片である。体部外面に菊花文が押捺される奈良火鉢で、1430は立石奈良火鉢分類の浅鉢Ⅲに、1431は同分類の浅鉢Ⅰに当てはまる。

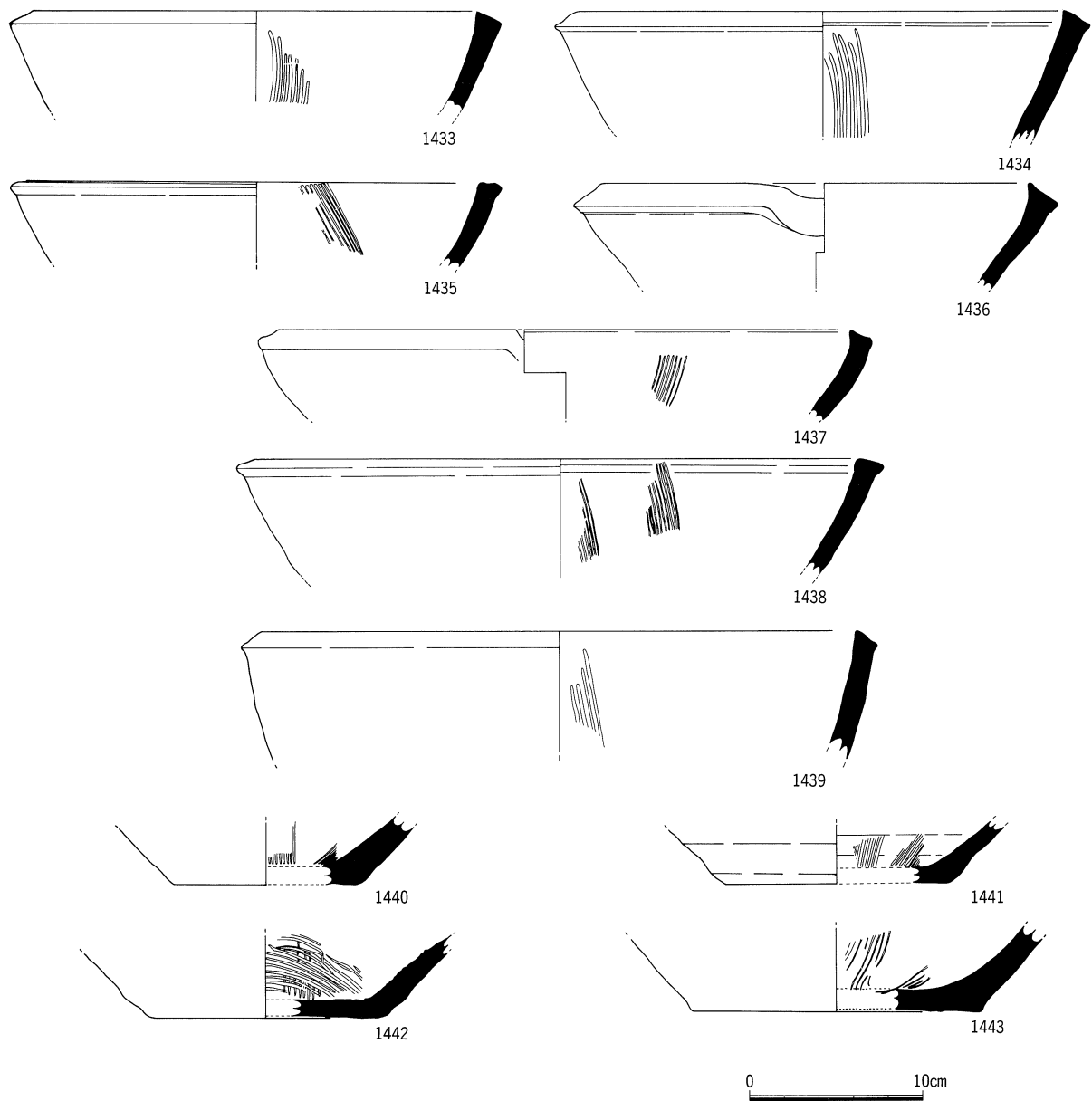


第234図 包含層出土遺物実測図 (10)

国内産陶器 (第235~238図)

擂鉢 (第235図)

いずれも備前焼擂鉢である。口径は復元値であるが、24.6cm~34.7cmを測る。口縁部の形態から、口縁端部を少し斜めに切り、端面をほぼ平坦にするもの (1433・1437・1439) と端部にやや拡張が見られるもの (1434・1436・1438) に分類される。体部内面に施された櫛描条線で1単位の条数が明らかなものは、7条が1433・1437、8条が1435・1438・1442で、他は不明である。1433・1435・1437・1439は真壁

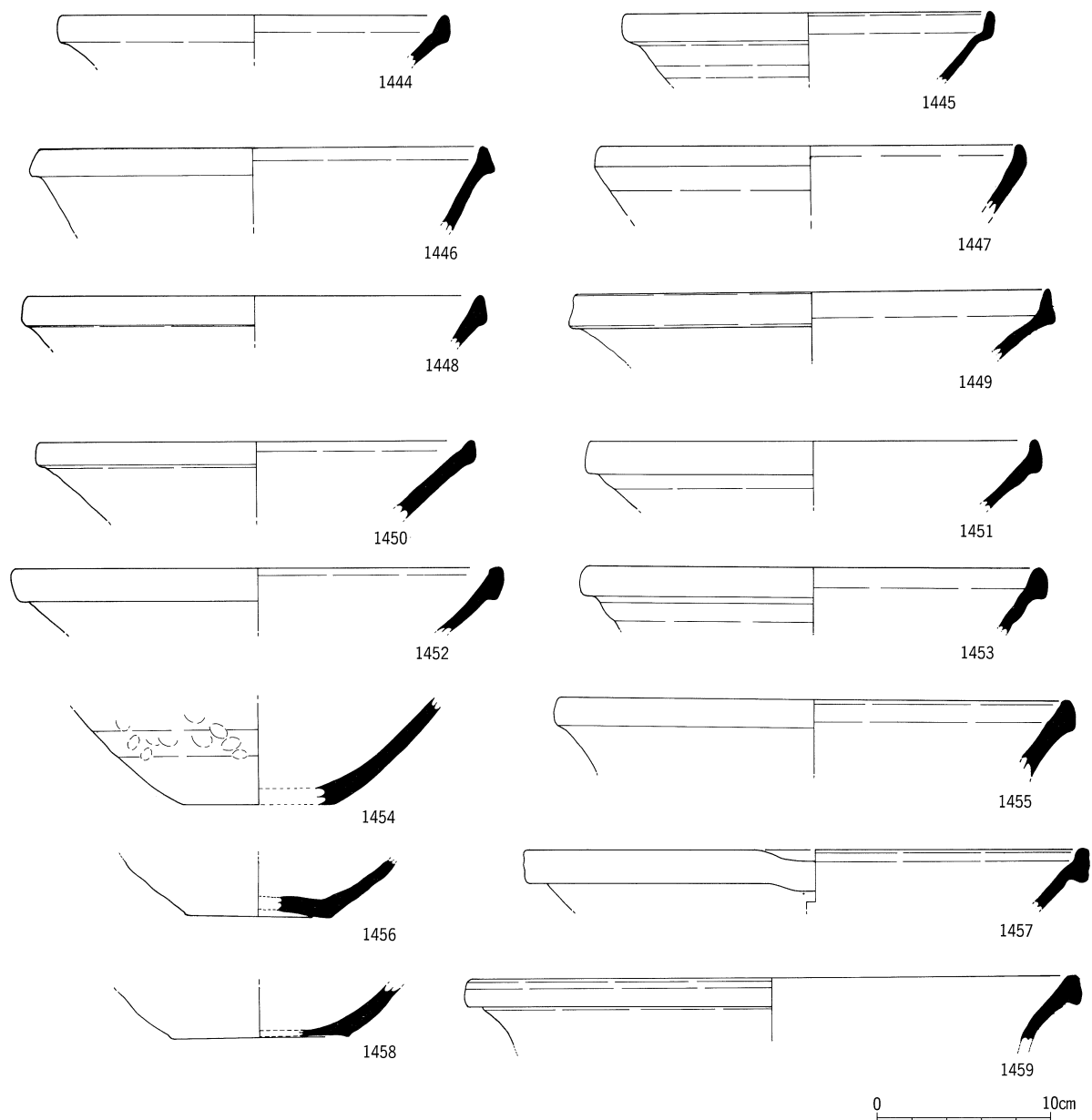


第235図 包含層出土遺物実測図 (11)

編年のⅢ期に、1434・1436・1438はⅣ期に比定される。1440～1443は底部であるが、年代は明らかでない。

こね鉢 (第236図)

いずれも東播系こね鉢である。口縁部の形態から分類すると、1450・1455は口縁端部の上下への拡張がわずかに見られる。1444・1445・1448・1449・1451は口縁端部の上方への拡張が顕著で、1445・1449は口縁部が緩やかに外反する。1446・1457は口縁端部が上下に拡張され、「く」の字状の形態を示している。1452・1453・1459は口縁端部を肥厚させるとともに下方への拡張がわずかに認められる。1454・1456・1458は底部であるが、1456は体部が直線的に立ち上がり、1454・1458はやや内彎して立ち上がる。全体



第236図 包含層出土遺物実測図 (12)

の色調は灰色・灰白色で、口縁部外面に焼成時の重ね焼きの痕跡が多く見られる。1450・1455は森田編年の第II期第2段階に、1444・1445・1448・1449・1451は同第III期第1段階に、1446・1457は同第III期第2段階に、1452・1453・1459は同第III期第3段階に比定される。

甕・壺・椀・香炉他 (第237・238図)

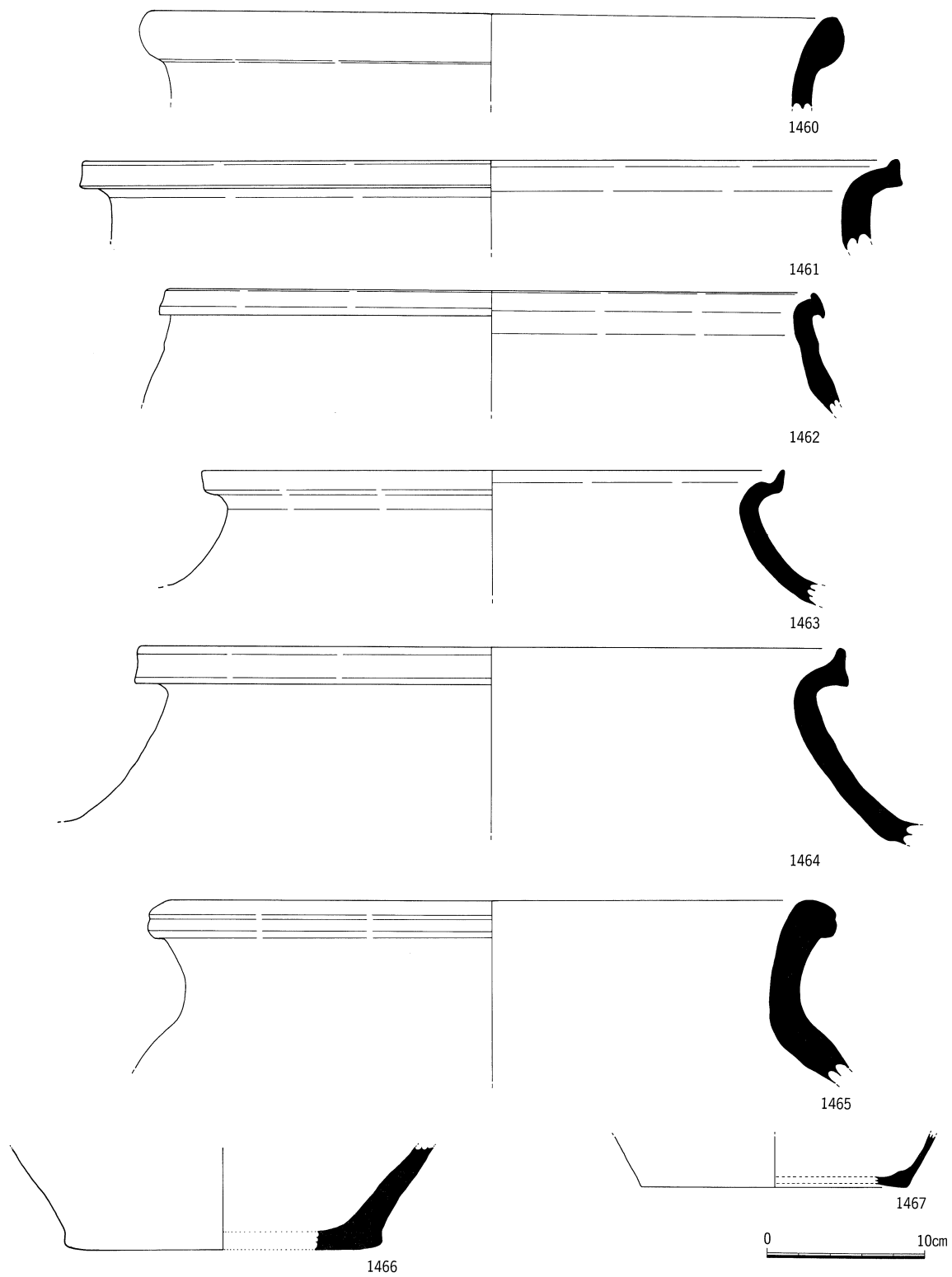
1460～1465は甕の口縁部の破片である。1460は備前焼で、口縁部の粘土を折り返して、玉縁状としてゐる。色調は褐灰色で、復元口径は43.5cmである。真壁備前焼編年のIV期に属する。1461～1464は常滑焼と見られる。1461・1463は口縁部を外側に屈曲させ、端部を上方に拡張し、「L」字状の受け口を呈す

る。口縁の縁帯幅は1463に比して1461がやや大きい。中野編年の5型式に当てはまる。1462は口縁端部が上下に拡張され、断面が「N」字状である。同編年の6 a型式と思われる。1164は縁帯幅がやや大きく、口縁端部が上下に拡張されるが、特に上方への拡張が顕著で、断面が「T」字状を呈する。同編年の6 b型式ではないかと思われる。1465は口縁部がやや外反し、玉縁状の口縁をなすが、端面に凹線が入る。胎土はやや粗く、色調は灰白色である。産地は不明。1466・1467は甕の底部である。1466は濃緑色の自然釉がかかり、常滑焼と見られる。1467は平底で、全体に器壁を薄く仕上げる。体部は無釉で、色調は淡黄灰色を呈する。

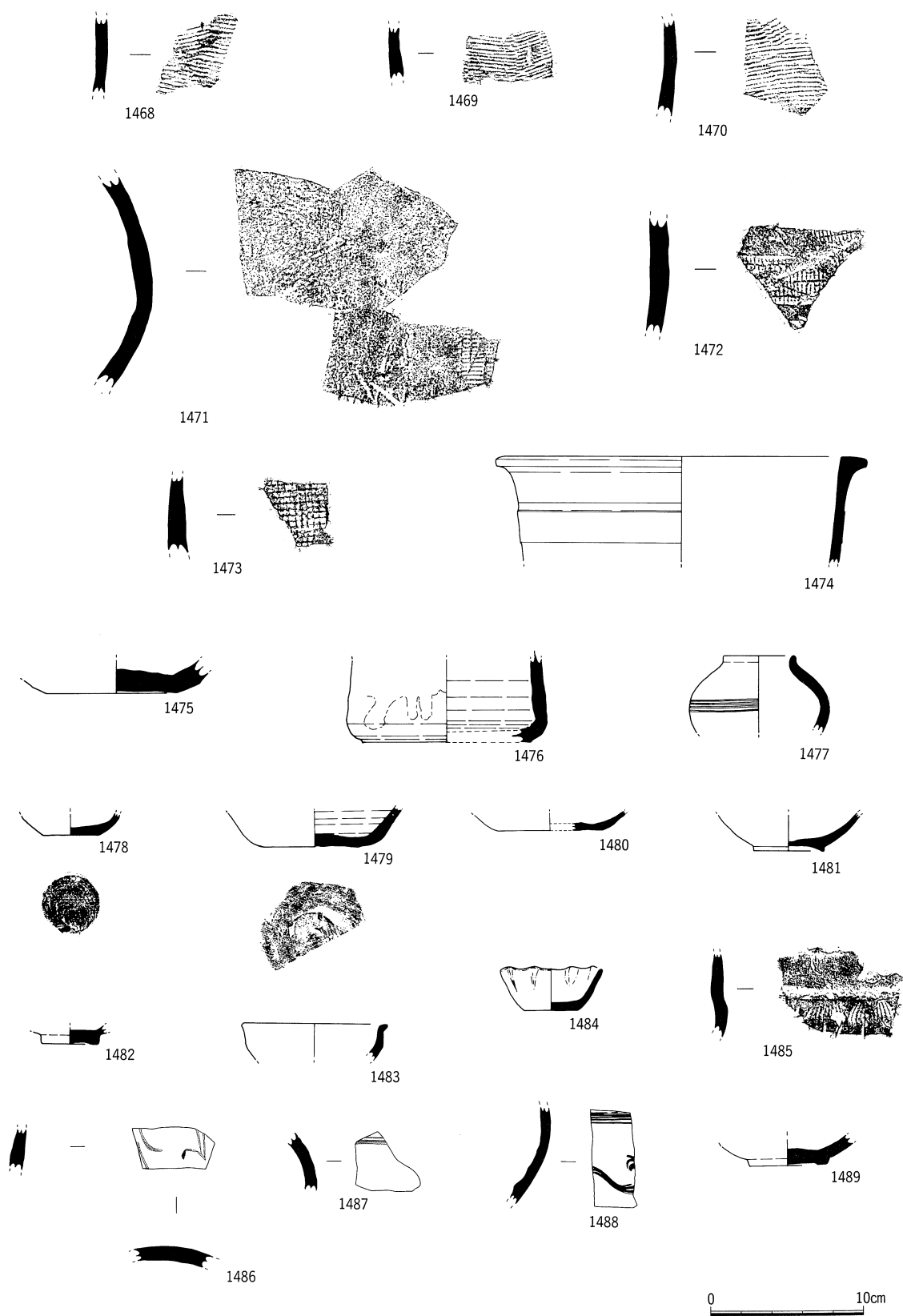
1468～1473は甕の体部片である。1468～1470は同質の胎土に属するもので、いずれも体部外面に平行タタキ目が施される。胎土はやや軟質で、東播系の甕と見られる。1471.1472は体部外面に格子状の押印文が施されるもので、常滑焼である。1473は体部外面に格子状のタタキ目が施され、胎土はやや軟質で、色調は灰白色で、亀山焼の可能性もある。1474は須恵質の甕と見られる。体部は直立し、口縁部は逆「L」字状で、端部は丸くおさめられる。口縁部上面にはロクロによるヘラケズリで調整し、体部内面の上位にはロクロナデが施される。胎土は精良で、色調は灰色を呈する。産地は不明。

1475は壺の底部である。口径8.5cmを測り、底部外面に糸切り痕を留める。底部と体部の境の外面には横ナデが施される。色調は茶褐色で、備前焼と思われる。1476は底部で、削り出しの低い高台を有す。体部は底部よりほぼ直立して立ち上がるが、体部中位に従いやや口径を狭くしている。素地は灰白色で、全体に淡緑色の釉が施されている。形態・特徴から瀬戸焼の筒形容器と思われる。1477は瀬戸焼の小壺である。低い口頸部を作り出し、復元口径4.5cmを測る。体部中位付近に4状の櫛目沈線をめぐらし、体部外面に淡緑色の釉が施されている。13～14世紀代に属するものである。

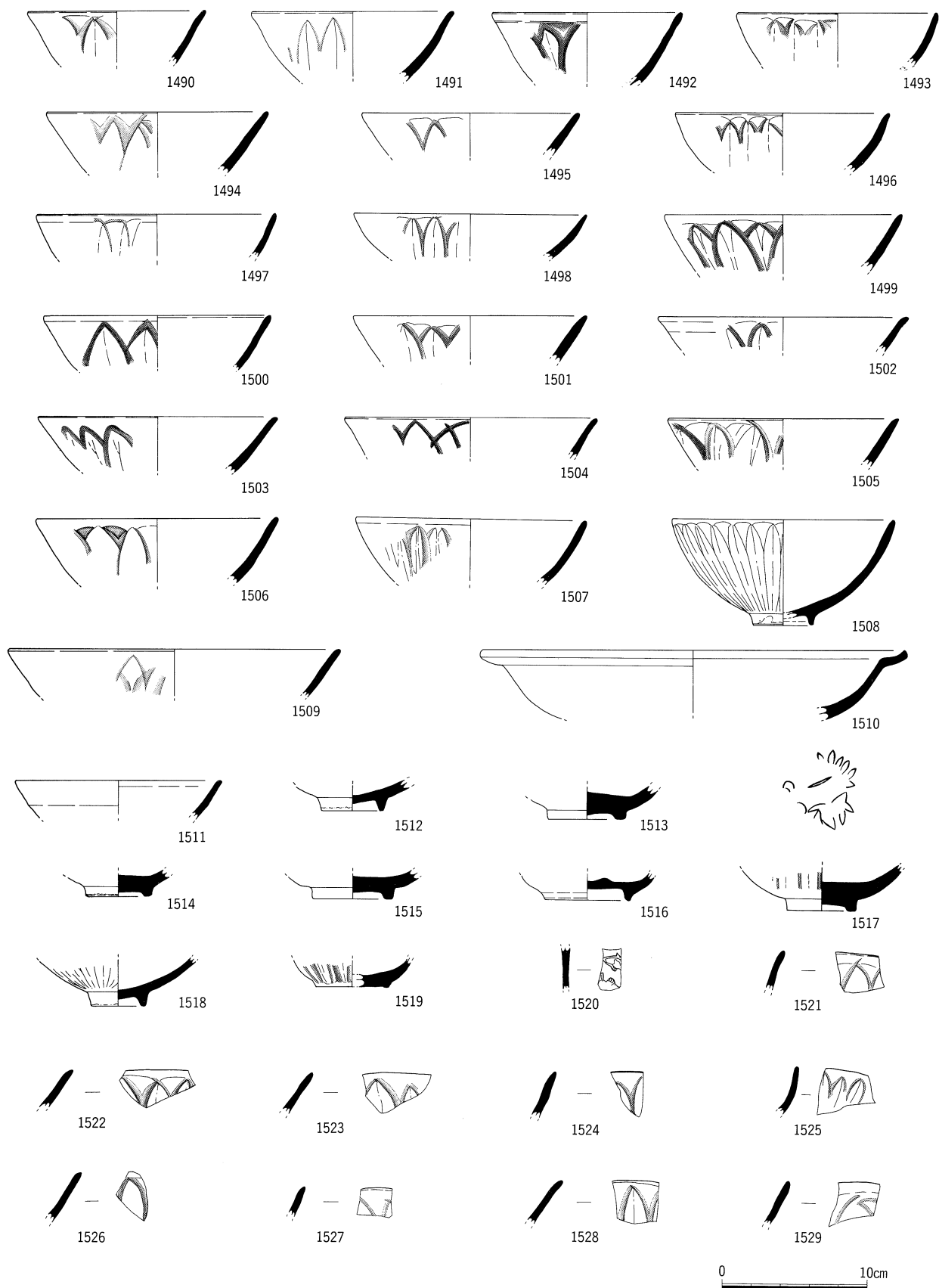
1478は小皿の底部で、外面に回転糸切り痕を留める。底部より内彎して立ち上がるが、底部内面には白色の自然釉がごまふり状にかかっている。瀬戸焼ではないかと思われる。1479は須恵質の杯である。底部外面に回転ヘラ切り痕を留め、底部・体部内面にロクロナデを施す。1480は椀底部である。外面に回転糸切り痕を留め、全体に器壁を薄く仕上げる。色調は灰白色で、備前焼の椀と思われる。1481は椀底部で、断面三角形の削り出し高台を有す。底部から内彎して立ち上がり、体部外面に横ナデが施される。体部内面には淡緑色の釉がごまふり状にかかっている。胎土は精良で、色調は灰色を呈する。瀬戸焼の椀と見られる。1482・1483は瀬戸焼の天目茶碗である。1482は底部であるが、高さ0.6mmの削り出し高台を有し、内面には黒褐色の釉がかかる。1483は口縁部で、端部が外反する。釉調は茶褐色で、時代が下がるものである。1484は瀬戸焼の輪花入子である。口縁部を内方に折り曲げて8弁の輪花としている。色調は灰白色で、全体を薄手につくる。復元口径6.5cm、器高4.0cm、復元底径2.85cmを測る。13世紀代に属するものである。1485は香炉の破片である。灰色の素地に鉄釉を施し、腰の部分に印花文を押す。瀬戸焼の鉄釉香炉で、形状から13～14世紀代に比定される。1486は体部片で、外面に唐草文を描いている。灰釉を施し、色調は淡緑色を呈する。瀬戸焼の壺もしくは瓶子と見られる。1487・1488は体部片で、胎土は同質である。1487は体部が内彎し、外面に2条の櫛目沈線が施される。1488は体部外面に櫛目沈線、唐草文が施される。ともに全体に薄い施釉で、色調はやや青味を帯びた灰白色である。器種は不明であるが、瀬戸焼ではないかと思われる。1489は底部で、断面方形の低い高台を有し、内面に淡緑色の灰釉を施す。瀬戸焼の椀と思われる。



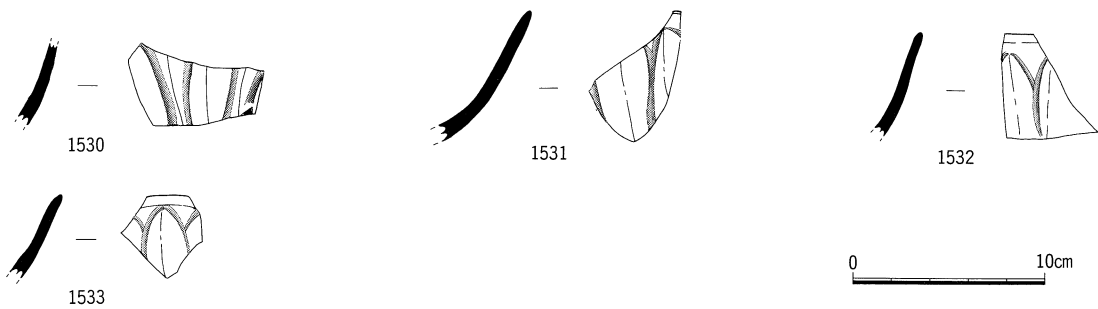
第237图 包含層出土遺物実測図 (13)



第238图 包含層出土遺物実測图 (14)



第239图 包含層出土遺物実測図 (15)



第240図 包含層出土遺物実測図 (16)

輸入陶磁器 (第239～241図)

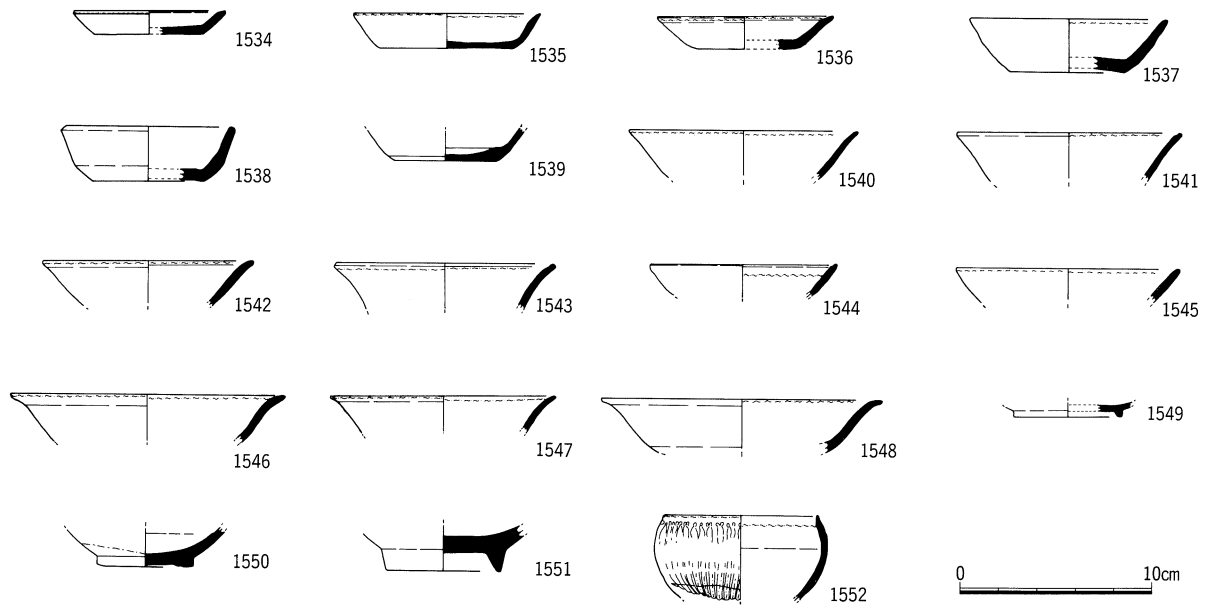
青磁 (第239・240図)

1490～1509・1511～1518・1521～1533は青磁碗である。いずれも龍泉窯系青磁碗で、1490～1493・1496～1503・1505・1507～1509・1517・1518・1522・1523・1525・1528・1530～1533は体部外面に幅広い鎬蓮弁文を有するもので、横田・森田分類案の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5 bに属する。1494・1495・1504・1506・1521・1526・1527・1529は鎬のないもので、同分類案のⅠ－5 aに相当する。1507・1508は体部外面に細長い鎬蓮弁文を削り出し、厚めの釉を施しているが、1508は高台先端部を除いて全面に施釉される。ともに同分類案のⅢ－2に属する。1510は盤と見られ、口縁部を「く」の字状に屈曲させ、端部を上方につまみ上げる。体部内外面は無文で、全体に淡緑色の厚めの釉を施している。1511は無文の青磁碗で、同分類案のⅢ－1と思われる。1512～1519は底部であるが、1513～1515・1517は底部外面が無釉で、断面方形の高台を有し、全体に分厚い底部となっている。1513は幅広い鎬蓮弁文を削り出し、1517は見込み部に花文様をスタンプする。1513は同分類案のⅠ－5 b、1514、1515はⅠ－5、1513～1515はⅠ－5 cに比定される。1512・1518は高台先端部以外全面施釉されるもので、ともに底部の厚さは薄く、高台を尖り気味につくり、高台径は3.7、4.2cmと小さい。同分類案のⅢ類に比定されるが、1518は体部外面に鎬細蓮弁文を有し、Ⅲ－2に当てはまる。1516は断面三角形の高台を削りだし、見込みに魚文を貼付したもので、同分類案杯Ⅲ－4 bに属すると思われる。1520は内面見込みに魚文がスタンプされるもので、器種は杯ではないかと思われる。

1519は青白磁の香炉と見られる。断面方形の低い高台を削り出し、体部外面に細蓮弁文を有す。底部外面は無釉である。

白磁 (第241図)

1534～1548は白磁皿である。1539の口縁部は不明であるが、他のすべては口縁端部の釉が搔き取られるいわゆる「口禿」の白磁である。形態はいずれも体部・口縁部がほぼ直線的に外上方に立ち上がるもので、横田・森田分類案の白磁皿Ⅸ類に属する。1534～1536は全面施釉され、口縁端部をやや尖り気味に仕上げるもので、同分類案のⅨ－1 aに比定される。1540～1543、1547は口縁端部がわずかに外反するもので、Ⅸ－1 cと思われる。1546・1548は口縁部が大きく外反するもので、Ⅸ－1 dに当てはまる。



第241図 包含層出土遺物実測図 (17)

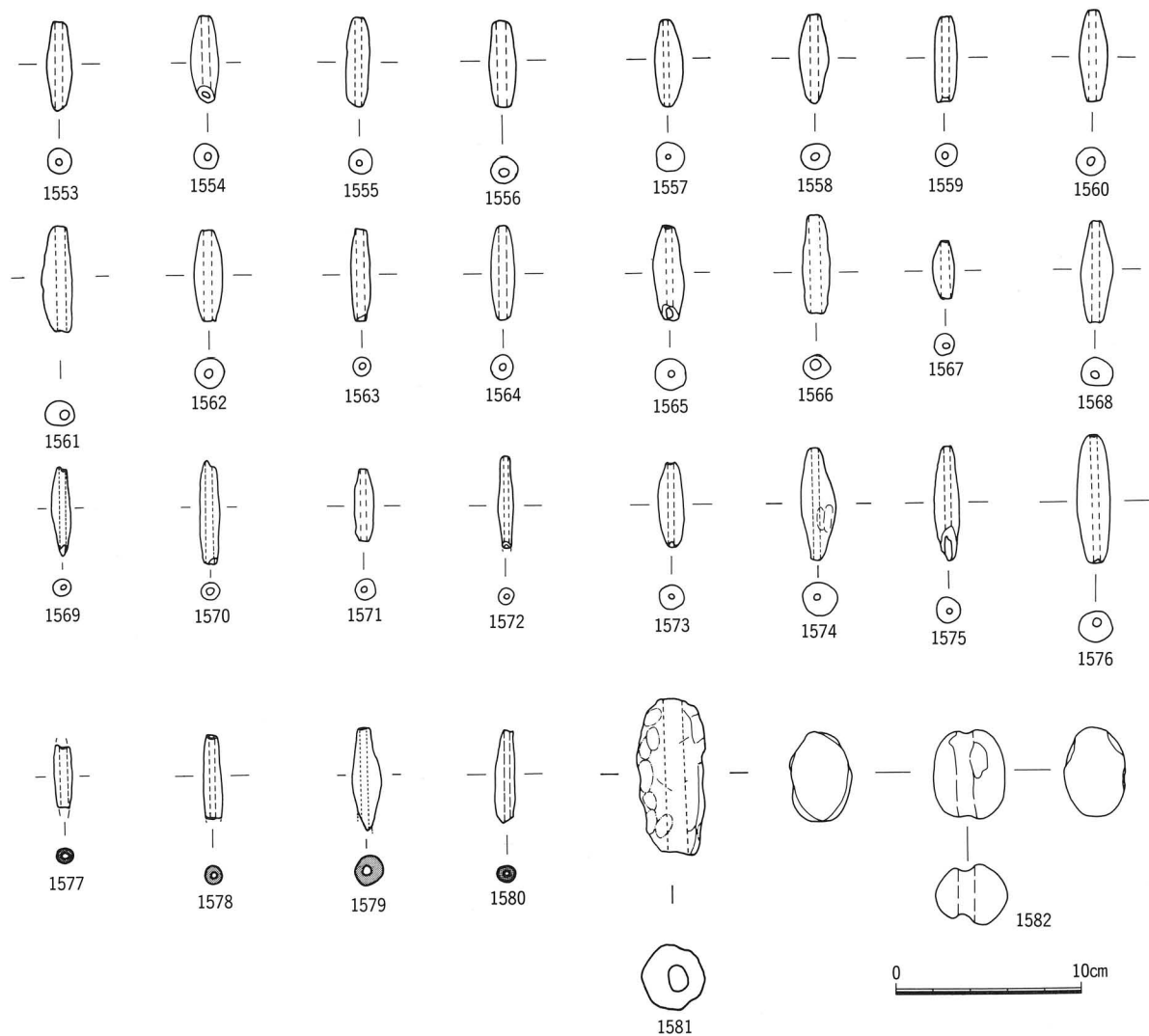
1539の底部は全面に施釉されるが、1537・1538は体部外面下位から底部は施釉されておらず、その特色からⅨ-2に分類される。

1549～1551は白磁碗の底部である。1550は断面逆台形状の低い高台を削り出し、体部外面下位から底部外面にかけて施釉されていない。横田・森田分類案の白磁碗Ⅸ-2に属すると思われる。1551は断面三角形に近い細高い高台を有するもので、高台部ならびに外底は施釉されていない。同分類案のⅤ類に比定される。

1552は白磁の合子である。口縁端部は釉が掻き取られる「口禿」で、体部外面には縦位の沈線を巡らせる。体部外面下位は施釉されていない。

土製品 (第242図)

1553～1582は土錘である。土錘の出土は多量に及ぶが、その一部を掲載した。1553～1580は管状土錘で、1553～1576は土師質で、1577～1580は瓦質の土錘である。長さ4.7～6.9cm、胴径0.8～1.9cm、孔の径0.5cm以下である。1581・1582はともに土師質の大型の土錘である。1581は管状土錘で、長さ8.4cm、胴径3.4cm、孔の径1.0cmを測り、全体にユビオサエの跡が残る。1582は有溝土錘で、長さ4.8cm、胴径3.9cmを測る。全体にナデが施されている。



第242図 包含層出土遺物実測図 (18)

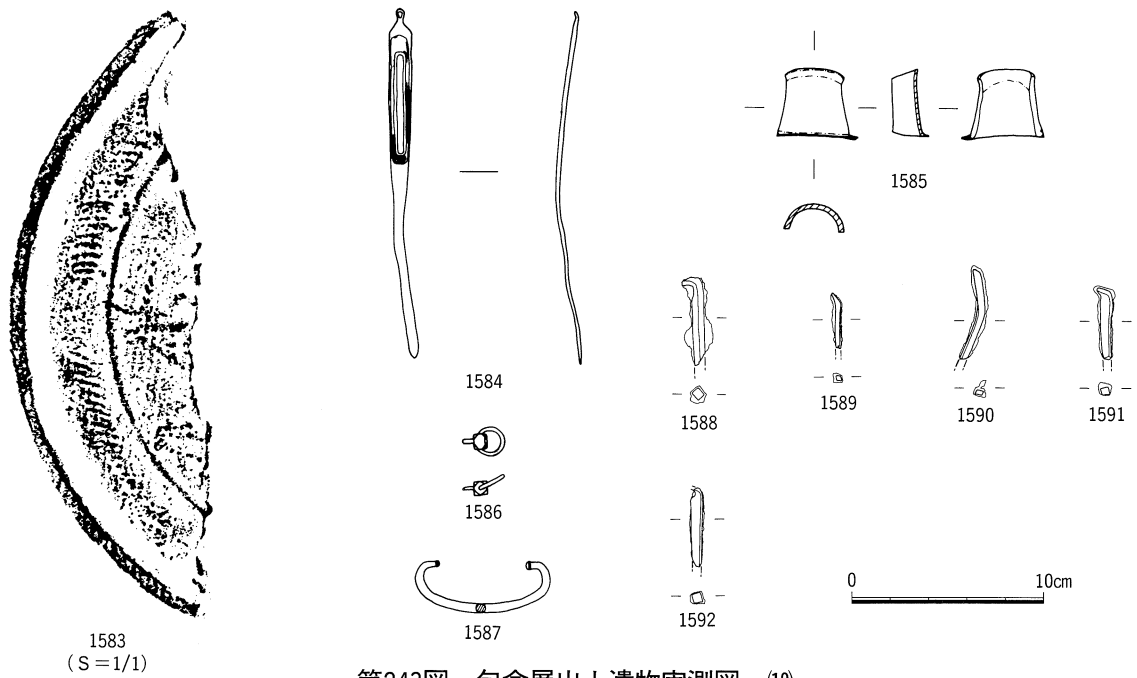
金属製品

銅製品・鉄製品 (第243図)

1583は和鏡で、復元口径9.1cmを測る。1584は青銅製の筭で、全長18.1cmを測る。1585は円筒を半裁した形状の銅製品で、長さ3.4cm、内径2.7~3.2cmを測る。外面に煤が付着するが、用途は不明。1586は青銅製の飾り金具で、全体に鍍金が施される。1587は黄銅製(真鍮)の把手である。1588~1592は鉄釘である。

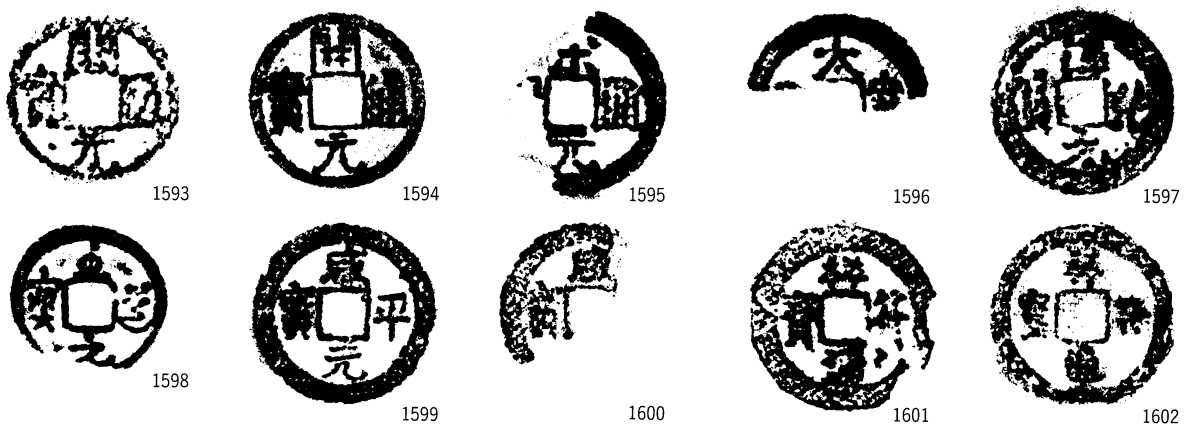
銅銭 (第244・245図)

1593以下は銅銭で、包含層から合計42枚出土した。1593・1594は「開元通宝」(唐・初鑄621年)であるが、1595~1630の36枚はいずれも北宋銭である。北宋銭は包含層出土枚数の約85%を占める。1631は「洪武通宝」(明・初鑄1368年)で、明銭の出土はこの1枚のみである。1632~1634は鏽の付着等によっ



第243図 包含層出土遺物実測図 (19)

て銭種は不明である。1598 (「至道元宝」).1632 (銭種不明) は口径が小さく、やや粗悪であることから模鑄銭の可能性はある。



(S=1/1)

第244図 包含層出土遺物実測図 (20)

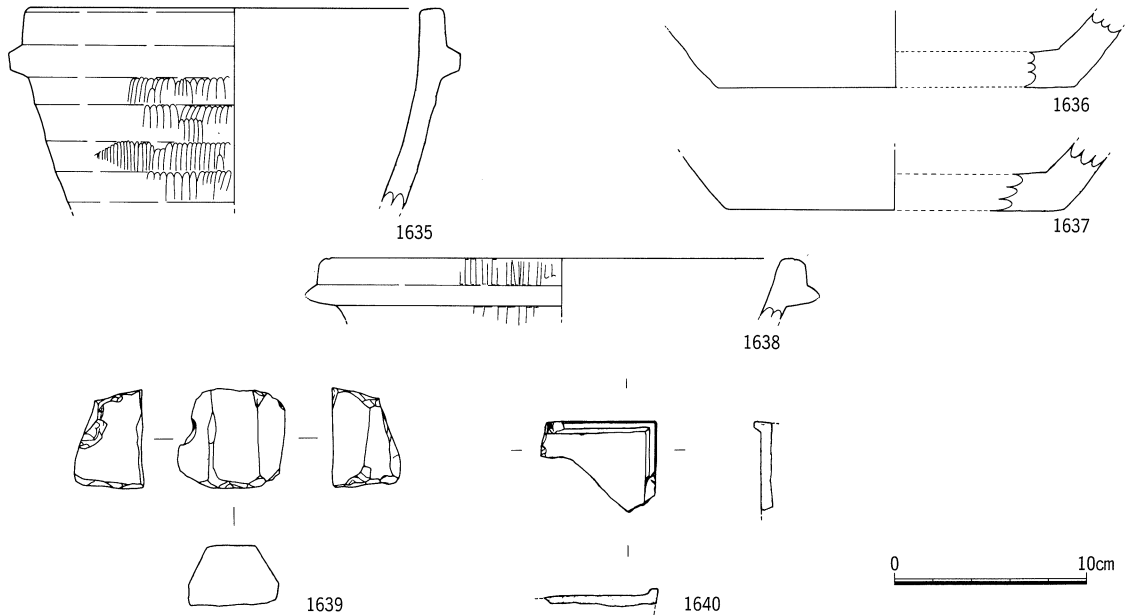
番 号	錢 種 名	王朝名	初 鑄 年	遺 構 出 土	包 含 層 出 土	計
1	開 元 通 宝	唐	621	0	2	2
2	宋 通 元 宝	宋	960	0	1	1
3	太 平 通 宝	宋	976	0	1	1
4	至 道 元 宝	宋	995	0	2	2
5	咸 平 元 宝	宋	998	0	2	2
6	景 德 元 宝	宋	1004	1	2	3
7	祥 符 通 宝	宋	1009	0	3	3
8	祥 符 元 宝	宋	1009	0	1	1
9	天 禧 通 宝	宋	1017	0	1	1
10	天 聖 元 宝	宋	1023	0	1	1
11	景 祐 元 宝	宋	1034	2	0	2
12	皇 宋 通 宝	宋	1038	2	3	5
13	嘉 祐 元 宝	宋	1056	0	4	4
14	熙 寧 元 宝	宋	1068	3	3	6
15	元 豐 通 宝	宋	1078	3	4	7
16	元 祐 通 宝	宋	1086	1	1	2
17	紹 聖 元 宝	宋	1094	1	3	4
18	元 符 通 宝	宋	1098	1	0	1
19	聖 宋 元 宝	宋	1101	0	2	2
20	政 和 通 宝	宋	1111	1	2	3
21	洪 武 通 宝	明	1368	0	1	1
	不 明			0	3	3
	計			15	42	57

第 1 表 出土銅錢一覽表

※ 数字は枚数を示す

石製品 (第246図)

1635～1638は滑石製の石鍋である。1635は体部がやや内彎し、口縁部は直立する。口縁部直下に断面台形の鏝が削り出される。木戸分類のⅢ－bと思われる⁽¹⁾。1638は口縁部直下に鏝が削り出されるが、鏝は小さく、断面不等辺台形状である。同分類のⅢ－cに当てはまる。1636・1637は底部である。1639は砥石で、断面形は台形状である。1640は硯の破片である。形状は方形状と見られる。



第246図 包含層出土遺物実測図 (2)

注

- (1) 立石堅志「奈良火鉢」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社 1995
- (2) 山本悦世「吉備系土師器碗の成立と展開」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 鹿田遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993
- (3) 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入陶磁器について一型式分類と編年を中心として一」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館 1978
- (4) 尾上 実「南河内の瓦器碗」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』1983
森島康雄「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会 1992
尾上 実・森島康雄・近江俊秀「瓦器碗」『概説中世の土器・陶磁器』(注1)
- (5) 森田 稔「中世須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』(注1)
- (6) 中野晴久「中世陶器 常滑・渥美」『概説中世の土器・陶磁器』(注1)
中野晴久「生産地における編年について」永原慶二編『常滑焼と中世社会』小学館 1995
- (7) 菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』19集 1989
- (8) 真壁忠彦『備前焼』ニュー・サイエンス社 1991
- (9) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2号 日本貿易陶磁研究会 1982

(10) 松木武彦「鹿田遺跡における中世土師質小皿の検討」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第 6 冊 鹿田遺跡 3』(注 2)

(11) 木戸雅寿「石鍋」『概説中世の土器・陶磁器』(注 1)

3 まとめ

ここでは、3 次にあたる調査成果（第 3 次～第 5 次）にもとづいて、本遺跡に見られる集落規模・景観・変遷ならびに出土遺物の特色を述べて、本報告のまとめとしたい。なお、対象は本遺跡の主体をなす 13～14 世紀代の遺構ならびに出土遺物を中心とする。

(1) 集落について

集落規模

3～5 次調査で掘立柱建物跡、建物を区画する溝群・土坑・井戸等が多数検出されて、1・2 次調査で確認されていた集落が東側に大きく広がっていることが明らかとなった。1・2 次調査分を含めて全 5 次にあたるこれまでの調査で判明した集落の規模は、東西約 400m 以上に及ぶ（南北は不明）。これは従来、本県で発掘調査された中世集落遺跡の中では最も規模の大きいものである。このことから、本遺跡で確認された集落が当該期、当地域の拠点集落として存在していたものと捉えられる。

集落景観

集落の西端部及び東端部が自然流路で隔絶されているところから、当集落は鮎喰川水系の河川に囲まれた「中州」状に立地したものとと思われる。集落内部は、大小の溝で区画された屋敷地が連続したかたちで集村化した景観を示している。集落内の遺構密度には差異が認められ、特に今回の調査では、調査地中央部やや西側で検出した溝 19 (SD3019) 以西において建物・土坑等が密に分布している。このことから調査地西端部に位置する溝 5 (SD3005) から SD3019 の区域が集落内における中心部を形成していたものと考えられる。

集落内の建物規模は、3 次調査で確認した 4 間×2 間の建物 (SA3007) を最大とするが、他は 1 間×1 間～3 間×2 間の比較的小規模なものである。また大小の溝の多くは東西方向あるいは南北方向で、建物とほぼ平行関係にあり、区画溝としての性格が指摘できる。ただ、SD3019 に関しては、規模が相当大きく、集落内に開削した水路としての機能を果たしていたと考えられる。さらに土坑の内、埋土から多量の鉄滓が出土するものも多くあり、集落内における鍛冶生産を示唆するものがある。

中島田遺跡に見られる集落は、出土遺物の検討から 13 世紀後半～14 世紀前半頃に展開するが、このような集落が標高約 2.0m の吉野川下流域の沖積低地に営まれたことは、当該期に至って大河川下流域が積極的に開発・利用されたことを示すものである。近年の発掘調査により大河川下流域に形成された中世集落の事例が全国的に報告されているが⁽¹⁾、本遺跡もその 1 つに数えられ、大河川下流域に立地した中世低地集落の実態を研究する上で、貴重な資料を提供する。

集落の変遷

4・5 次調査で 15～16 世紀代（室町時代）に属する出土遺物・遺構が見られたが、遺物の出土量はごくわずかであり、また遺構も溝を中心とするもので、建物等の遺構は検出されなかった。このことから、13 世紀後半頃から形成された集落は、14 世紀半ば以降、次第に廃絶していったものと思われる。従って、当集落の存続期間は 13

世紀後半～14世紀半ば頃までの比較的短い期間であったと捉えられる。

集落廃絶の背景には、当集落が大河川下流域の低地に立地していたこと深く関わっていたものと考えられ、立地上の不安定な要因によるところが大きかったと推測される。

(2) 出土遺物について

出土遺物の器種構成は、『報告書Ⅰ』（第Ⅲ篇第1章）に整理・報告された内容とほぼ同じ状況を示すため、ここでは全体の特色を述べるに留めて、出土遺物から見た本遺跡をめぐる流通の様相を遺跡の立地条件と関わらせて若干述べてみたい。

出土遺物の特色

本遺跡から出土した遺物は、土師質土器をはじめ瓦器・瓦質土器、国内産陶器、輸入陶磁器、土製品、金属製品、石製品、木製品など多種多様なものが含まれるが、それらは中世の日常雑器類としての性格をもつ。そして、出土遺物を産地別の観点から見てみると、本遺跡の場合、他地域産の製品が比較的高い比重を占めていることが大きな特色をなす。例示すると、遺物の中で最も多量に出土した土師質土器の中では、在地産と見られる赤褐色系で、底部切り離し技法が回転糸切りによる（一部回転ヘラ切り）杯・皿等が多く含まれるが、それらとともに吉備系土師器碗・同土師質杯・皿（小皿）が相当量出土しており、その占める割合が土師質土器全体の中でもかなり高いものとなっている。また、瓦器碗・瓦質土器においては和泉型瓦器碗、畿内産鍋・羽釜等が多く搬入され、陶器類においては東播系・常滑・瀬戸・備前各窯の製品が見られる。

このような器種構成上の特色は、当該期の吉野川下流域における中世集落の土器様相を流通面から研究していく上で一つの指標となるものと思われ、貴重な資料を提供する。

次に、今回の調査で木製品が比較的豊富に出土しているので、少し触れておきたい。木製品は、すべて溝19（SD3019）・溝20（SD3020）からの出土で、内容から分類すると①日常具：曲物・漆塗碗②工具類：ヘラ・ハケ③遊具：将棋の駒④呪術・信仰具：呪符木筒・刀形・串状木製品・卒塔婆⑤その他：硯の蓋となる。このうち特に注目されるのは、将棋の駒と呪術資料である。将棋の駒の出土例は、福井県一乗谷朝倉氏遺跡・鎌倉鶴岡八幡宮境内など城館跡・都市遺跡で出土しているが⁽²⁾、本遺跡に見られるように集落跡からの出土例は少ない。また呪符木筒・刀形・串状木製品は、当時の民衆の信仰を具体的に物語るもので、民衆の精神生活を研究する上で重要な資料となる。

出土遺物から見た流通の様相

前述のように本遺跡の出土遺物には輸入陶磁器をはじめ他地域産の土器・陶器類が多く含まれていることから、各地の生産地からそれらが当該地域に搬入されたことが知られる。このことは生産地と消費地である当地域間の商品流通が極めて盛んであったことをよく示している。

近年、中世遺跡の発掘による豊富な出土遺物を通して、土器・陶磁器類の地域流通が広域的・重層的に展開し、列島内外における隔地間交易が多様なかたちで行われ、列島各地間で商品流通が広範に展開していたことが明らかにされている⁽³⁾。それは中世における生産力が高まっていく中で、社会的分業が進展し、それに伴い商品生産・流通が当時の社会に広く展開して、商品経済が著しく発展していたことを示すものである。各地域の水陸交通の要衝地に定期市、さらには「市町」が広範に成立・発展してくるのもこれと軌を一にしている。

時代は少し下るが、名西郡神山町阿野所在の勸善寺所蔵大般若経奥書に「嘉慶貳（1389年）二月七日、於阿州

名東庄倉本下市眞佛寺書写了」との記載があり⁽⁴⁾、これによって14世紀後半、本遺跡に近接する現在の徳島市蔵本町付近に「倉本下市」が立っていたことが知られる。中島田遺跡が「倉本下市」近辺に位置していることは、本遺跡の周辺地域が交通上の要地であったことを示唆するものであり、それは立地から見て、吉野川水系に連なる鮎喰川の水運の要衝地であったことを示すものに他ならない⁽⁵⁾。このような立地状況から、水運を利用した他地域産の製品が当集落に豊富にもたらされたものと考えられるのである。

そして、豊富な土器・陶磁器等の搬入、多量の銅銭出土など出土遺物上の特色ならびに集落の景観・形態から見て、当集落は「市町」の様相を呈していたものと推測される。おそらく、中島田遺跡の集落は吉野川下流域(鮎喰川下流域)の物資の集散地としての性格をもつ流通上の拠点であったと思われるのである。

注

- (1) 石尾和仁「中世低地集落の形成と展開」『ヒストリア』138号 1993年
佐久間貴士「発掘された中世の村と町」『岩波講座 日本通史 中世3』岩波書店 1994年
- (2) 水野和雄「将棋の流行」河原純之編『古代史復元10 古代から中世へ』講談社 1990年
- (3) 網野善彦他監修『よみがえる中世1～8』所収関連論文 平凡社 1988～1994年
- (4) 小杉楹邨編『阿波国徴古雑抄』所収、日本歴史地理学会発行 1913年(臨川書店復刻 1974年)
- (5) 福家清司「中島田遺跡にみる流通の発展」『図説 徳島県の歴史』河出書房新社 1994年

IV 考 察



考察 1

中世・吉野川下流域における土師質土器碗の流通

—— 吉備系土師器碗に注目して ——

1 はじめに

吉野川下流域に立地する中島田遺跡の溝・土坑などから土師質土器碗がまとまって出土している。当遺跡出土の碗形態は、土師質土器碗・瓦器碗・国内産陶器碗・輸入陶磁器碗に分類されるが、このうち最も多く出土するのは土師質の碗である。これらの碗は、灰白色あるいは淡黄褐色系の色調を呈し、精良な胎土をもつ、いわゆる「吉備系土師器碗」と称されるもので、形態・法量から14世紀前半に位置づけられる。

従来「早島式土器」と呼称されていた吉備系土師器碗は、岡山県および広島県東部（備前・備中・備後）の中部瀬戸内北岸部を中心に分布し、その出現・消滅時期は畿内産の瓦器碗とほぼ同時期とされる。近年の吉備系土師器碗についての研究は、鈴木康之⁽¹⁾・武田恭彰⁽²⁾・橋本久和⁽³⁾・山本悦世⁽⁴⁾各氏によって、編年・製作技法・地域性さらに用途論など多角的に研究が進められ、同碗に関する研究は大きな深まりを見せている。特に、橋本氏による詳細な出土分布の検証、山本氏による岡山市鹿田遺跡出土の新たな資料に基づいた類型・編年研究、そして鈴木氏による「まじないの土器」としての用途論など、注目すべき成果が発表されている。

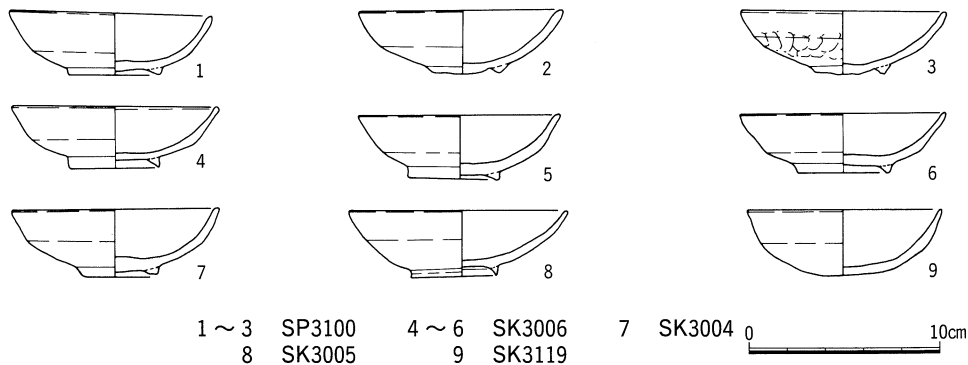
本稿では、これらの諸成果によりつつ、主に同碗の流通に関わる問題を当遺跡出土資料をもとに考えてみたい。このことは、当遺跡の性格ならびに吉野川下流域における中世集落の土器流通の様相を考察することにもつながると思われる。

2 中島田遺跡出土の吉備系土師器碗

第247図は、当遺跡出土の吉備系土師器碗で、いずれも遺構から出土したものである。同碗は、溝・土坑などから多量に出土しているが、ここでは法量の正確な数値を得るため完形品を抽出し、あわせて一括性の高いものを中心に取り上げた。以下、その形態・技法・法量を検討・整理してみたい。

1・2・3は建物を構成する柱穴（SP3100）出土の碗で、地鎮に伴う極めて一括性の高い資料である。1・3は口縁部がやや外反気味で、口縁部外面に強い横ナデが施され、体部との境に明瞭な稜がつく。また体部下位にはユビオサエの跡が見られる。1は断面逆三角形の高台が、3は逆台形状の高台が貼り付けられるが、3の高台径は極端に小さい。2は全体にややいびつな形態で、口縁部はわずかに内湾する。全体につくりが粗雑で、底部が尖り気味であるため安定さを欠く。底部には退化した高台が貼り付けられるが、つくりが極めて雑で、全周していない。

4・5・6はSK3006出土資料である。4・5は口縁部がやや外反するが、6はわずかに内湾する。いずれも口縁部外面に横ナデが施され、4・5は体部との境に明瞭な稜がつく。4は内面に横ナデが施され、板状工具の痕跡が見られる。高台は断面逆三角形であるが、4・6の高台はいびつなかたちとなっている。SK3004出土の7は他の碗に比べ体部の器壁が厚く、全体に粗雑なつくりで、退化した高台はいびつなかたちとなっている。SK3005出土の8は口縁部が内湾気味で、外面に横ナデが施されるが、体部



第247図 中島田遺跡出土吉備系土師器碗

との境の稜は明瞭でない。断面逆三角形の高台が貼り付けられる。9は高台の付かない丸底の碗である。口縁部はやや内湾気味で、口縁部外面に横ナデが施され、体部外面下位にユビオサエの跡が見られる。草戸千軒町遺跡では、無高台の土師質碗は高台付の碗Bと区別して碗Aとして分類されている⁽⁵⁾。色調は、3が淡黄褐色、9が黄褐色で、他は灰白色を呈する。また胎土は、砂粒を幾分含むが、おおむね精良で、全体に硬質感が保たれている⁽⁶⁾。

次に、法量について整理してみると、1～8の口径は8の11.3cmを最大値として10.4～11.3cm、器高については、3.2～3.5cmで、平均値は口径10.74cm、器高3.31cmとなる。なお、無高台の9は口径10.2～10.5cm、器高3.5cmを測る。このように第247図に掲載した当遺跡出土の吉備系土師器碗は、総じて口径・器高ともに狭小であると捉えられるが、これら数値を山本作成の吉備系土師器碗類型表に当てはめてみると、鹿田遺跡編年のⅢ-3期C 3類が口径10.7～11.6cm（平均値11.11cm）、器高3.0～3.5cm（同3.3cm）の範囲に設定されていることから⁽⁷⁾、中島田遺跡出土の同碗はほぼこれに相当すると言える。従って、当遺跡のこれらの碗は年代的には14世紀前半に比定され、吉備系土師器碗のほぼ終末段階のものと位置づけられる。

なお、当遺跡から出土する吉備系土師器碗の全体的な法量分布は第247図の資料のそれと近似した数値を示しており、時期的にはほぼ上記年代に収まると考えられる。

3 吉備系土師器碗の出土分布と流通

吉備系土師器碗の出土地については、山本悦世・橋本久和両氏の論稿に詳細に取り上げられているが⁽⁸⁾、それによると同碗は、岡山県および広島県東部（備前・備中・備後）の中部瀬戸内北岸部を中心に、東は淀川水系周辺地・京都・鎌倉、西は博多、さらに当遺跡を含む四国地方にその出土が見られ、出土分布はかなり広い範囲にわたっている。そこで、ここでは吉備系土師器碗の生産地およびその周辺地である吉備地域（備前・備中・備後）と生産地以外の地域に大別して出土分布の状況をまとめてみたい。また、同碗の出土する各遺跡には一定の立地上の特質が認められることから、出土地および出土分布から見た吉備系土師器碗の流通の様相についても併せて考察してみたい。

(1) 生産地およびその周辺（吉備地域）

吉備地域における吉備系土師器碗の出土分布は、前述のように山本・橋本両氏の論稿に詳しいが、代

表的な出土地として、備前では岡山市鹿田遺跡・百間川遺跡群（当麻・長谷各遺跡）・邑久町助三畑遺跡などが、また備中では総社市のこうもり塚古墳・下三輪遺跡・備中国府跡遺跡・清水角遺跡などが挙げられる。さらに備後では、福山市草戸千軒町遺跡・尾道市街地遺跡などが知られている。

出土分布は、橋本氏が指摘するように東は備前の吉井川流域から西は備後の芦田川流域にかけての主に瀬戸内海沿岸部に密に分布しているが⁽⁹⁾、特に、備前・備後地域では、河川下流域の沖積地での出土が顕著である。出土量は、各遺跡に差はあるものの一定量出土している。今後、この地域における出土例は、さらに増加するものと予測される。なお、現時点では吉備系土師器碗の焼成窯はまだ確認されるに至っていない。

(2) 生産地以外の出土分布

a 畿内地域

畿内では、淀川河口部に近い尼崎市辰巳橋遺跡をはじめ、淀川河床遺跡に属する守口市八雲遺跡・寝屋川市仁和寺遺跡・高槻市大塚遺跡・同柱本遺跡、さらに八幡市木津川河床遺跡などの淀川・木津川水系に立地する集落跡等から吉備系土師器碗が出土している⁽¹⁰⁾。また、京都市内では、平安京左京六条三坊や京都大学病院構内からも同碗が出土しており、ともに14世紀前半に属するものとされている⁽¹¹⁾。これらの遺跡は、いずれも京都と西日本各地を結ぶ国内流通上の大動脈である瀬戸内水運ルート上に立地しており、瀬戸内水運を通して同碗が搬入されたものと思われる。

b 四国地域

四国では、讃岐と阿波で吉備系土師器碗の出土が見られる。讃岐における同碗の出土遺跡については、片桐孝浩氏の研究に詳しい⁽¹²⁾。それによると、讃岐において同碗が出土している遺跡は、島嶼部も含めて12遺跡で確認されている。出土分布は、西讃地域から中讃地域にかけて特に集中しているが、時期的には、13世紀後半～14世紀前半の資料が中心である。

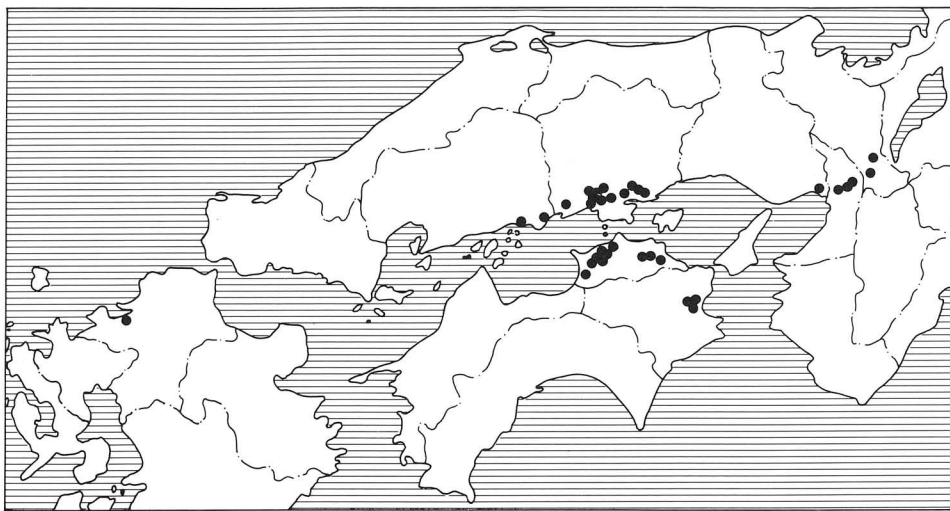
このうち、同碗がまとめて出土しているのは、坂出市下川津遺跡および豊中町延命遺跡である。下川津遺跡では、第4低地帯流路4・5・6などから出土しており、特に流路6からは多量に出土している⁽¹³⁾。これらの碗は、年代的に12～13世紀代に属するが、とりわけ12世紀後半～13世紀前半に集中している。また延命遺跡では、八反地地区SD47・SK18を中心に一定量出土しており⁽¹⁴⁾、それら資料は13世紀後半に位置づけられる。下川津遺跡は、丸亀平野東端部の大東川下流域の沖積地に立地しており、同川河口部を介して瀬戸内海に通じている。また延命遺跡は、三豊平野北西部に位置し、財田川下流域右岸の沖積地に立地している。

次に、阿波では、徳島市中島田遺跡・南島田遺跡・名東遺跡の3遺跡からそれぞれ出土している。中島田遺跡では前述したのように14世紀前半の碗が多量に見られる。南島田遺跡では、土坑・自然流路および包含層から比較的まとめて出土しており⁽¹⁵⁾、時期的には中島田遺跡の碗とほぼ同時期のものと思われる。また名東遺跡においては、井戸・柱穴から少量ではあるが、出土している⁽¹⁶⁾。名東遺跡の碗は、いずれも内面にミガキが施されず、高台がかなり退化していることから、やはり中島田遺跡の碗と同様、14世紀前半頃に位置づけられる。中島田・南島田・名東の3遺跡はいずれも鮎喰川下流域右岸の沖積地に立地し、南島田遺跡は中島田遺跡の西側に、また名東遺跡は、中島田遺跡の南西方向約2kmを隔てた所に位置している。

c その他の地域

上記以外の地域では、博多と鎌倉で出土している⁽¹⁷⁾。博多・鎌倉はともに中世を代表する都市であるが、橋本氏によると、吉備系土師器碗の出土量は極めて少なく、時期的には13～14世紀代に属するものと報告している⁽¹⁸⁾。このうち鎌倉出土の同碗については、河野眞知郎氏も検討を加えており、13世紀後葉～14世紀中葉の年代観が与えられている⁽¹⁹⁾。

以上、吉備系土師器碗の出土遺跡を吉備地域とそれ以外の地域に分けて述べてきた。そして、それら遺跡を地図中に示したものが第248図である。これには、吉備系土師器碗の出土遺跡がすべて網羅されているとはいえないが、これによって同碗の出土分布をおおよそ把握することができる。



第248図 吉備系土師器碗の出土分布

(3) 吉備系土師器碗の流通

吉備系土師器碗が最も集中して出土する地域は、生産地である吉備地域、わけでも備前・備中である。出土遺跡は多数に上り、分布密度もかなり高い。ただし、当該地域にあっても瀬戸内沿岸部に顕著であり、内陸部においては出土しておらず、ここに吉備系土師器碗の流通上の特質が認められる。

次に注目されるのは、淀川・木津川流域である。これについて、淀川・木津川河床の採集資料を整理・検討した中世土器研究会は、これら採集資料の中に13世紀代の吉備系土師器碗が多数含まれており、11～14世紀の碗形態のなかで、吉備系をはじめ防長系・讃岐系の土師器碗が全体の10%近くを占めていると報告している⁽²⁰⁾。しかしながら、同碗が他の畿内の一般的な遺跡からほとんど出土していないところから、橋本氏は淀川流域や京都周辺に同碗の分布が拡大することはないと指摘した上で、水上交通との関わりから別の諸物資に付属して吉備系土師器碗が当該地域に搬入されたと捉えている⁽²¹⁾。さらに同氏は、博多・鎌倉の場合においても同様な捉え方をしている。

ところで、讃岐・阿波の前記遺跡からは、吉備系土師器碗がまとまって出土しており、その点で淀川・木津川流域における出土状況とは異なった様相を示している。これについて橋本氏は、讃岐・阿波に搬入された吉備系土師器碗に商品としての性格を認め、同碗の出土する遺跡が物資の集散地としての性格をもつものであったと述べている⁽²²⁾。中島田遺跡をはじめ下川津・延命各遺跡の立地上の特質を考える

ならば、橋本氏の捉え方は首肯されよう。

以上のことから、吉備系土師器碗は比較的広い範囲の出土分布を示すとはいえ、商品としての流通範囲は、吉備地域を除くとかなり限定されており、しかもその流通に当たっては受容側の遺跡の特質（立地・性格など）に大きく規定されたものと捉えられる。この点で、西日本の各遺跡で出土する畿内産瓦器碗の流通形態とは異なっている。

4 吉野川下流域における吉備系土師器碗の流通



- 1 中島田遺跡
- 2 南島田遺跡
- 3 庄遺跡
- 4 名東遺跡
- 5 丈六寺境内遺跡
- 6 阿波国府跡
- 7 阿波国分尼寺跡
- 8 黒谷川宮ノ前遺跡
- 9 古城遺跡
- 10 大毛島第37区遺跡

第249図 吉野川下流域における畿内産(和泉型)瓦器碗の出土遺跡

阿波における吉備系土師器碗の出土遺跡は、現在のところ、吉野川下流域に位置する鮎喰川下流域右岸の中島田・南島田・名東3遺跡のみで、周辺の他の遺跡では出土していない。例えば、吉野川下流域左岸に位置する中世の大規模集落跡である板野町黒谷川宮ノ前遺跡は、吉備系土師器碗が生産された期間と年代的に重複するが、そこでは畿内産瓦器碗(和泉型)の出土が見られるものの、吉備系土師器碗の出土は見られない⁽²³⁾。従って、現時点では、吉備系土師器碗の阿波における流通はかなり狭い範囲となり、それは鮎喰川下

流域右岸の地域に限定されることになる。

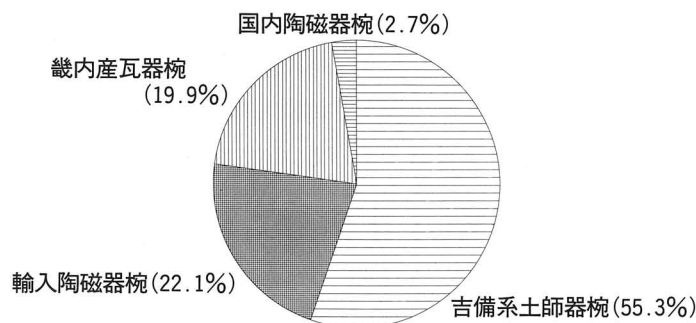
第249図は、吉野川下流域における畿内産(和泉型)瓦器碗の出土遺跡を示したものである⁽²⁴⁾。この地域における畿内産瓦器碗は、10遺跡で確認されており、当地域の中世集落跡ではかなり普遍的に出土する。このことから、その出現・消滅時期においてほぼ併行する畿内産瓦器碗と吉備系土師器碗の流通範囲は、大きく異なることが分かる。すなわち、畿内産瓦器碗が吉野川下流域の広い範囲で多く出土するのに対し、吉備系土師器碗の出土は、鮎喰川下流域右岸の地域に限られている。

そこで、中島田遺跡出土の碗形態を整理・分析して、鮎喰川下流域における吉備系土師器碗の流通の様相を考察してみたい。

当遺跡出土の碗形態は、土師質土器碗・畿内産瓦器碗・国内産陶器碗・輸入陶磁器碗に分類される。表2は、当遺跡の遺構・包含層から出土した碗類(総数331点)を上記分類に従って整理したものである⁽²⁵⁾。また、第250図は表2の数値をグラフ化したものである。なお、碗形態に含まれる木地・漆器碗については、少数出土しているが、性格上遺存しにくいことから、検討の対象から除外している。

	遺 構	包含層	小 計
吉備系土師器碗	104	79	183
輸入陶磁器碗	29	44	73
畿内産瓦器碗	42	24	66
国内産陶器碗	6	3	9
計	181	150	331

※ 数字は個体数を示す



第2表 中島田遺跡出土碗形態の分類(1)

第250図 中島田遺跡出土碗形態の分類 (2)

これによると、碗形態で最も高い比率を示すのは土師質の碗である。総数331点のうち183点を数え、全体の55.3%を占める。この土師質土器碗はすべて吉備系土師器碗である。これについて多いのは輸入陶磁器碗で、全体の22.1%を占める。特に龍泉窯系青磁碗が量的に圧倒しており、輸入陶磁器碗の91.8%がこれである。さらに畿内産瓦器碗も高い比率を示し、全体の19.9%を占める(個体数66点)。この瓦器碗はすべて和泉型瓦器碗で、そのほとんどは森島編年のⅣ-3・4(13世紀末葉~14世紀前半)に属するものである⁽²⁶⁾。このように当遺跡では、吉備系土師器碗・輸入陶磁器碗・畿内産瓦器碗が碗形態の97.3%を占める。それ以外では国内産陶器碗が見られるが(備前窯・瀬戸窯)、その比率はかなり低く、全体のわずか2.7%にすぎない。この陶器碗のうち備前窯の碗が量的には多く(5個体)、陶器碗の55.6%を占める。

以上のことから、当遺跡における碗形態は、吉備系土師器碗をはじめ輸入陶磁器碗・畿内産瓦器碗など、すべて搬入品によって構成されていることが理解できる。当遺跡を含む吉野川下流域における中世遺跡の土器様相として、搬入品の優位性が指摘されているが⁽²⁷⁾、このことは特に、碗形態において顕著である。そのなかでも、特に吉備系土師器碗の碗形態に占める比重は極めて高いものがあり、流通の観点からも注目される。

そこで、最後に当遺跡に多量の吉備系土師器碗が搬入された要因を前述した他地域の同碗出土遺跡の立地・性格等から考えてみたい。吉備系土師器碗が出土する遺跡は、出土遺跡を見る限り、福山市草戸千軒町遺跡・坂出市下川津遺跡などに見られるように河川下流域の沖積地に立地し、水運と結びついた物資流通の集散地としての性格をもつ遺跡に顕著である。この点からするならば、中島田遺跡もこのような特質を備えた遺跡と捉えられ、そのことが当遺跡に多量の吉備系土師器碗が搬入された大きな要因と考えられるのである。

5 おわりに

これまで、吉野川下流域に位置する中島田遺跡出土の吉備系土師器碗に注目して、同碗の全国的な出土分布ならびにその流通の様相を先行研究に依拠して検討してきた。現在のところ、吉備系土師器碗の出土する遺跡は、吉備地域および讃岐を除くとそう多くはなく、しかも、一定量まとまって出土する遺跡はかなり少ない。

そのようななかで、当遺跡は吉備系土師器碗が多量に出土する数少ない遺跡の1つであり、同碗の流通を考えていく上で、貴重な資料を提供する。吉備系土師器碗の出土遺跡は、河川下流域に立地し、水

運と結びついた物資流通の集散地としての遺跡に顕著に見られることは、中島田遺跡がそのような性格をもつ遺跡であることを示すことにほかならない。その意味で、当遺跡に見られる集落は、吉野川下流域において流通上大きな位置を占めていたものと思われ、吉備系土師器碗をはじめとする搬入品は、中世の当該地域における流通の様相を具体的に示す資料となる。

注

- (1) a 鈴木康之「土師質土器の用途に関する研究ノート(1)」『草戸千軒』No. 197 広島県草戸千軒町調査研究所 1989
- b 同「土師質土器の用途に関する研究ノート(2)」『草戸千軒』No. 198 広島県草戸千軒町調査研究所 1989
- c 同「土師質土器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 真陽社 1995
- (2) 武田恭彰「吉備系土師器碗の製作技法について」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』 中世土器研究会 1991
- (3) 橋本久和「瀬戸内の中世土器」同氏著『中世土器研究序論』 真陽社 1992
- (4) a 山本悦世「吉備南部地域における古代末～中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』 中世土器研究会 1992
- b 同「吉備系土師器碗の成立と展開」『岡山大学構内発掘調査報告 第6冊 鹿田遺跡3』 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993
- (5) 鈴木康之「土師質土器の変遷過程」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994
- (6) 碗の色調・胎土には若干の個体差が認められるが、現時点ではそれらを分類するまでにはいたらない。
- (7) 山本悦世「吉備南部地域における古代末～中世の土師器の展開」注(4) b
- (8) 注(3)(4)に同じ
- (9) 注(3)に同じ
- (10) 注(3)および橋本「河床遺跡と中世考古学」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』 中世土器研究会 1993
- (11) 注(3)に同じ
- (12) 片桐孝浩「讃岐における中世前半の供膳具(Ⅰ)」『研究紀要Ⅱ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1994
- (13) 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅶ 下川津遺跡』 香川県教育委員会 1990
- (14) 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第8冊 延命遺跡』 香川県教育委員会 1990
- (15) 『中島田遺跡・南島田遺跡』 徳島県教育委員会 1989
- (16) 『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要2』 徳島市教育委員会 1992
- (17) 大庭康時「日本各地から運ばれてきたやきもの」川添昭二編『よみがえる中世1—東アジアの国際都市博多』 平凡社 1988
- 河野眞知郎「鎌倉の搬入土器と在地土器」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』 中世土器研究会 1992
- (18) 注(3)に同じ
- (19) 注(17)に同じ
- (20) 河上誓作・中世土器研究会「淀川・木津川河床の採集資料」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』 中世土器研究会 1993
- (21) 注(3)・(10)に同じ

- (22) 注(3)に同じ
- (23) 『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 2』同センター 1991
- (24) 久保脇美朗「阿波における瓦器の出土状況」(第4回四国中近世土器研究会報告資料)1992および橋本久和「瓦器碗の分布」『中世土器研究序論』(注(3))より作成
- (25) 本報告書に掲載した各遺構・包含層出土の碗類を対象に数量分析している。従って、当遺跡出土の碗類すべてを網羅しているものでないが、碗形態の構成はこれによってほぼ把握されるものと考えられる。
- (26) 森島康雄「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会 1992
- (27) 勝浦康守「各地の土器様相—四国・阿波」『概説 中世の土器・陶磁器』注(1)c

(山下 知之)

徳島県の中世集落遺跡について

1 はじめに

筆者は、かつて中世の集落遺跡の変容について、中世前期は低湿地の開発がすすめられるのに対して、中世後期には洪積台地上の安定化が図られるという見通しを述べた。

すなわち、「中世低地集落の形成と展開」⁽¹⁾において、徳島県内の黒谷川宮ノ前遺跡や中島田遺跡をはじめとして、高知県田村遺跡・愛知県土田遺跡・滋賀県横江遺跡・山口県下右田遺跡などの発掘調査成果と文献史料の語る摂津国垂水荘の状況などをふまえて次の諸点を指摘した。

- ① 周溝をともなう連続した屋敷地は散村から集村へ移行した段階（鎌倉後期から南北朝期）の沖積低地における一般的な村落景観である。
- ② 集村化の原因の1つに牛馬耕の普及という農業形態の変化が考えられる。
- ③ 周溝は水利調節機能（保水・取水・悪水抜きなど）を果たしていた。

また、「中世低地集落の変容」⁽²⁾では、滋賀県妙楽寺遺跡・佐賀県本告牟田遺跡・大阪府平井遺跡・同じく日置荘遺跡・京都府鶏冠井遺跡などの発掘調査成果と九条家文書中の正和5（1316）年「日根野村絵図」の語る世界をふまえて次のように指摘した。

中世後期にかけて沖積低地に立地した集落が洪水等の被害を被りやすかったことや在地領主層による集住化政策、さらには洪積台地の開発技術の進展そのものもあり、洪積台地上の集落が安定化することなどを述べた。

その後、県内でも四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査が進み、中世集落遺跡の調査数も増加する傾向にある。それらの調査成果は上述の見通しを裏付ける結果を示している。未だ縦貫道建設に伴う発掘調査は継続中であり、近い将来資料の増加が期待されるが、とりあえず現在までのところ明らかにされている中世集落遺跡の概要を記しつつ、前出の拙稿で指摘した点を確認してみたい。

2 中世初期の集落遺跡

律令体制下においては、班田収授の関係から条里地割が広範に展開していたと考えられがちであるが、それは理念的なものであり、その内実は必ずしも国府を中心とする平野部の開発が進展していたことを示すものではない。

そもそも農業技術（稲作）そのものが未だ常湛法に依存する状況にあり、低湿地に耕地を求めなければならなかったために口分田授受のための条里地割が平野部に設定されざるを得なかったのであるが、722年の長屋王による百万町歩の開墾計画や723年の三世一身の法、743年の墾田永年私財法に端的にあらわれているように条里地割内の開発は進展していなかったのである。この点については、近年の考古学的な成果がそれを示している。

発掘調査の成果によれば、条里地割の内外を問わず畦畔によって表示される水田の起源は14世紀前後であるし⁽³⁾、奈良県箸尾遺跡の調査成果からは10世紀段階に耕地（条里制）は拡大したが、洪積層から

なる埋没丘陵等の微高地の開発は未だ行われていないことが確認できる⁽⁴⁾。また、平安後期の耕地の状況を検証された戸田芳実氏は、その中に「かたあらし」の多数存在することを確かめられるとともに、その意味するところとして荒野ではないものの連作の困難な地であることを示されている⁽⁵⁾。

以上のように、律令体制下においては、国府を中心とした平野部に理想的に条里地割が敷衍されていたとしても、その実態は未開墾地を多分に含みこんでいたのである。したがって、律令制の弛緩は口分田の荒廃によってもたらされたなどと捉えるのではなく、元来口分田の班田そのものが当初より困難であったと見るべきである。

事実、平安末期より立荘化が確かめられる荘園は、その多くが山間部に位置することを看過してはならないだろう。

現在の福井県小浜市の東部、北川沿いの谷あい部に立地していた東寺領太良荘も立荘以前の平安末期には、太良保として開発領主雲巖が相伝していたし、丹波国大山荘も承和12(835)年に太政官符により成立し、以後国衙の収公・相論を展開しながらも12世紀には東寺領荘園として安定化しているが、その耕地は一印谷をはじめとする谷あい部に展開していた。その他、備後国の山間部に広大な荘域をもつことになる太田荘は、建久元(1190)年段階で現作田六百十三町六段余をほこっているが、太田川沿いよりも各小谷々の谷あい部に耕地と住居が一括性をもって散在的に展開していたことが永原慶二氏によって示されている。すなわち、「太田川沿いの平野部は水害等によって不安定であるか水利条件のわるい未開地域であり、小さな谷々の湧水を利用したタナ田型水田の方が概して開田しやすくかつ安定した耕地であった」と述べられているのである⁽⁶⁾。

以上のようなことについて、永原慶二氏はすでに具体的に指摘されているので、やや長文になるが、引用しておきたい。

律令国家の集中的な権力によって、平野部の条里制地帯に井溝を開設し、もしくは溜池を掘って、人工的な灌漑を行ない、水田造成が大規模に行なわれた場合をのぞいては、そもそも、古代・中世の水田造成技術は必然的に、入来院に典型的にみられるような、山間の自然湧水の利用可能な傾斜地を、開田の対象としてえらんだであろう。とくに律令国家の衰退期に入って、一方では国家の力による池溝の保護が弱まり、他方では在地の土豪・農民の手による開発が、水田造成の主体となる段階においては、このような傾向はとくに一般化するであろう。われわれは、平安中期以降各地に成長する武士団の本拠地が、完全な平野部よりも山つきの山麓部分や、入来地方におけるサコとほぼ似た地形をもつ地帯に多いこと、また中世の荘園が概して山寄りの地帯に多いことを知っている(下略)⁽⁷⁾

このような永原氏の指摘の他、武蔵国多摩丘陵の谷戸を素材とした段木一行氏の研究によっても平安後期に在地領主層台頭の基盤が谷あい部にあったことが明らかにされている⁽⁸⁾。徳島県でも中世成立期に該当する遺跡はこのような谷あい部で検出されているので、それらを概観してみたい。

(1) 大谷遺跡(阿南市内原町)

阿南市内原町は、西の桑野方面にむかってなだらかに傾斜し、三方を山や丘陵で囲まれた谷地形をなしている(第251図)。この内原町大谷遺跡の井戸からは内外面とも密にヘラミガキが施され、高台も外側にしっかりと張り出した土師質の椀が出土しており(第252図)⁽⁹⁾、内口径に対する内器高が32であることとあわせ考えれば、平安時代半ば(10世紀代)頃のものと考えられる⁽¹⁰⁾。したがって、この椀の年

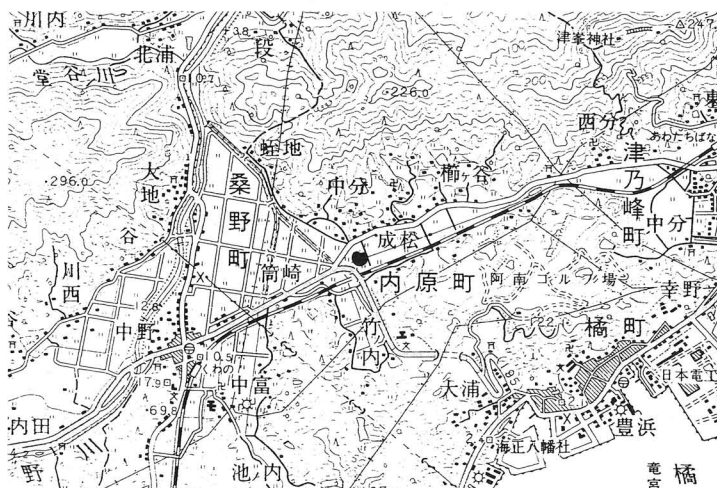
代観より、井戸が平安時代後期に埋められたものであると考えられる。

なお、この近傍では白鳳期の創建と見られる阿南市宝田町所在の立善寺跡出土の同範の瓦片や多量の須恵器片が出土した成松窯跡もある。

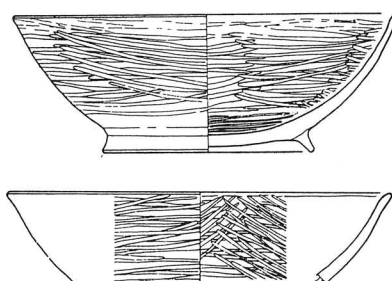
(2) 広田遺跡 (徳島市上八万町)

園瀬川右岸の小さな谷あい位置する広田遺跡は(第253図・写真2)、自然流路が検出されたのみであるが、その流路より出土した遺物は瓦器碗をはじめ、瓦質羽釜・青磁類など多数にのぼる⁽¹¹⁾。それらの年代観は法量を縮小化させていきつつある瓦器碗をはじめ瓦質羽釜など14世紀に下るものもあるが、中には龍泉窯系青磁碗I-1類(無文)とも見られる碗の底部も出土しており、12世紀代にさかのぼる遺物も含まれると考えられる。なお、聖宋元寶(初鑄年1101年)も出土している。

県内では谷あい部の調査事例に乏しく、本節では2遺跡の紹介にとどまらざるを得ないが、基本的には中世初期の迫・谷戸の開発の可能性を垣間見せてくれる遺跡であると考えられる。



第251図 大谷遺跡位置図



第252図 大谷遺跡出土遺物実測図
(注(9)文献より)



第253図 広田遺跡位置図

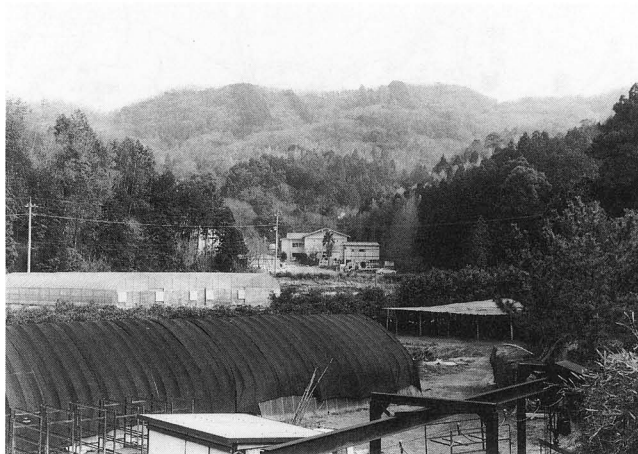


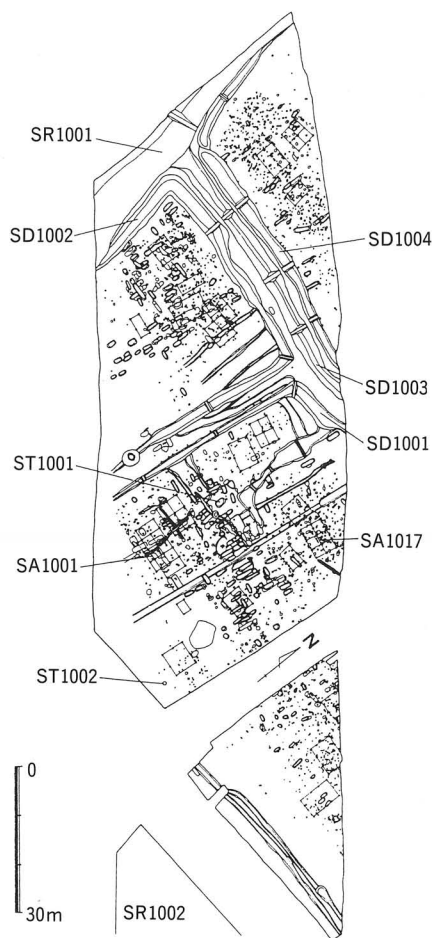
写真3 広田遺跡 (調査地点遠景)

3 鎌倉時代の集落遺跡

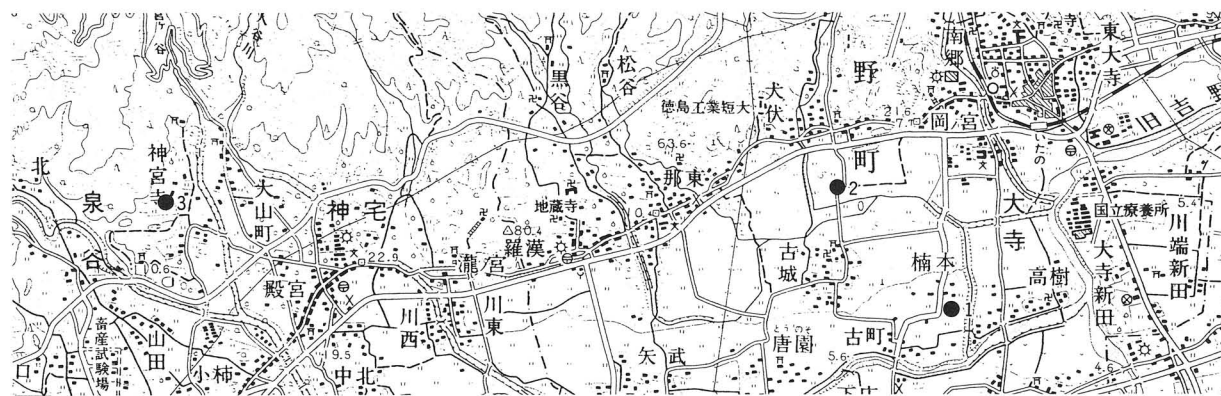
「はじめに」でもふれたように、旧稿で、鎌倉時代に入ると沖積低地の開発が急速に進展し、鎌倉後期には周溝をともなう連続した屋敷地を単位とする集落景観が沖積低地で見られることを指摘した。旧稿の中でも徳島県内の事例を取り上げたが、行論の関係上ここでも再度紹介し、旧稿での指摘を確認したい。

(1) 黒谷川宮ノ前遺跡（板野町犬伏）

黒谷川宮ノ前遺跡は、板野町犬伏に所在し、犬伏谷川によって形成された自然堤防上に位置する。第254図の遺構配置図に示したように、本遺跡からは周溝によって区画された連続する屋敷地が検出されている。この周溝屋敷地の展開する第一遺構面は標高3.5m前後であり、黒色土器、瓦器椀、備前播鉢・甕、瀬戸焼花瓶・天目茶碗など平安期から室町期にわたる遺物が出土したが、1号屋敷地北東隅柱穴から地鎮にともなって埋納されたと考えられる青磁碗や南東隅で検出された甕棺墓に転用されている備前焼甕の年代観から、その主体は13世紀末～14世紀前半にあったものと考えたい⁽¹²⁾。



第254図 黒谷川宮ノ前遺跡遺構配置図
(注12)文献より)



第255図 1 古城遺跡 2 黒谷川宮ノ前遺跡 3 神宮寺遺跡位置図

(2) 古城遺跡（板野町古城）

黒谷川宮ノ前遺跡の南東、板野町古城に位置する古城遺跡は旧吉野川・宮川内谷川・黒谷川などが形成した氾濫原の中の微高地上に立地する。本遺跡からもL字状に屈曲した溝が検出されたが、溝内から出土した瀬戸焼卸目皿、亀山焼壺などから、その主体は14世紀代にあったものと考えられる⁽¹³⁾。

(3) 矢野遺跡（徳島市国府町）

徳島市国府町矢野に位置する矢野遺跡は、律令制下の国衙・国分寺所在地であるとともに⁽¹⁴⁾、縄文時代の土器群や弥生時代後期の集落内から周囲に柱穴をともしつつ銅鐸が出土するなど、長期にわたり集落が営まれた場所である⁽¹⁵⁾。さらには、周囲の丘陵部には気延山を中心に古墳が相当数存在する。このように縄文時代・弥生時代から律令制時代にかけての遺構・遺物で注目される矢野遺跡およびその周辺であるが、中世の遺構面が大部分後世の削平を受けている模様で、当該期に相当する遺構に出会えることは少ない。しかし、四国電力応神東線鉄塔建替工事に伴う調査では、限定された面積の調査ではあったものの、埋土より備前産壺や瓦質土器など中世の遺物が出土した「L」字状に屈曲する溝が検出されており、上述した各遺跡のように、鎌倉期段階で矢野地域においても周溝を伴った屋敷地が形成されていた可能性があるものと考えられる⁽¹⁶⁾。

(4) 中島田遺跡（徳島市中島田町）

徳島市中島田町に所在する中島田遺跡については、1～2次調査の報告書に基づいて前稿でも取り上げたが、本報告書刊行に伴う3～5次調査分の整理作業を担当するなかで、若干見解の修正が必要であると感じている。前稿では周溝を伴う連続した屋敷地が展開する鎌倉後期集落の一事例として取り上げたが、遺跡の両端が流路によって切られていることから中洲上に形成された集落である可能性が高いこと、本報告書の考察で山下知之氏が指摘されているように吉備系土師器碗が集中的に見られ、椀形態の土器として周辺他遺跡で顕著に見られる和泉型瓦器碗を数の上から圧倒することなどを考慮すれば、物資の集散地としての町場的な景観が形成されていたものと考えられるのである。

以上の各集落遺跡は、いずれも吉野川下流域の沖積低地に立地したものであり、しかも周溝をともしつつ屋敷地が形成されていたことを示すものである。



第256図 矢野遺跡位置図



第257図 中島田遺跡位置図

4 室町時代の集落遺跡

南北朝期を1つの画期として、次第に洪積段丘上にも安定した集落が営まれ始めることも、「はじめに」で記したように、拙稿「中世低地集落の変容」で指摘したことであるが、県内の発掘調査事例からこのことが確認できる。ここでは、それらの事例を紹介し、洪積台地上に立地する集落の安定化は南北朝期から室町期にかけてのことあることを確認しておきたい。

(1) 上喜来蛭子～中佐古遺跡（市場町上喜来）

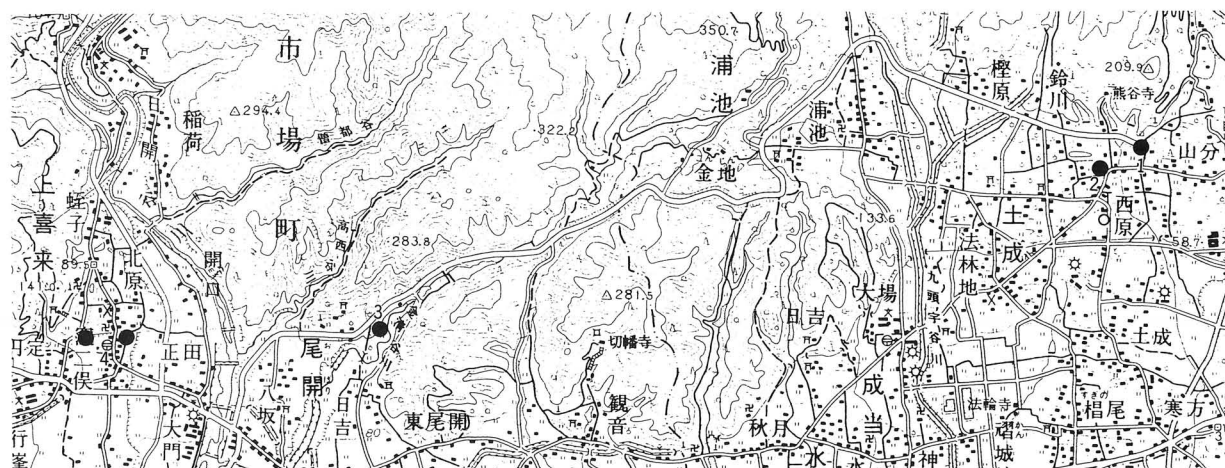
上喜来蛭子～中佐古遺跡は市場町上喜来窪二俣の日開谷川右岸に広がる標高60m前後の丘陵部に位置する。本遺跡からは11枚の土師質皿と銭貨15枚及び多数の靱をともなった柱穴が検出されたことでも注目されるが、他に出土している備前焼播鉢、玉縁状口縁をもつ備前大甕、龍泉窯系青磁碗の年代観から15世紀から16世紀前半にかけての時期にその盛期を迎えたものと思われる。また、平安～鎌倉期に該当する遺物は出土していないことも留意する必要がある⁽¹⁷⁾。

(2) 日吉～金清遺跡（市場町尾開）

日吉～金清遺跡は市場町尾開字日吉の標高120mの段丘上に位置し、掘立柱建物跡、土坑墓等が検出された。間壁編年Ⅳ期後半の備前焼播鉢や龍泉窯系青磁、白磁、瀬戸焼天目茶碗、三足土釜等の出土遺物の年代観から15世紀代から16世紀前半にかけての時期に相当する遺構群であると考えられる⁽¹⁸⁾。

(3) 薬師遺跡（美馬町薬師）

薬師遺跡は美馬町薬師の標高120mほどの河岸段丘上に位置する。南端に段の塚穴のあるこの段丘は、野村谷川が形成した開析谷を臨む形になっており、急峻な断崖となっている。なお、当遺跡の南部の吉野川沿いの微高地には白鳳期の創建である郡里廃寺や「駅家」の字名が残る。



第258図 1 土成前田遺跡 2 前田遺跡 3 日吉～金清遺跡
4 上喜来蛭子～中佐古遺跡位置図